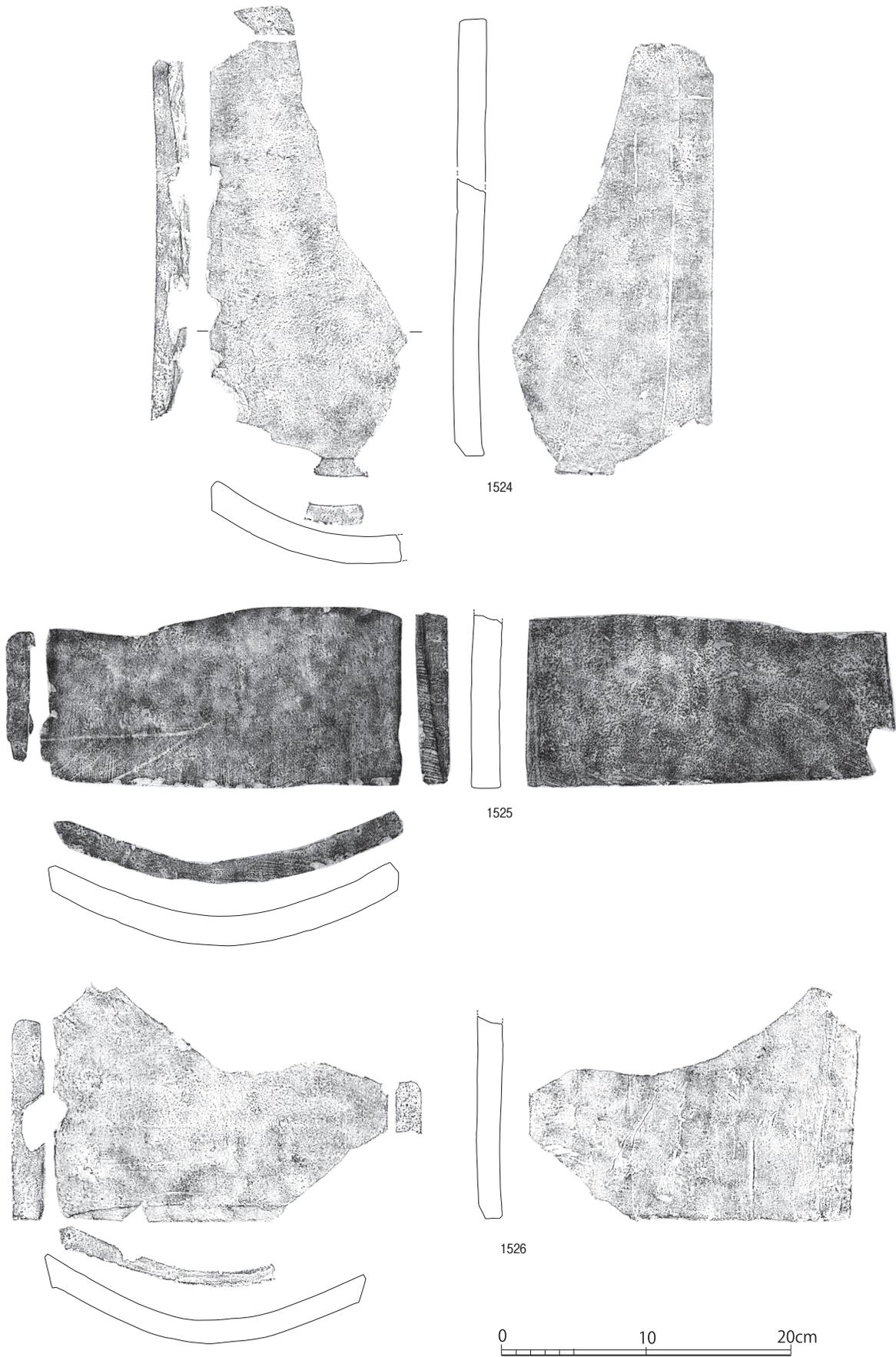
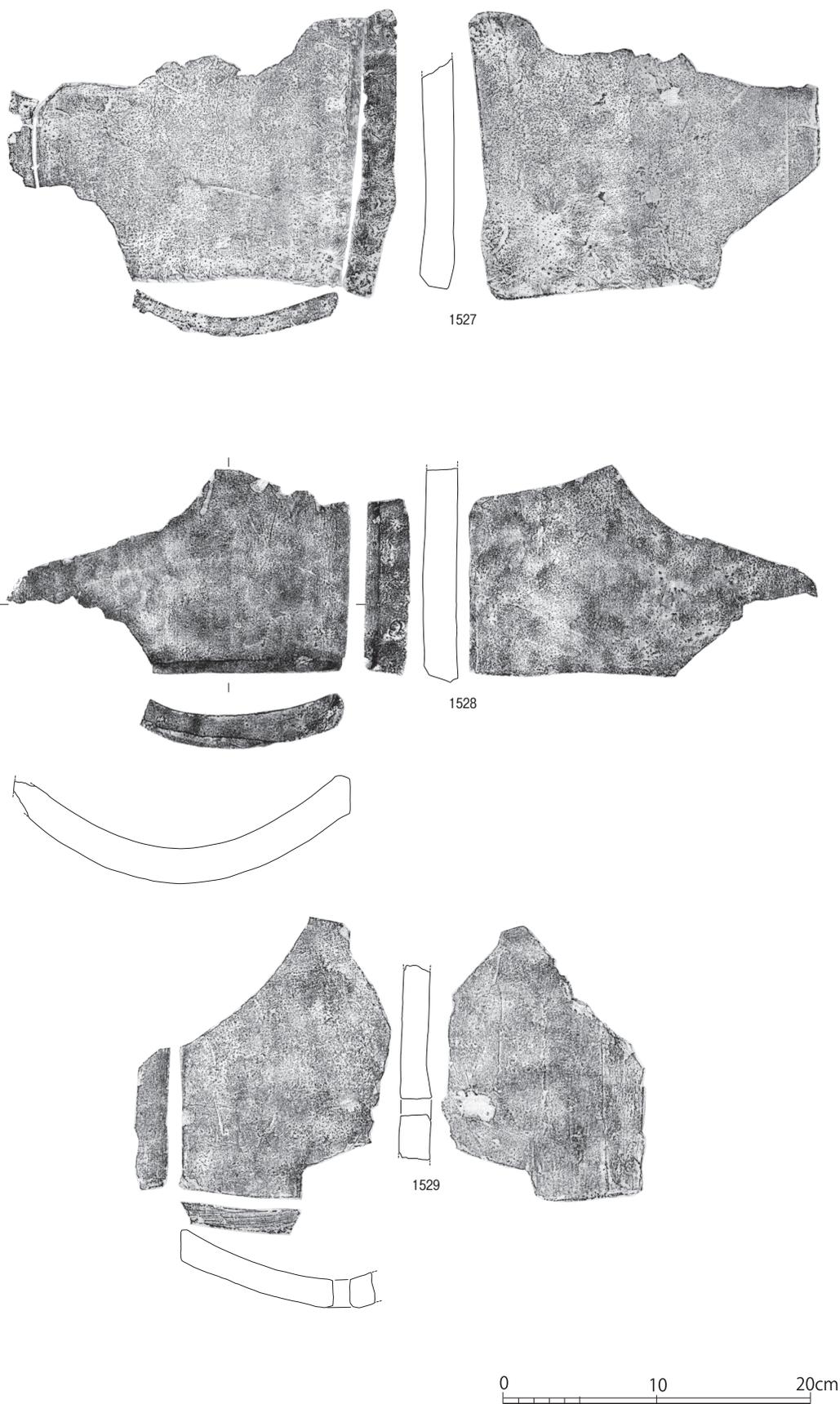


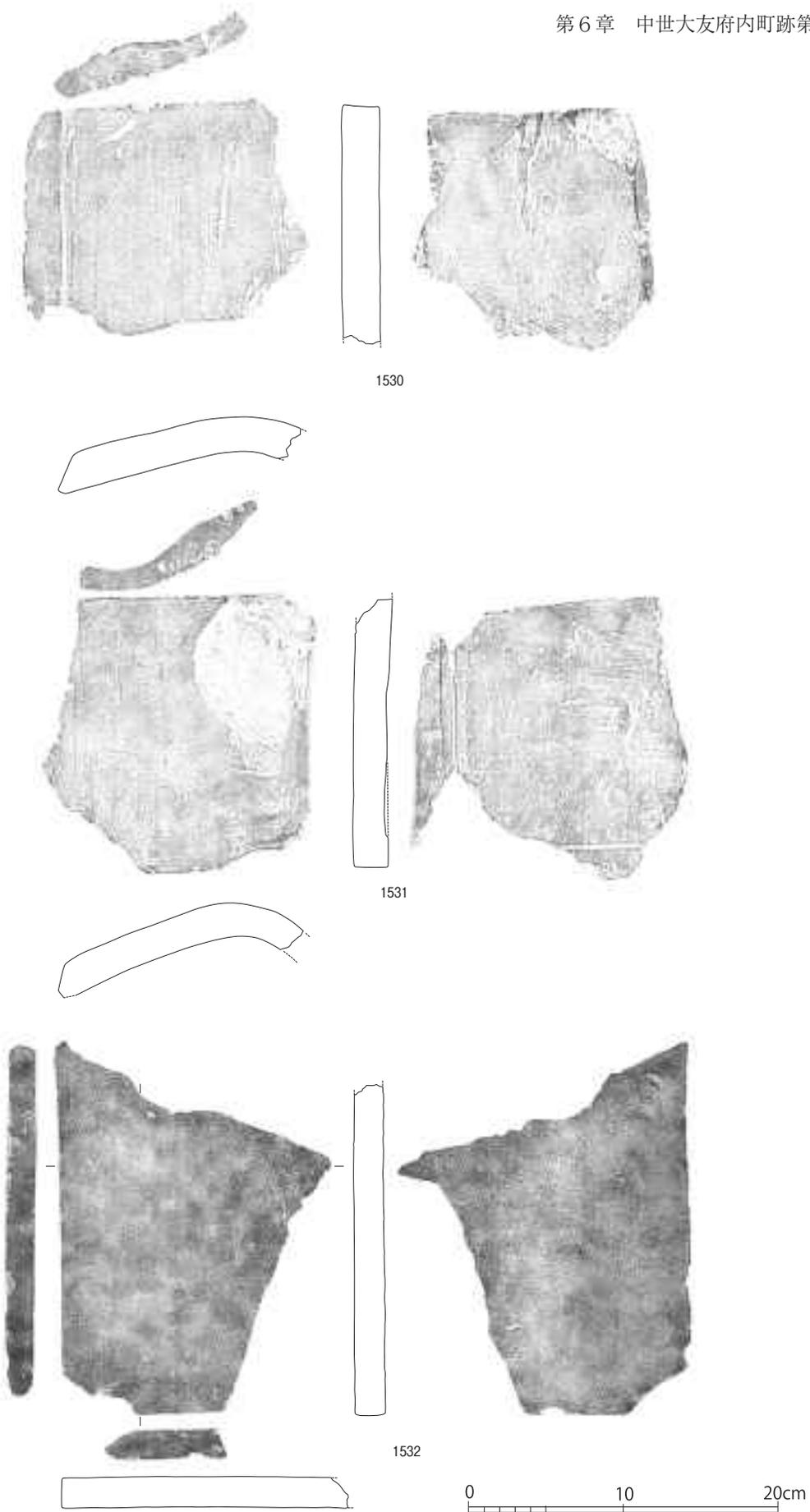
第176図 SD120出土遺物(59) (1/4)



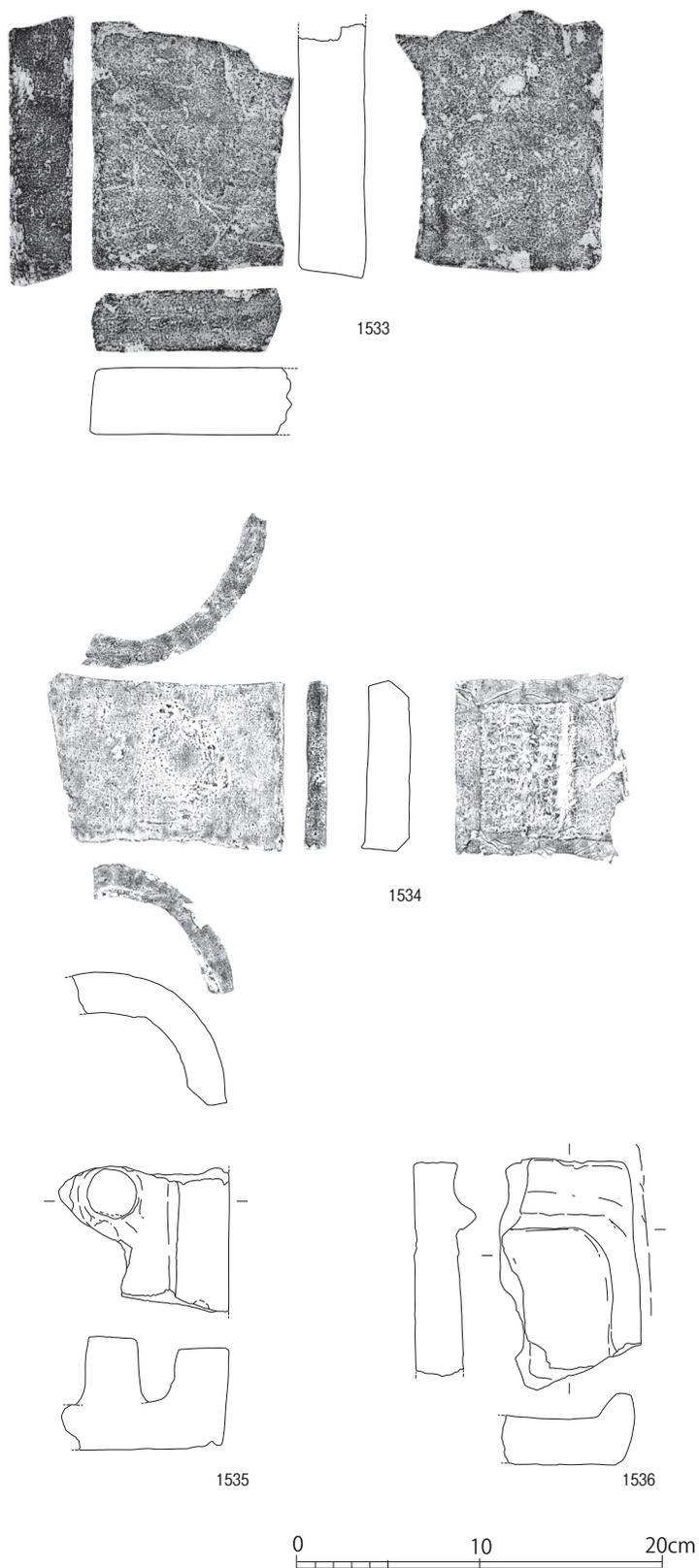
第177図 SD120出土遺物(60) (1/4)



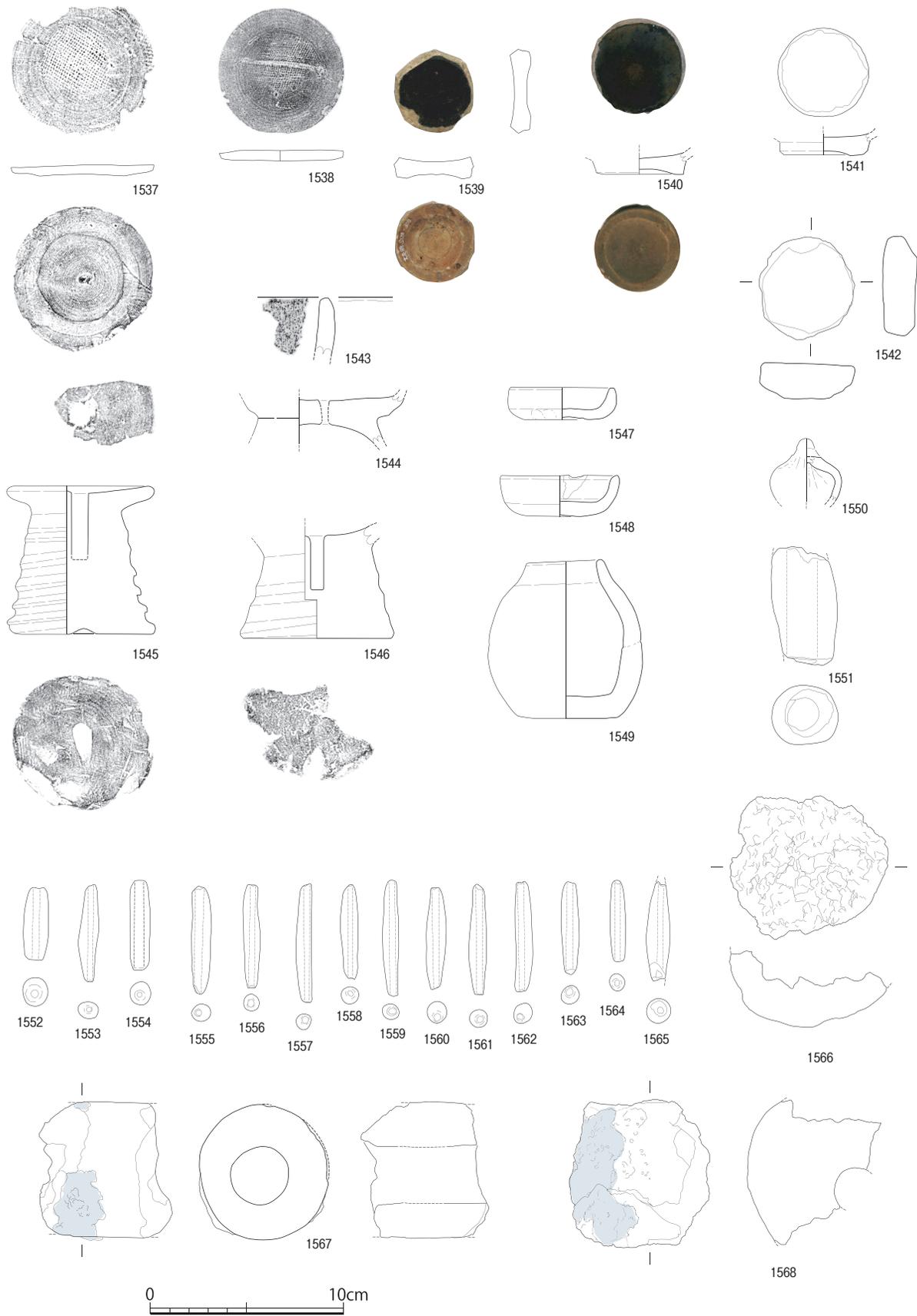
第178図 SD120出土遺物(61) (1/4)



第179図 SD120出土遺物(62) (1/4)

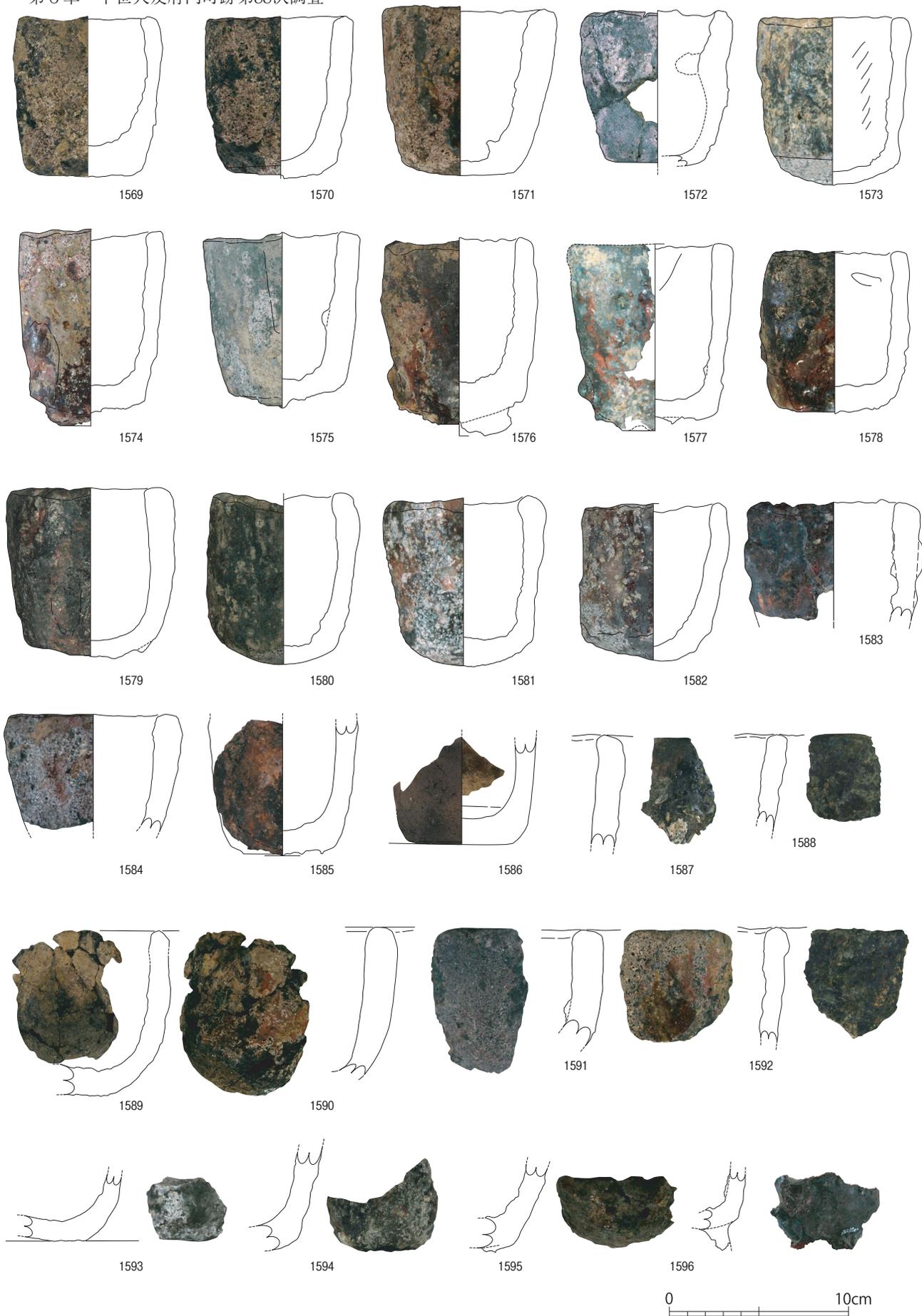


第180図 SD120出土遺物(63)(1/4)

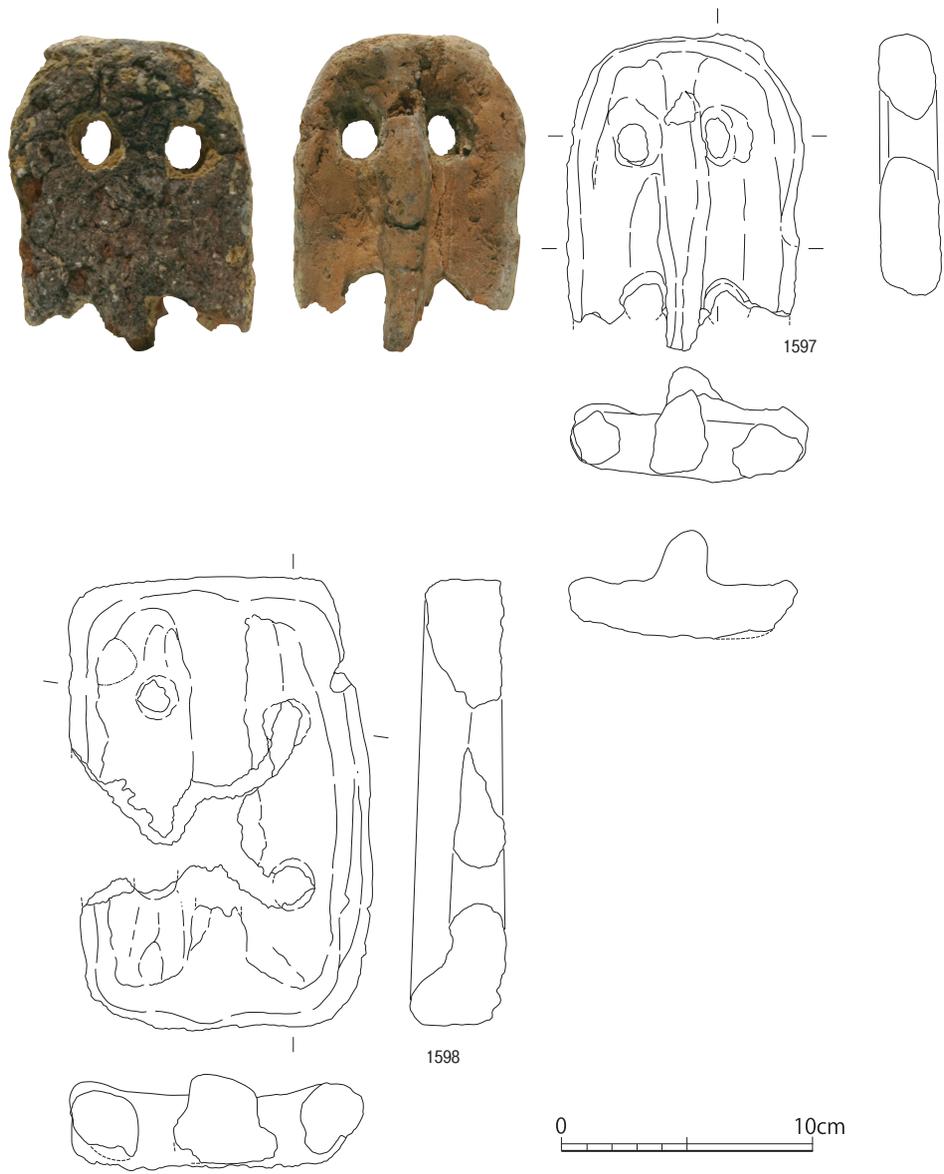


第181図 SD120出土遺物(64) (1/3)

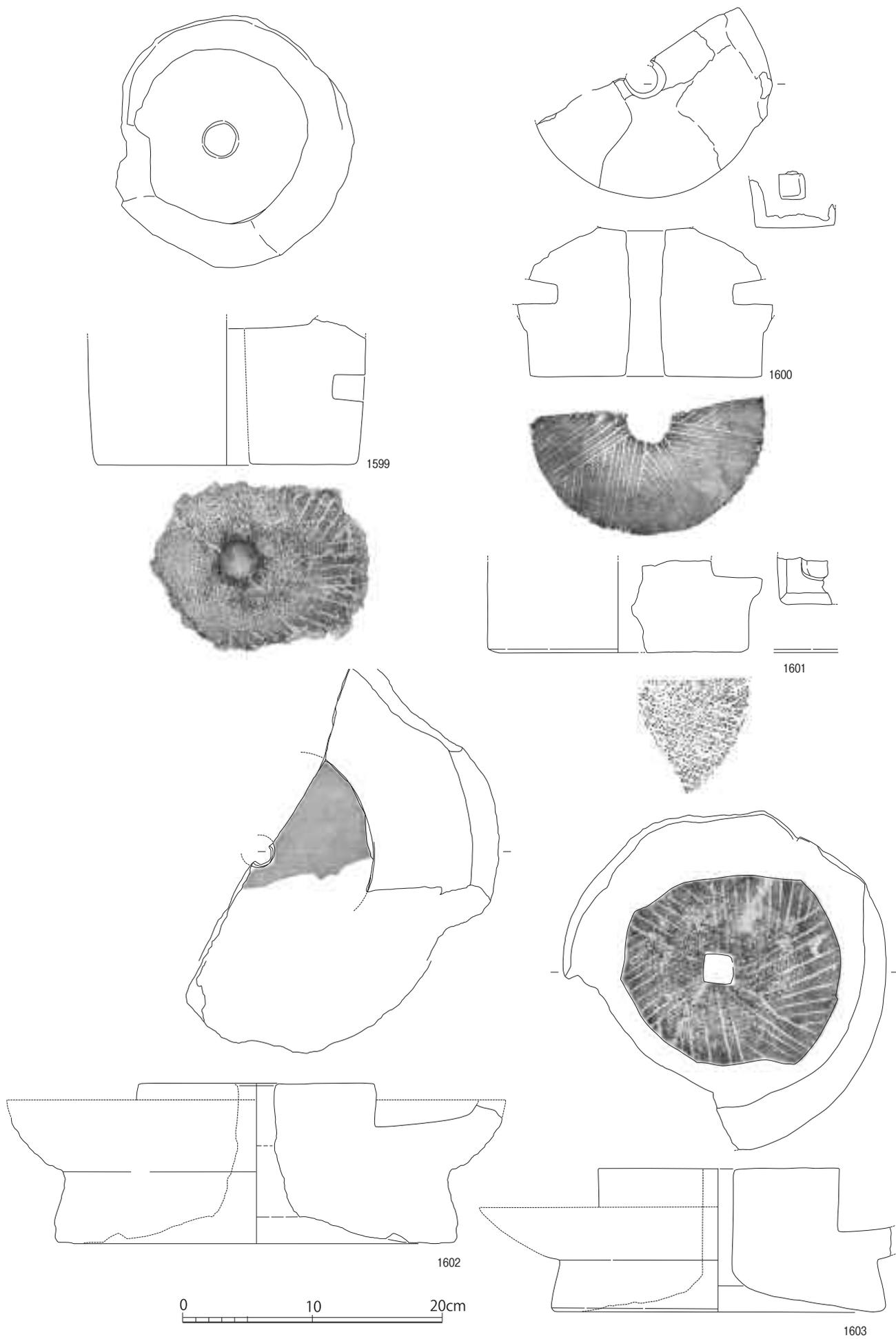
第6章 中世大友府内町跡第88次調査



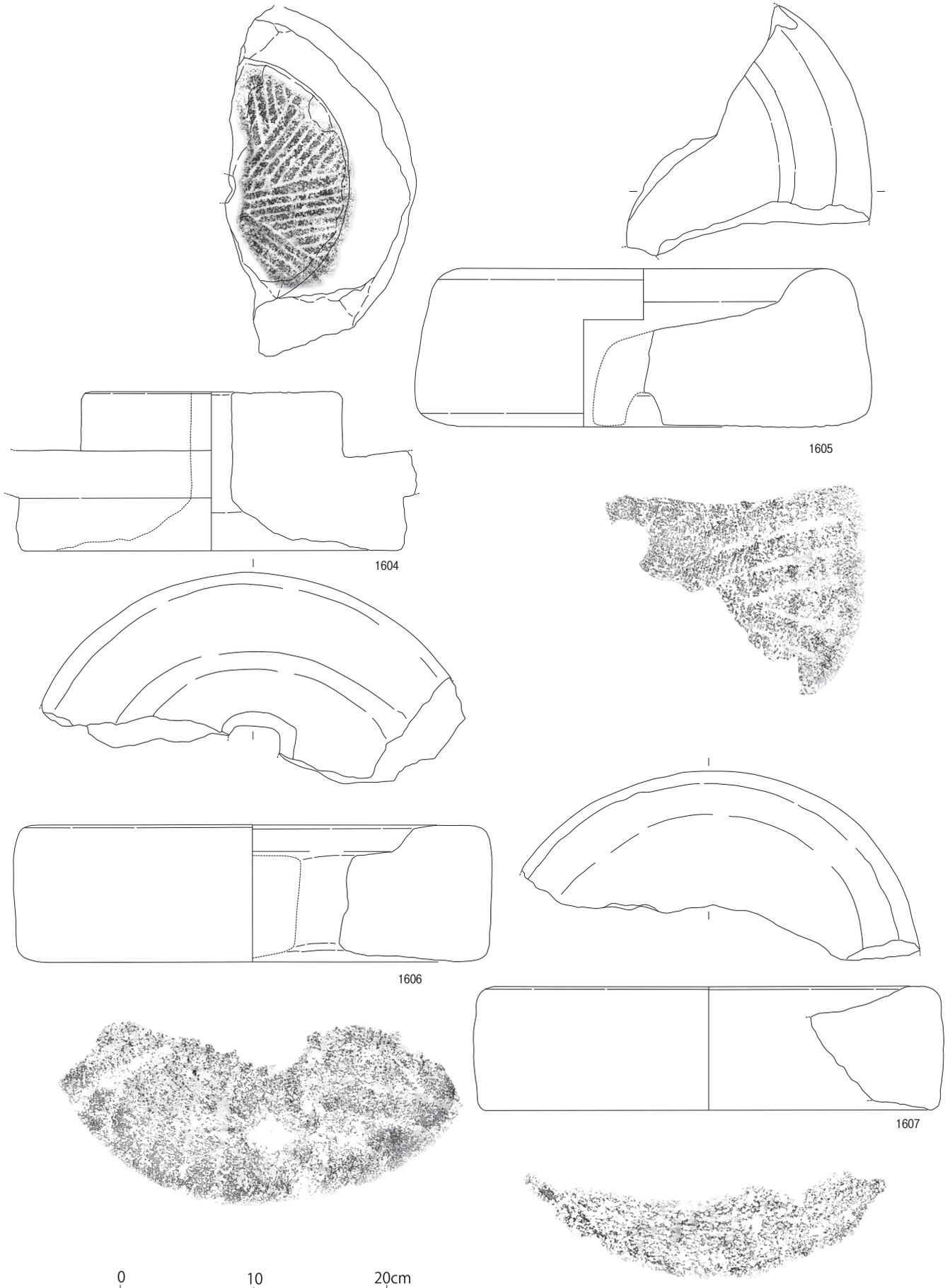
第182図 SD120出土遺物(65) (1/3)



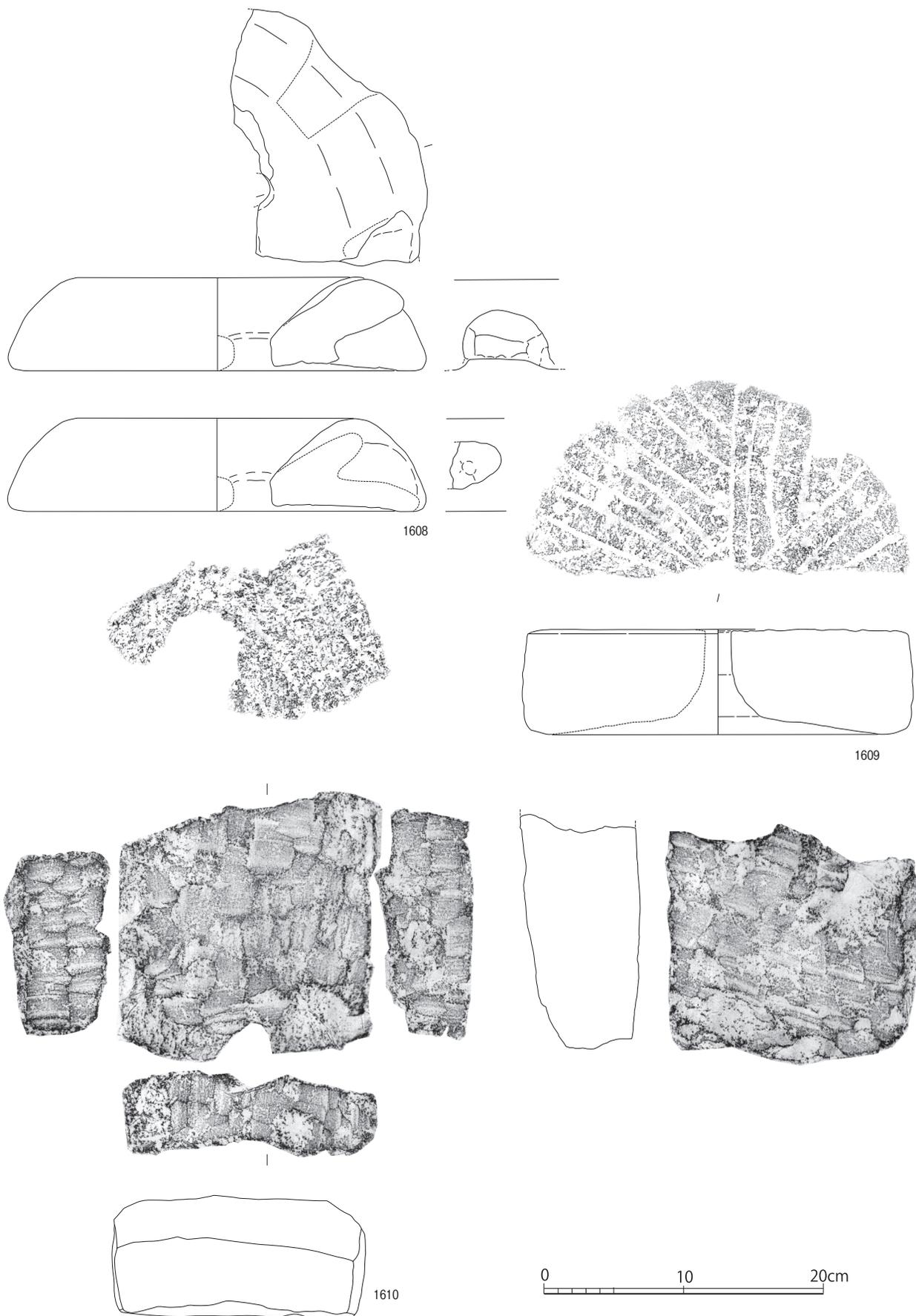
第183図 SD120出土遺物(66) (1/3)



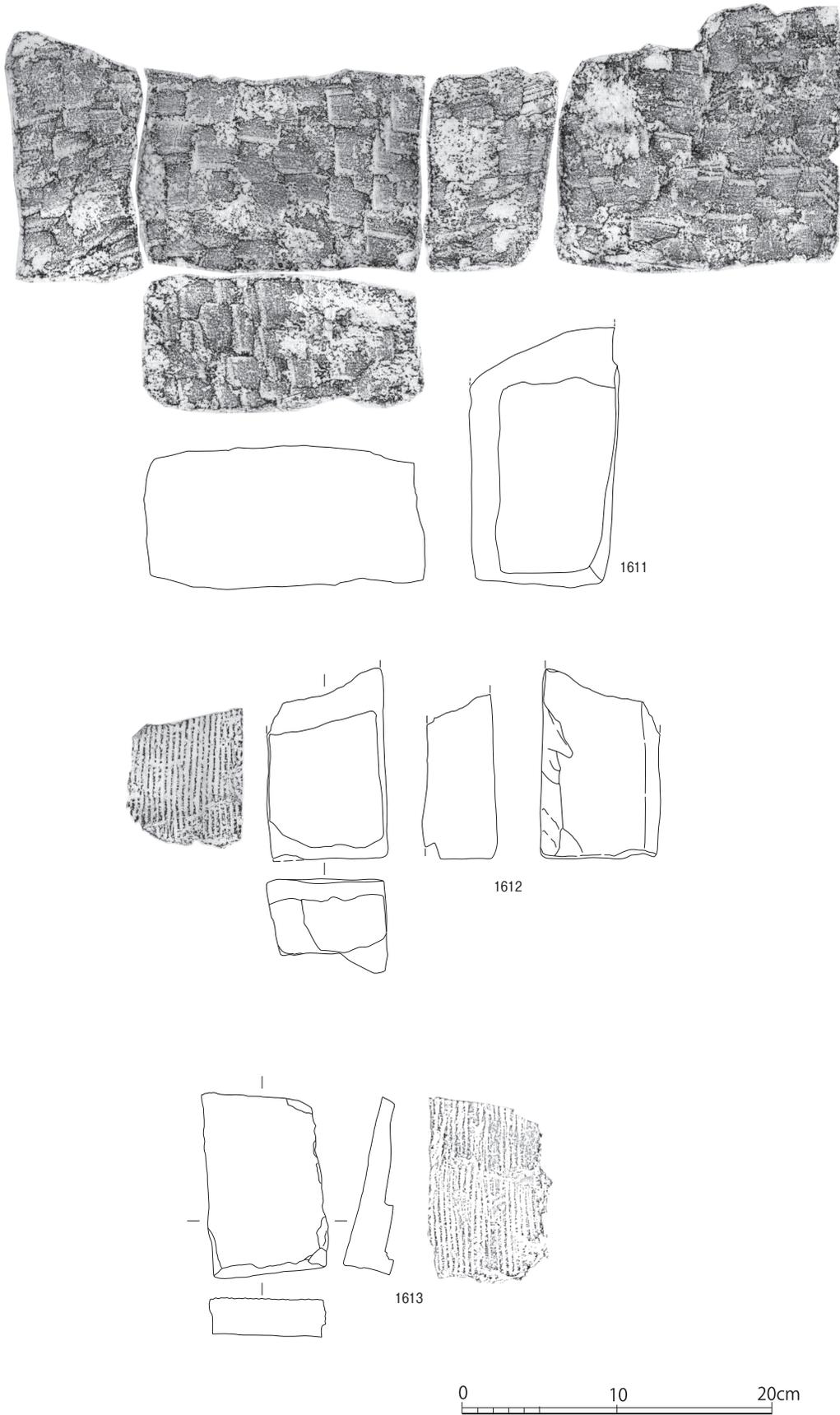
第184図 SD120出土遺物(67)(1/4)



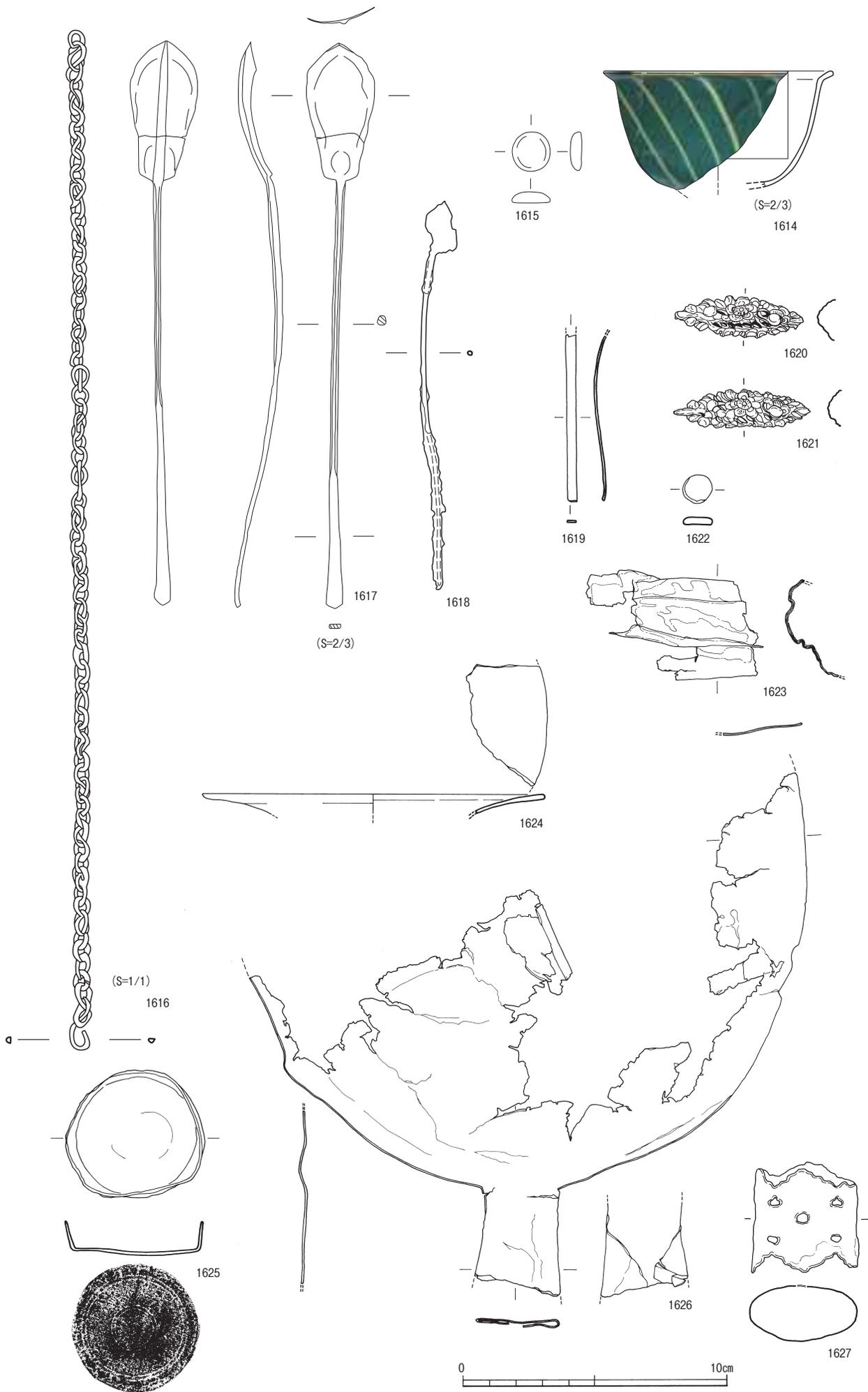
第185図 SD120出土遺物(68)(1/4)



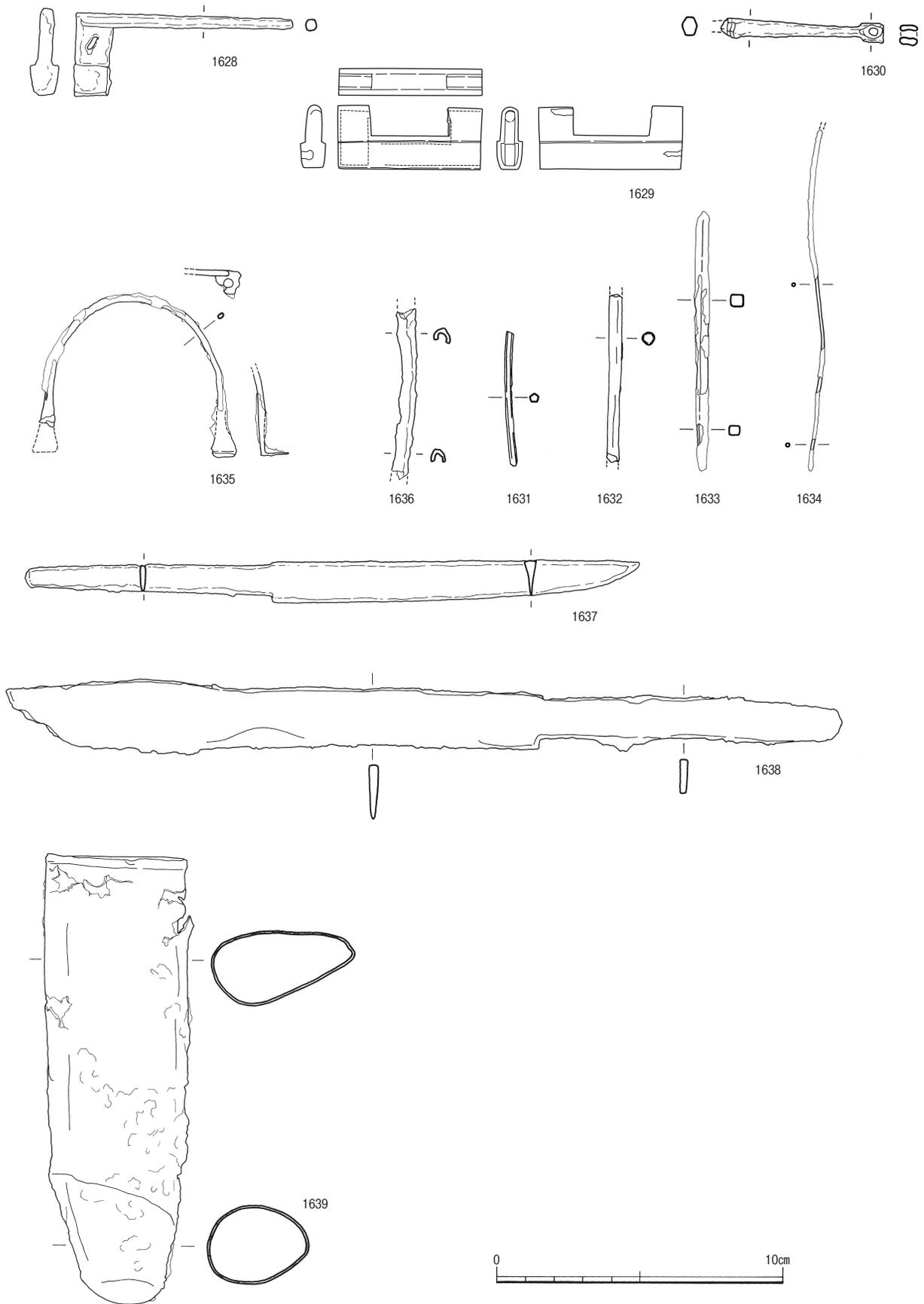
第186図 SD120出土遺物(69) (1/4)



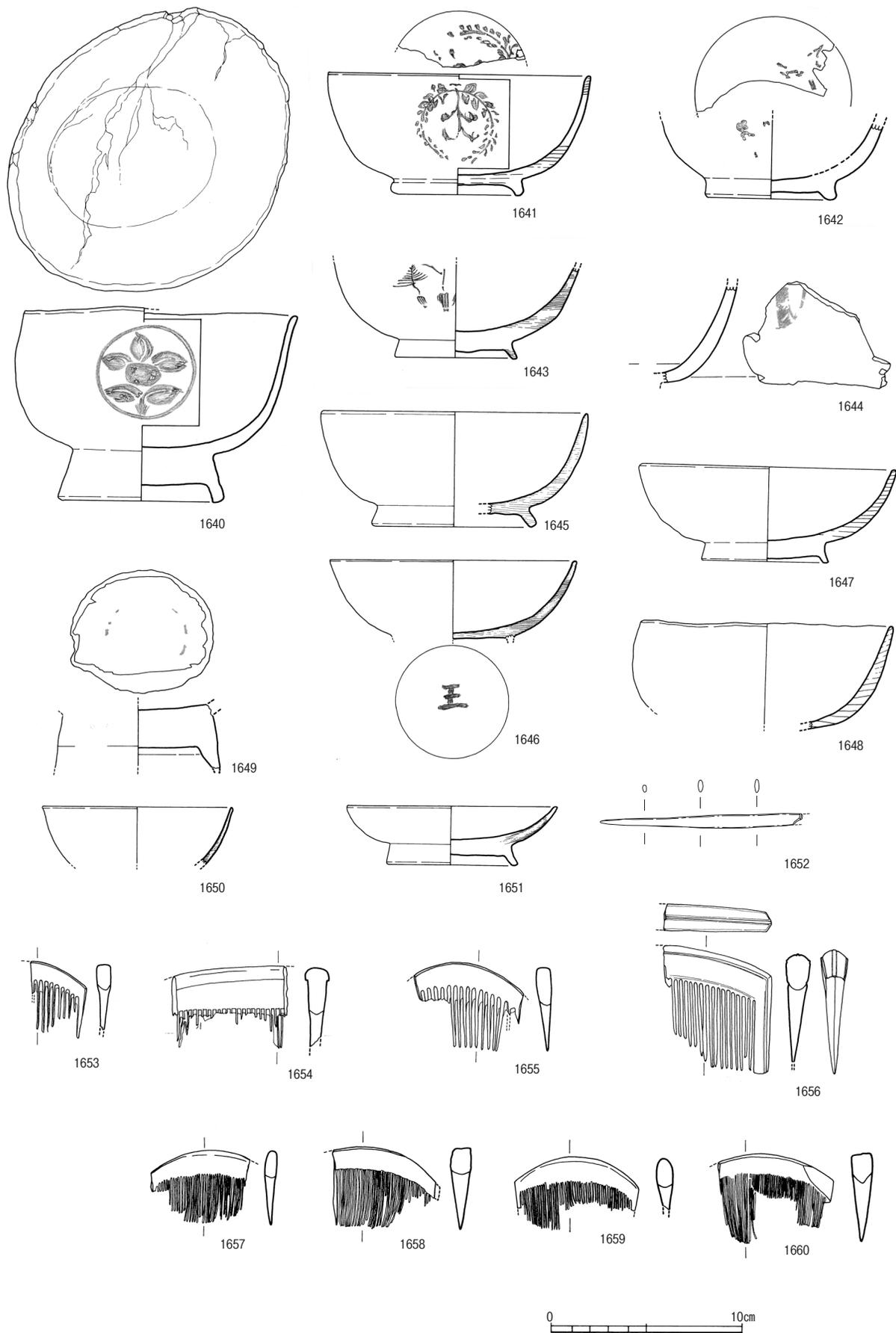
第187図 SD120出土遺物(70) (1/4)



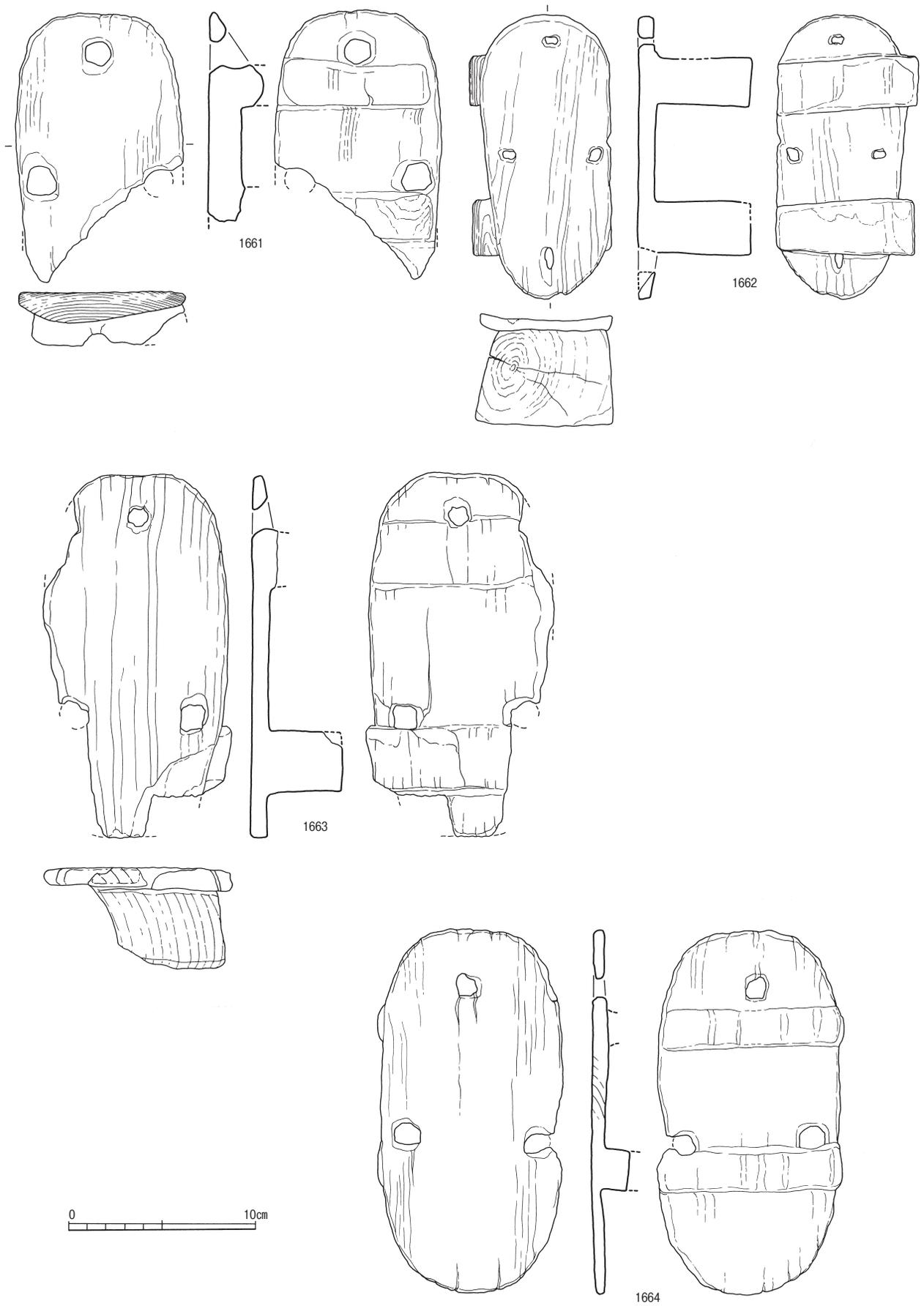
第188図 SD120出土遺物(71) (1/1,2/3,1/2)



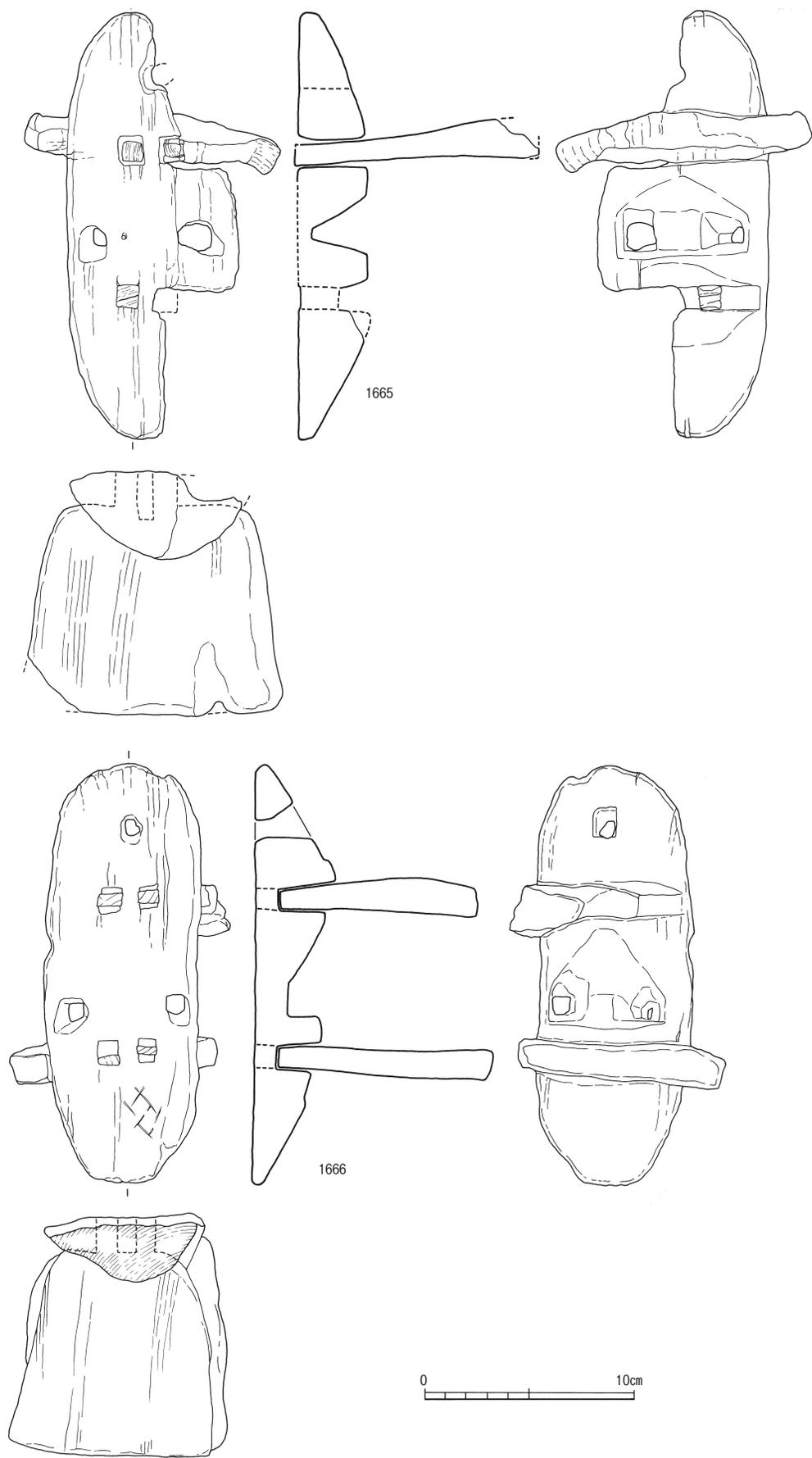
第189図 SD120出土遺物(72) (1/2)



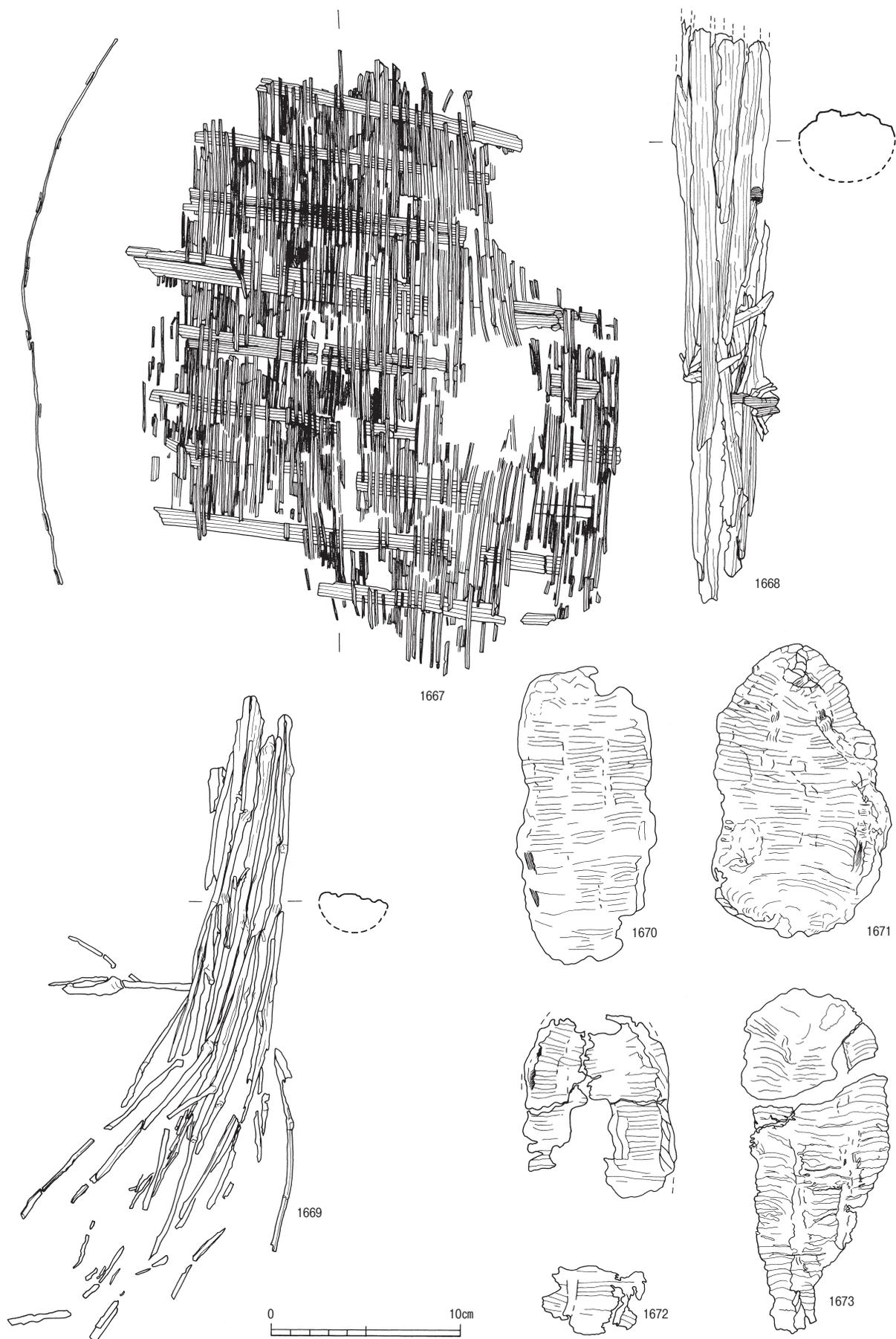
第190図 SD120出土遺物(73) (1/3)



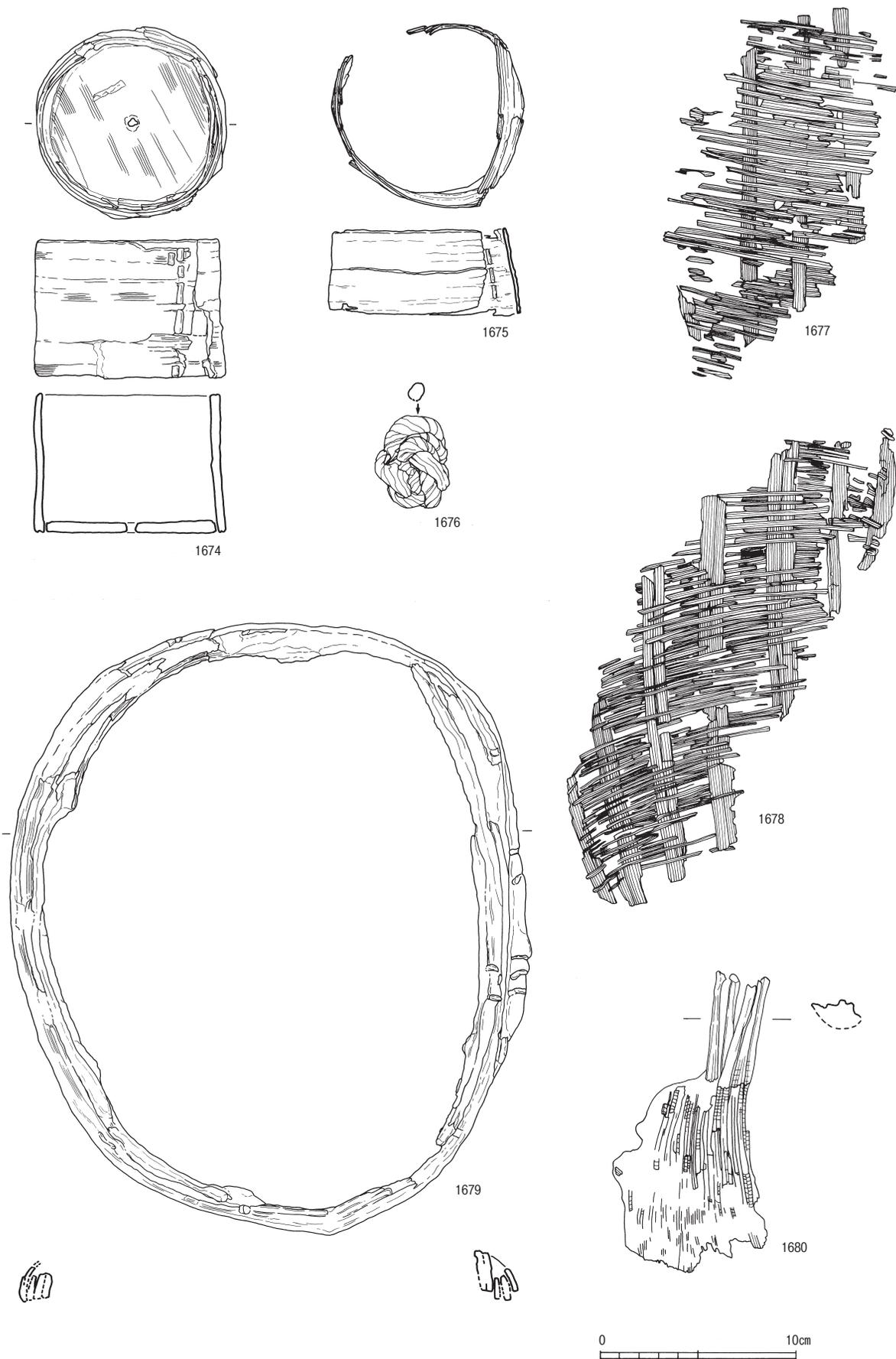
第191図 SD120出土遺物(74) (1/3)



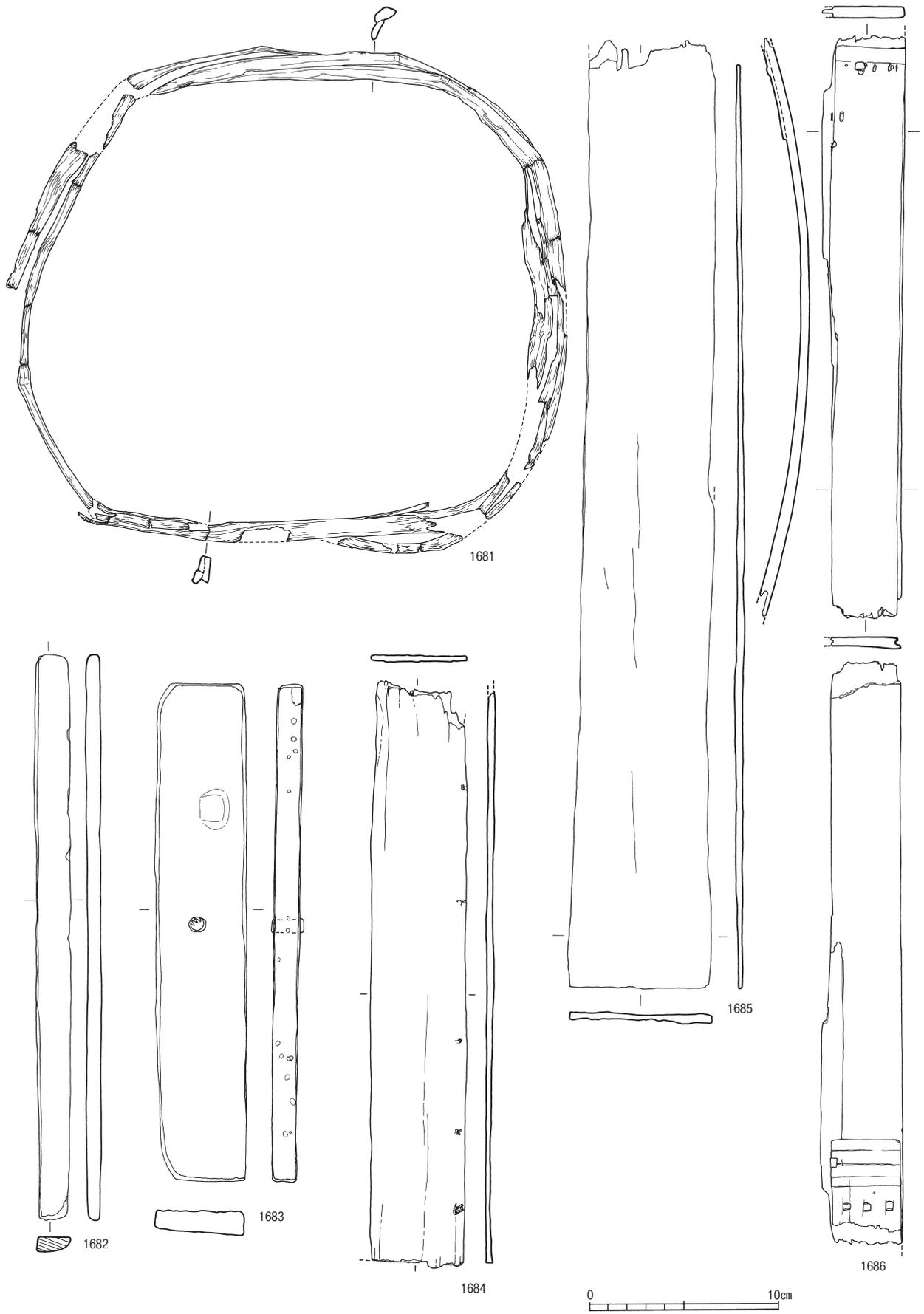
第192図 SD120出土遺物(75) (1/3)



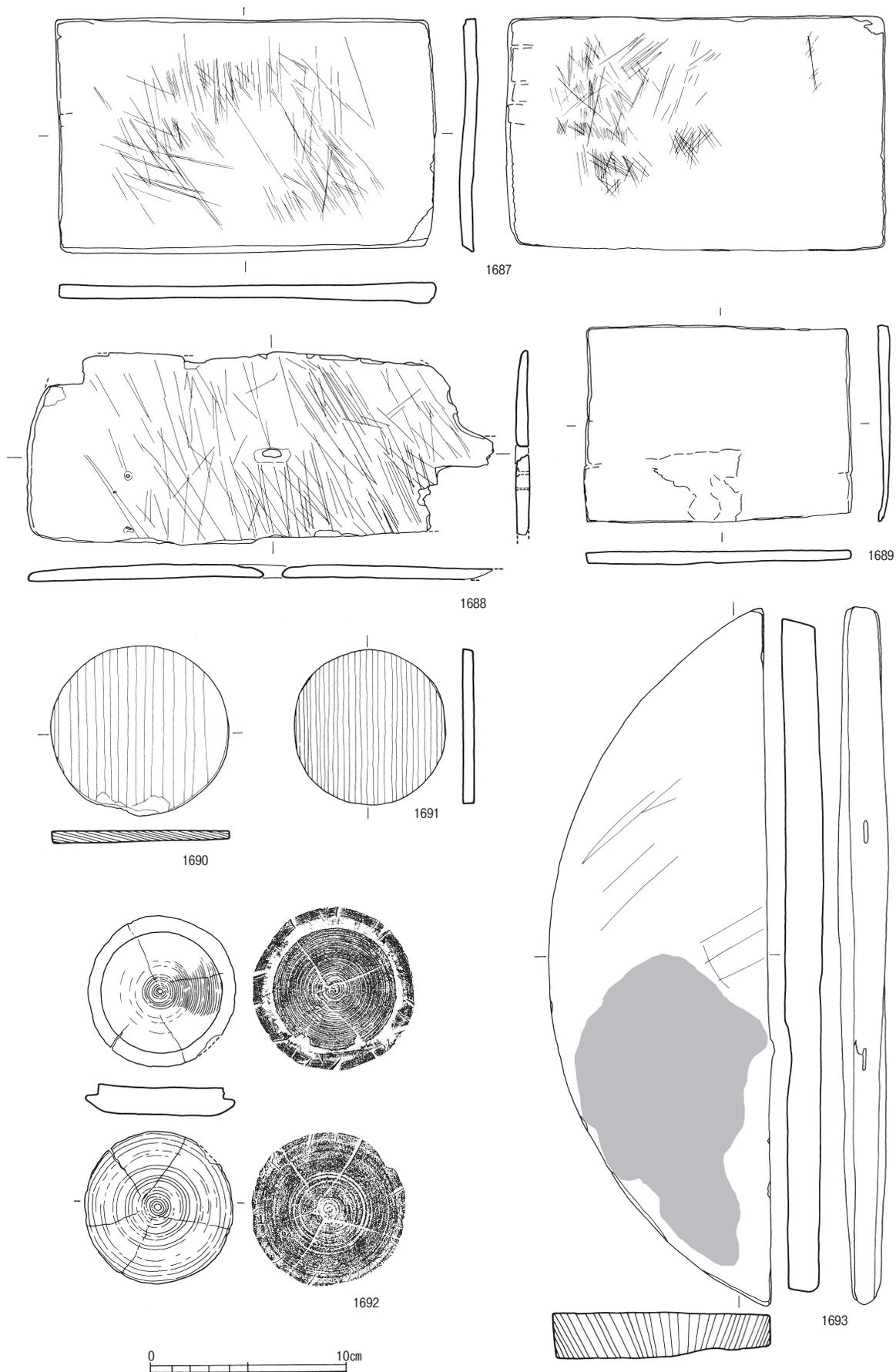
第193図 SD120出土遺物(76) (1/3)



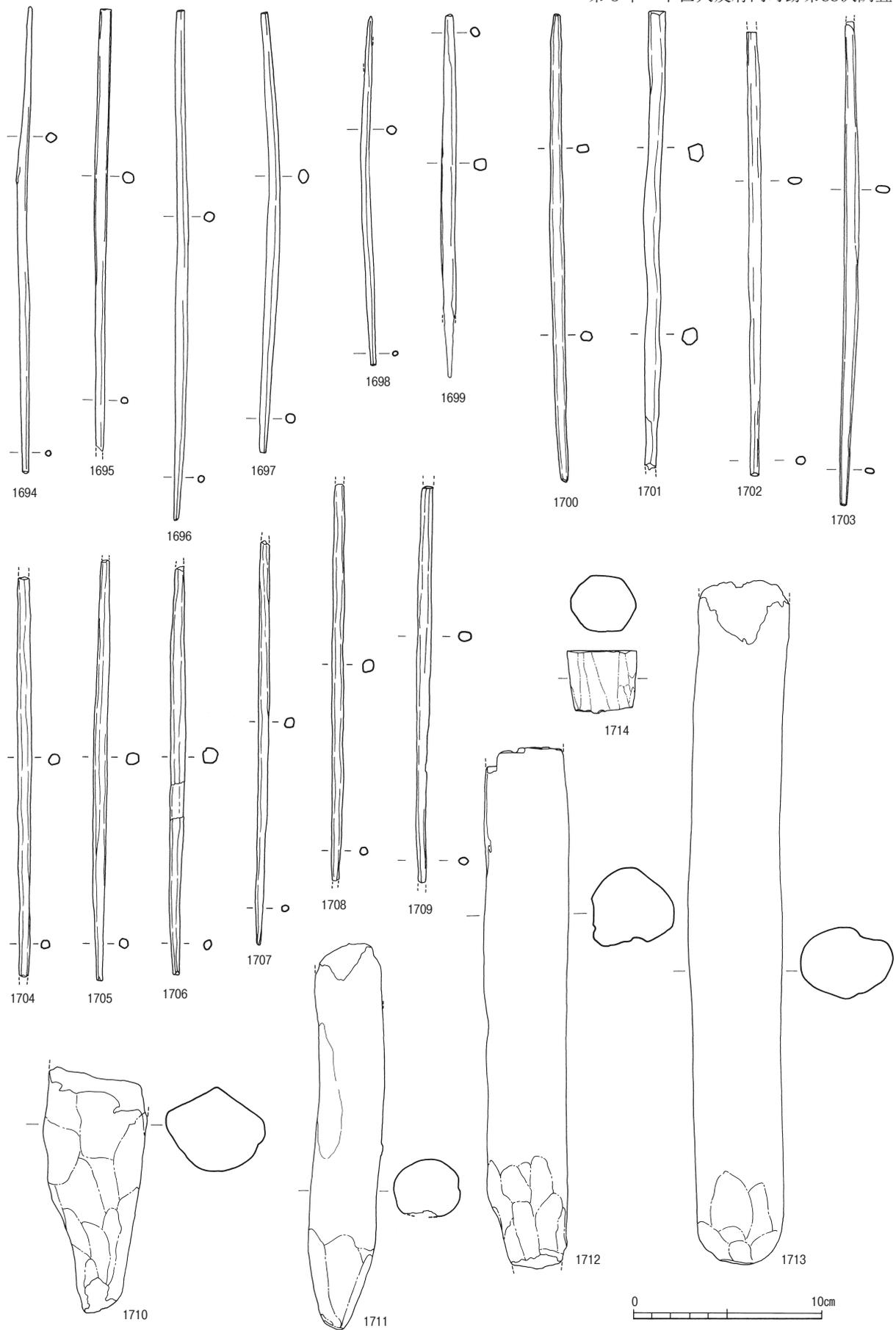
第194図 SD120出土遺物(77) (1/3)



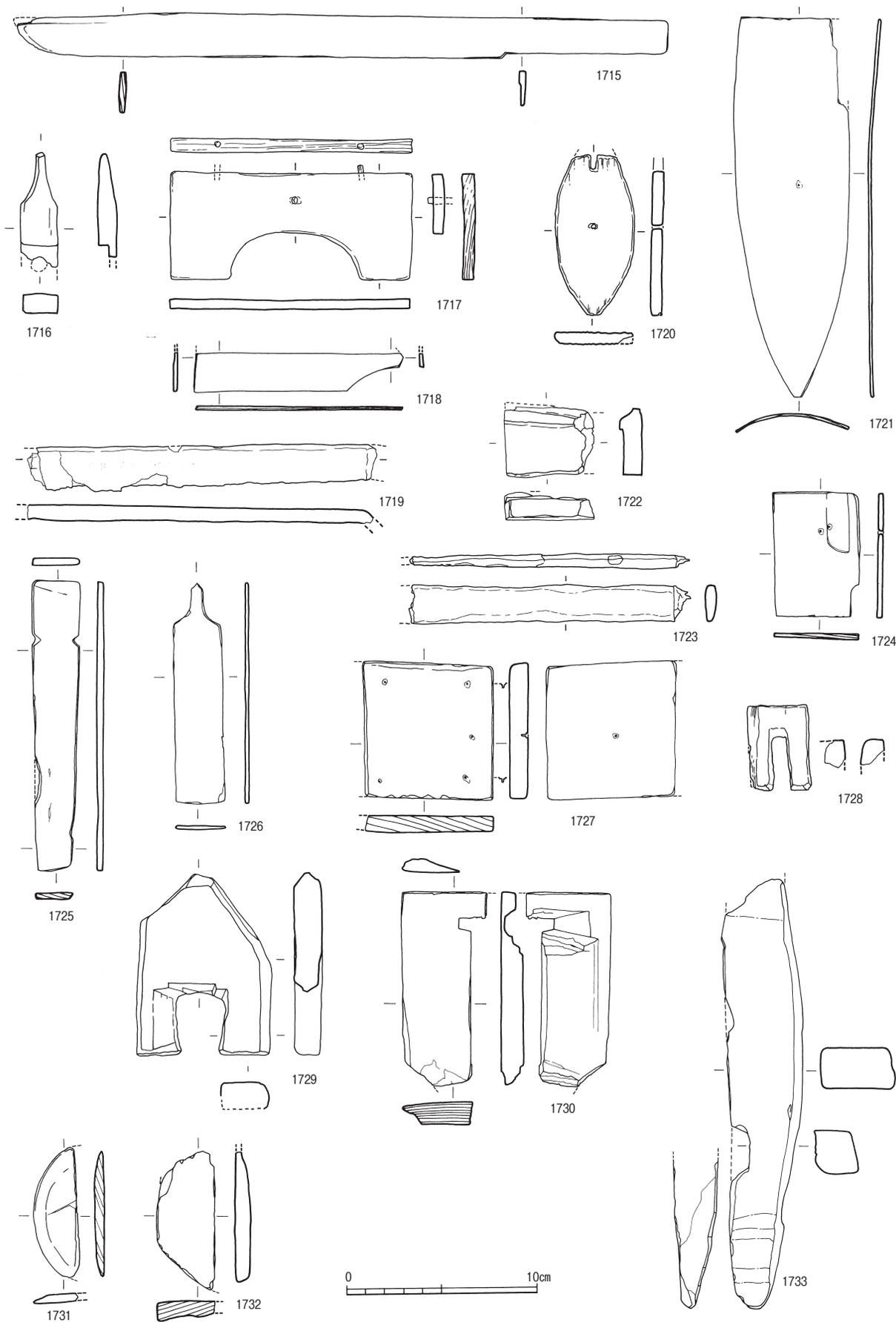
第195図 SD120出土遺物(78) (1/3)



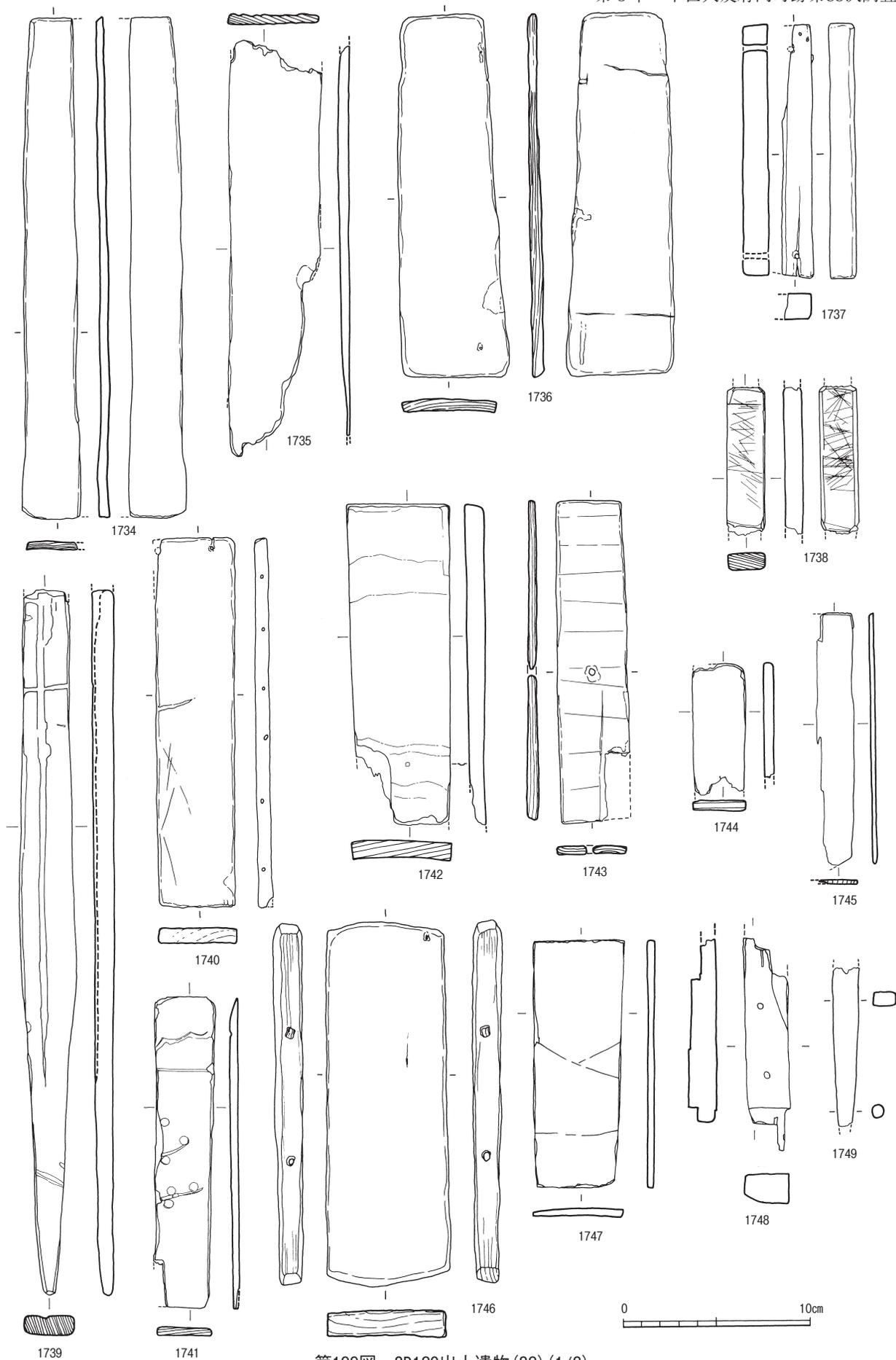
第196図 SD120出土遺物(79) (1/3)



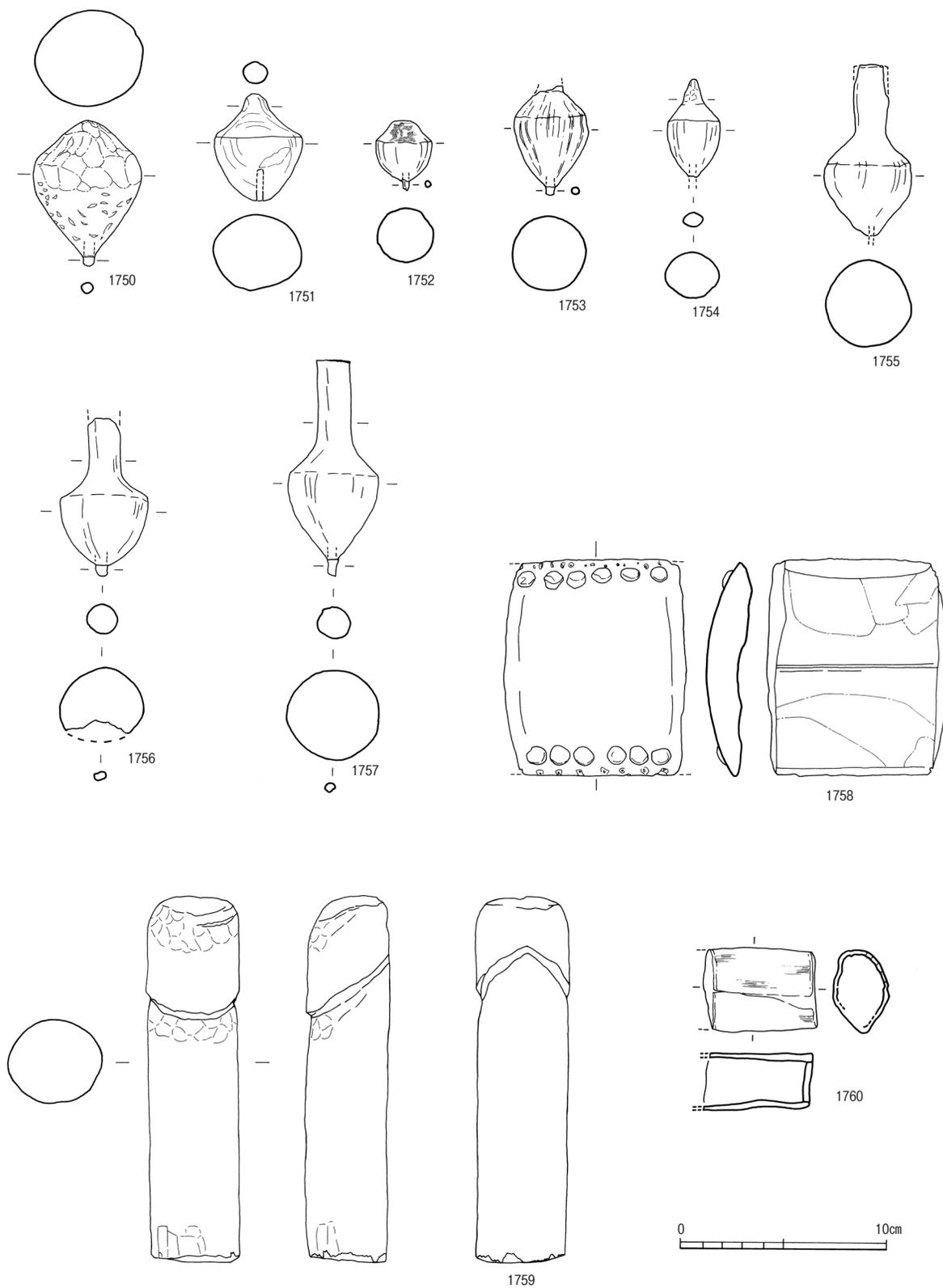
第197図 SD120出土遺物(80) (1/3)



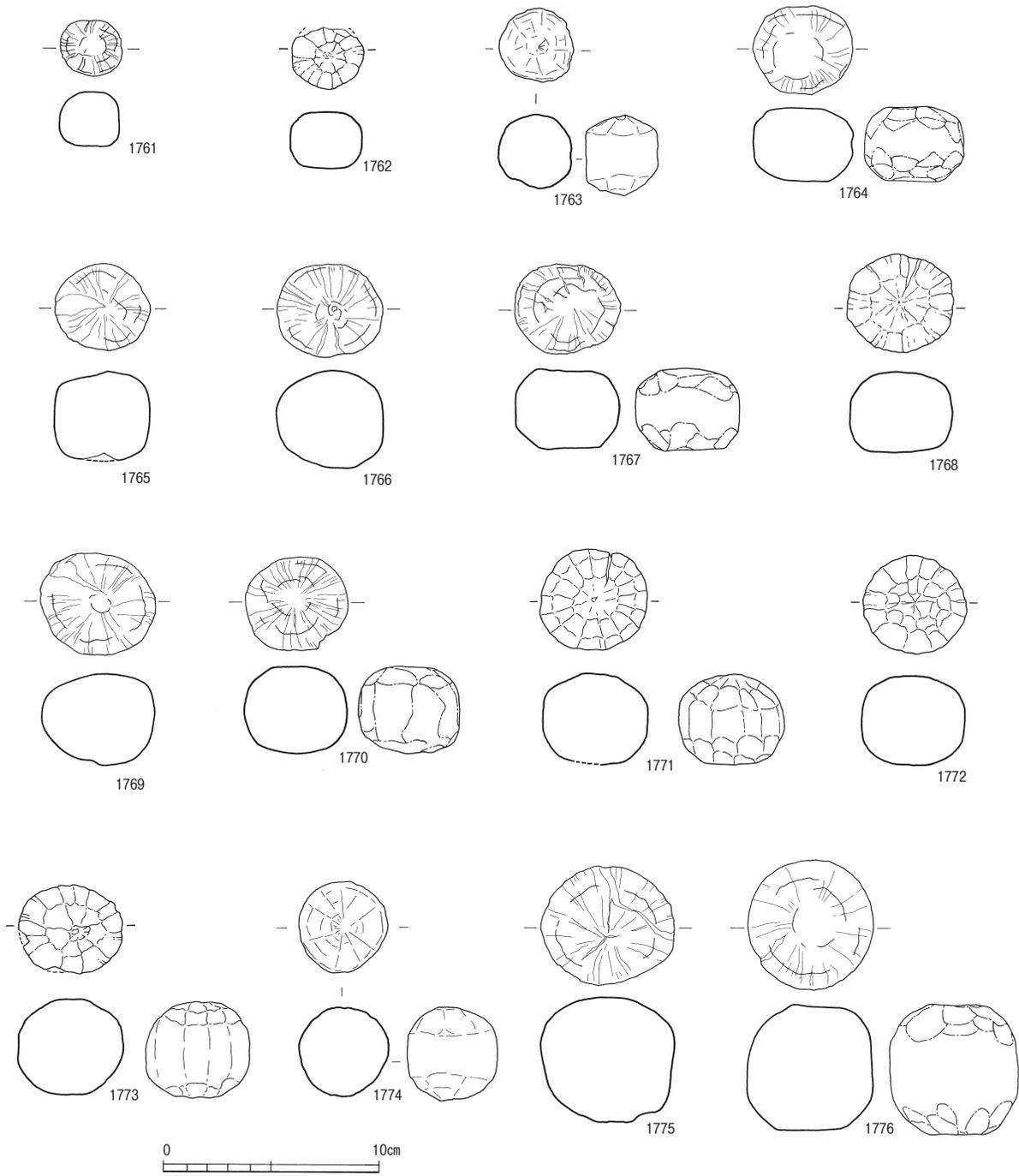
第198図 SD120出土遺物(81)(1/3)



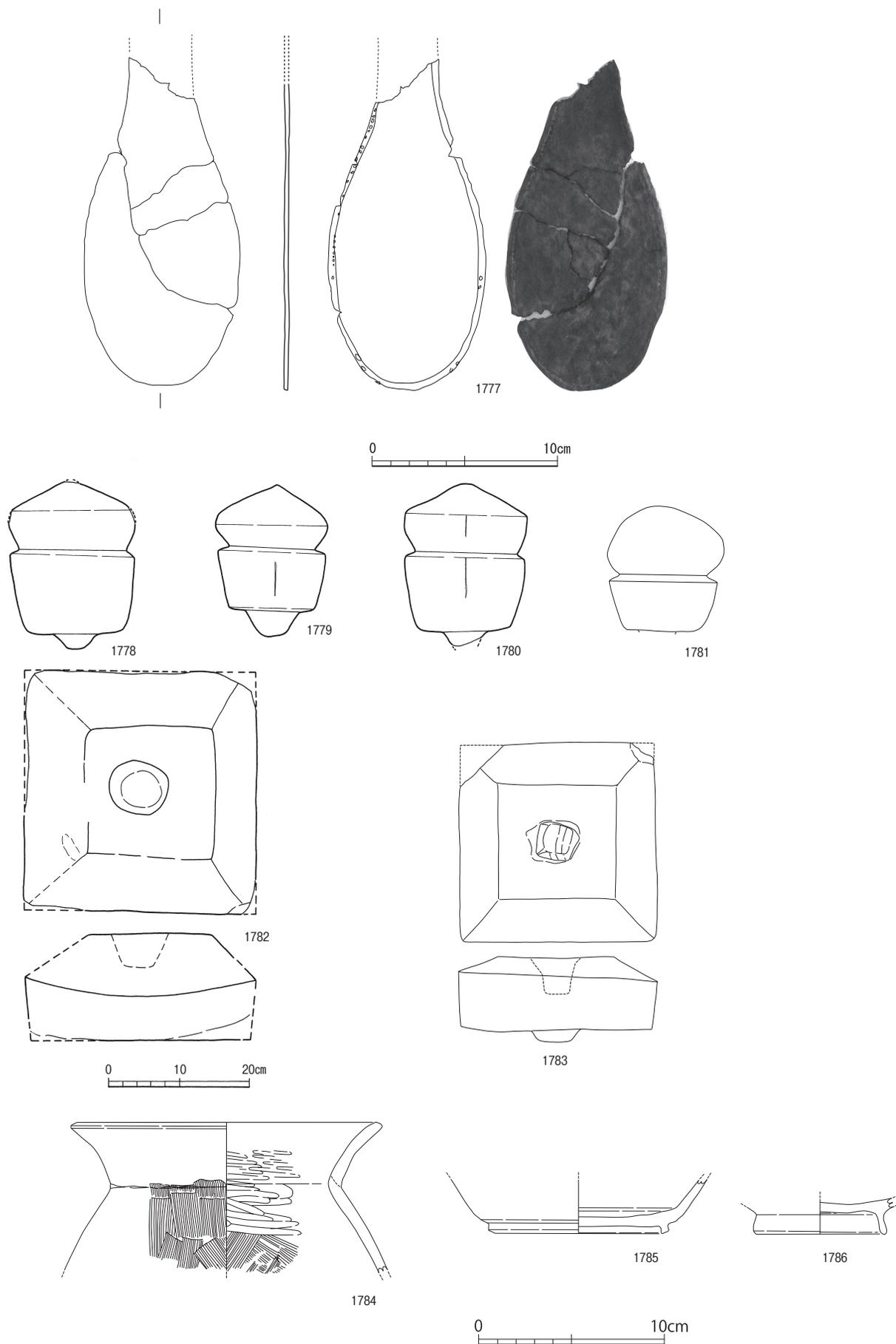
第199図 SD120出土遺物(82) (1/3)



第200図 SD120出土遺物(83) (1/3)



第201図 SD120出土遺物(84) (1/3)



第202図 SD120出土遺物(85) (1/3, 1/8)



SD142 (第204図)

SD142は第2南北街路東側側溝である。東側側溝の中ではSD034に次いで新しい。調査区全体にわたって南北方向にほぼ一直線で検出された。巾は0.55~0.65m、深さは0.30mで、調査区内での総延長は37.4mである。断面形状は概ね箱形を呈する。中央よりやや南側では5.7mにわたって溝の両側面に人頭大から拳大の礫を二段積んでいた。この部分のみ、溝がやや西側に振れている。また、SD120の土層断面図(第111~113図)や調査区北壁土層断面図(第3図)を見ると、第2南北街路と堀との関係がわかる。それによると、SD120の堀が中程まで砂利混じりの土で埋められた後にSD142が掘られている。更にSD120とSD142の中層には焼土混じりの土が堆積しており、これは鳥津氏侵攻に伴う火災に起因する焼土と考えられ、そうするとこのSD142の下限は天正14年(1586年)頃と考えて良いだろう。上限はSD120を遡ることはないので、機能していた期間は数年程度と考えられる。

礫積み

焼土堆積

出土遺物は第205図1810から第211図1890である。1810から1812は青磁。1810は鏝縁の盤で稜花をなす。1811も鏝縁盤で、内面に連弁文を施す。以上は龍泉窯青磁である。1812は菊花皿の青磁で、淡い発色から景德鎮窯青磁と思われる。1813は白磁の皿である。1814から1837は青花である。1814から1817はいわゆる饅頭心タイプの椀で、1814は内外面に玉取獅子を描く。1817も玉取獅子か。1818は石榴?、1819は口縁部に波濤文?を描く。1820は高台内に「大明嘉靖年製」の銘を持つ。以上は景德鎮窯である。1821と1822は漳州窯の椀。1821は大きく折枝文を描き、内面見込みは露胎である。1822は内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。1823から1827は大皿で、1824はF群の皿で、口縁部形状が判らないが1823と1825もその可能性が高い。1824は外面に唐草文、内面見込みに龍を、口縁部に八宝の書と菱鏡を描く。以上は景德鎮窯。1826と1827は漳州窯の大皿。1828から1833は小皿。1831には「大明年造」の銘がある。1834と1835は大皿の口縁部。1835は漳州窯。1836は小杯、1837は合子である。口縁端部は露胎。

1838から1842は朝鮮王朝産の陶器。1838から1840は椀。いずれも見込みに目跡が残る。1841は徳利の底部。1842は徳利の口縁部。1843から1847は中国産の陶器。1847は四耳壺になる。1848と1849はベトナム産長胴瓶。1850から1863は備前焼。1850は長頸の壺。1851から1856は壺。1857から1859は水引き痕が明瞭に残る水指。口縁端部が蓋受けのために平坦になる。1860は播鉢、1861と1862は甕。1863は甕または壺の胴部破片で、窯印がある。

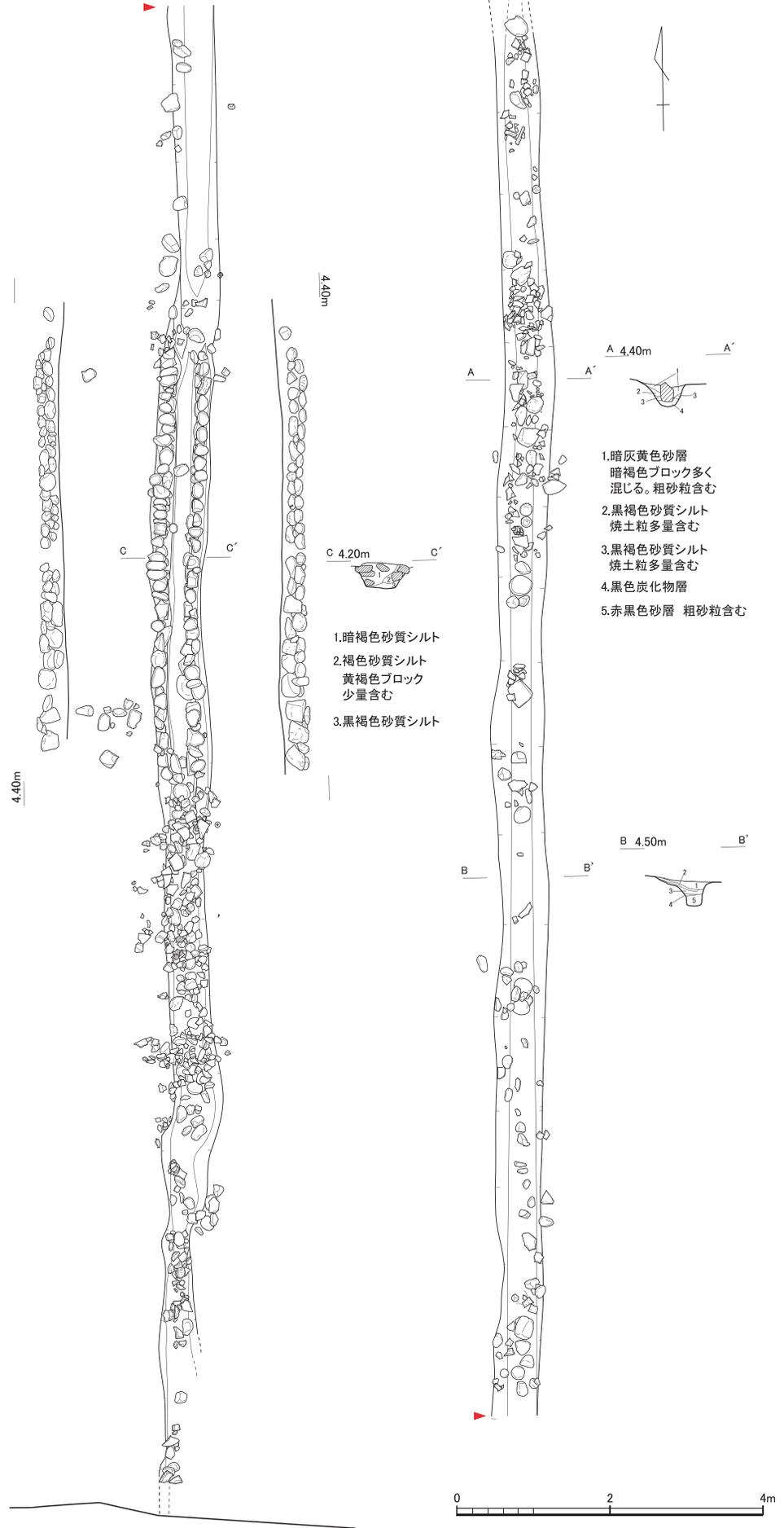
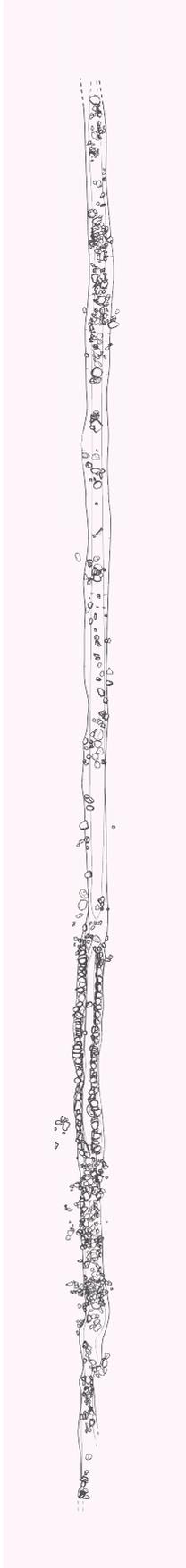
1864から1869は瓦質土器。1864は深鉢の火鉢脚である。1865と1866は浅鉢。1867は香炉か。1868は香炉、1869は花瓶と考えられる。同一個体と思われる破片が、SE070、包含層からも出土している。亀甲繋ぎ文のスタンプで飾る、良質の瓦質土器である。1870から1878は京都系土師器。1879から1881は瓦で、1879の軒平瓦は中心飾りが蓮華のe類である。1882から1884は素焼きの土錘。1885と1886は硯。1887と1888は石臼である。1889は分銅である。外面に算木文がある。1890は銅製の魚形水滴。尻尾を跳ね上げ、全体が躍動するように作られている。背中に小孔があり、口が注ぎ口になる。目や鱗、胸鰭の表現がなされているが、全体が錆化しており、文様は不鮮明である。全長は11.1cm。重さは127.0gである。

分銅

銅製魚形水滴

以上の遺物から溝の年代を探ると、冒頭示したように1580年代前半という年代観で矛盾するような遺物は出土していない。鳥津氏侵攻後の遺構から出土する瀬戸焼のソギを持つ折縁皿や唐津焼などは出土していないので、1586年の鳥津氏侵攻後、あまり時間を置かずに焼土と一緒に廃棄された遺物群と見てよいだろう。

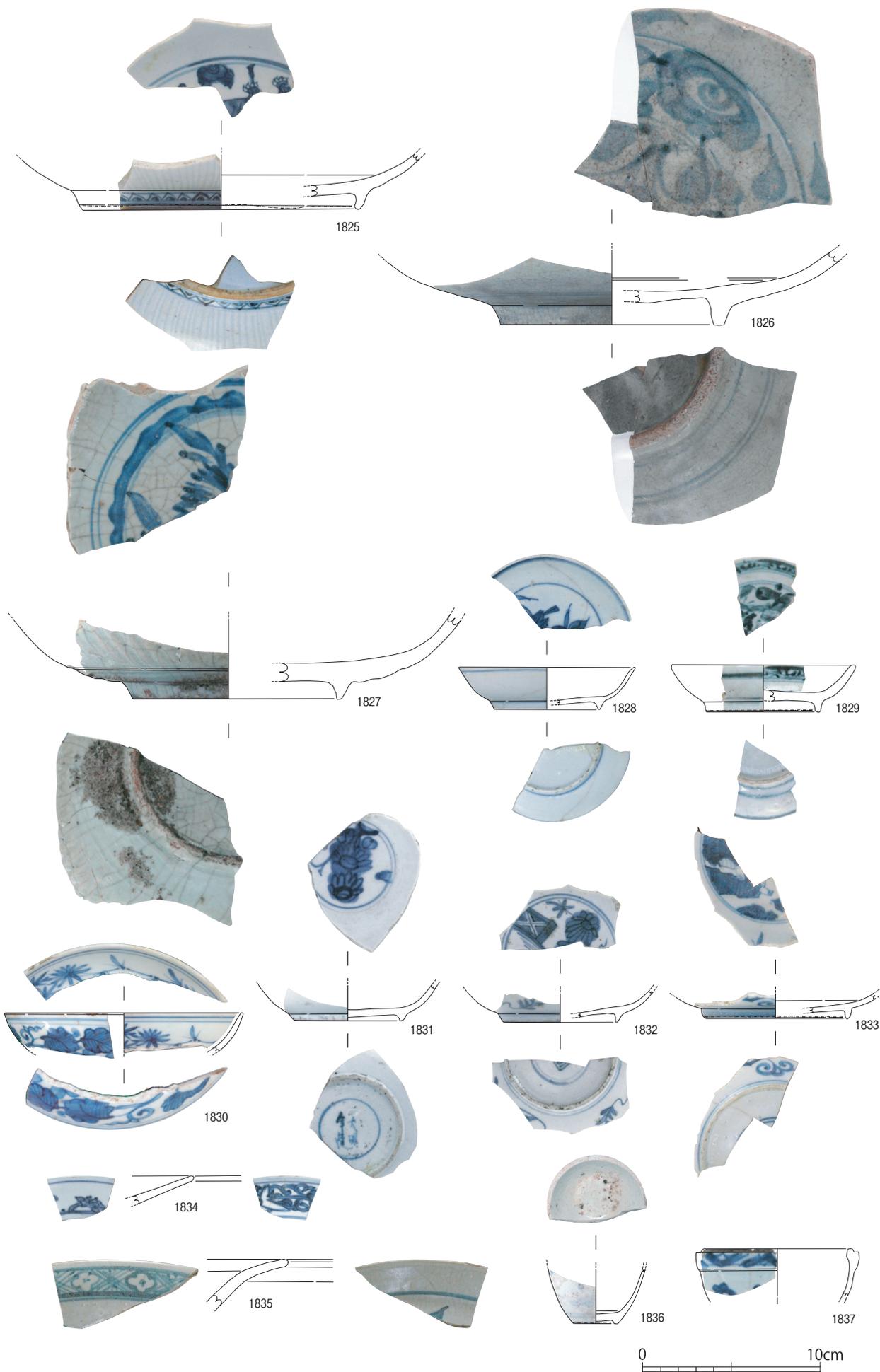
全体図



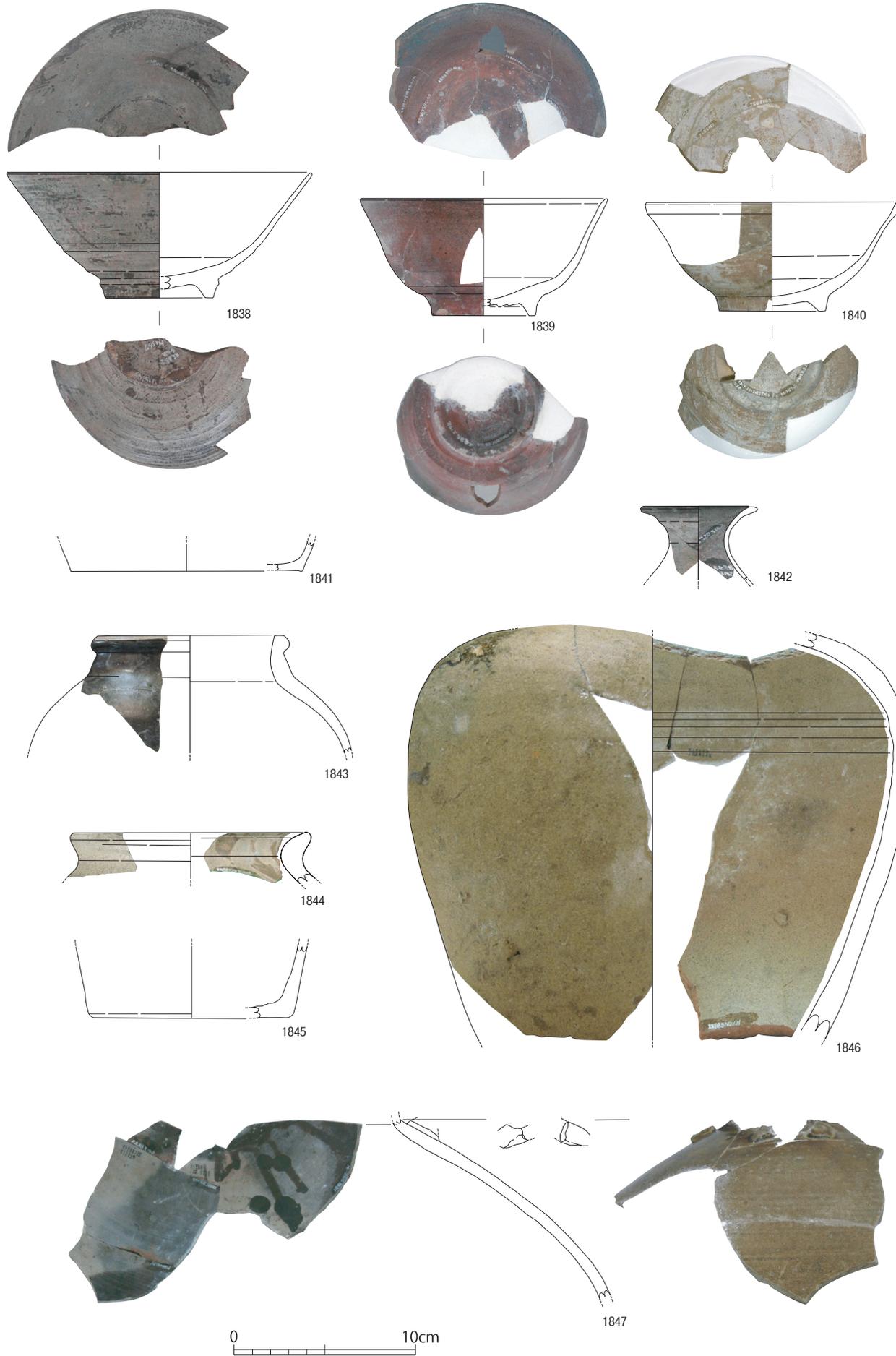
第204図 SD142(1/80)



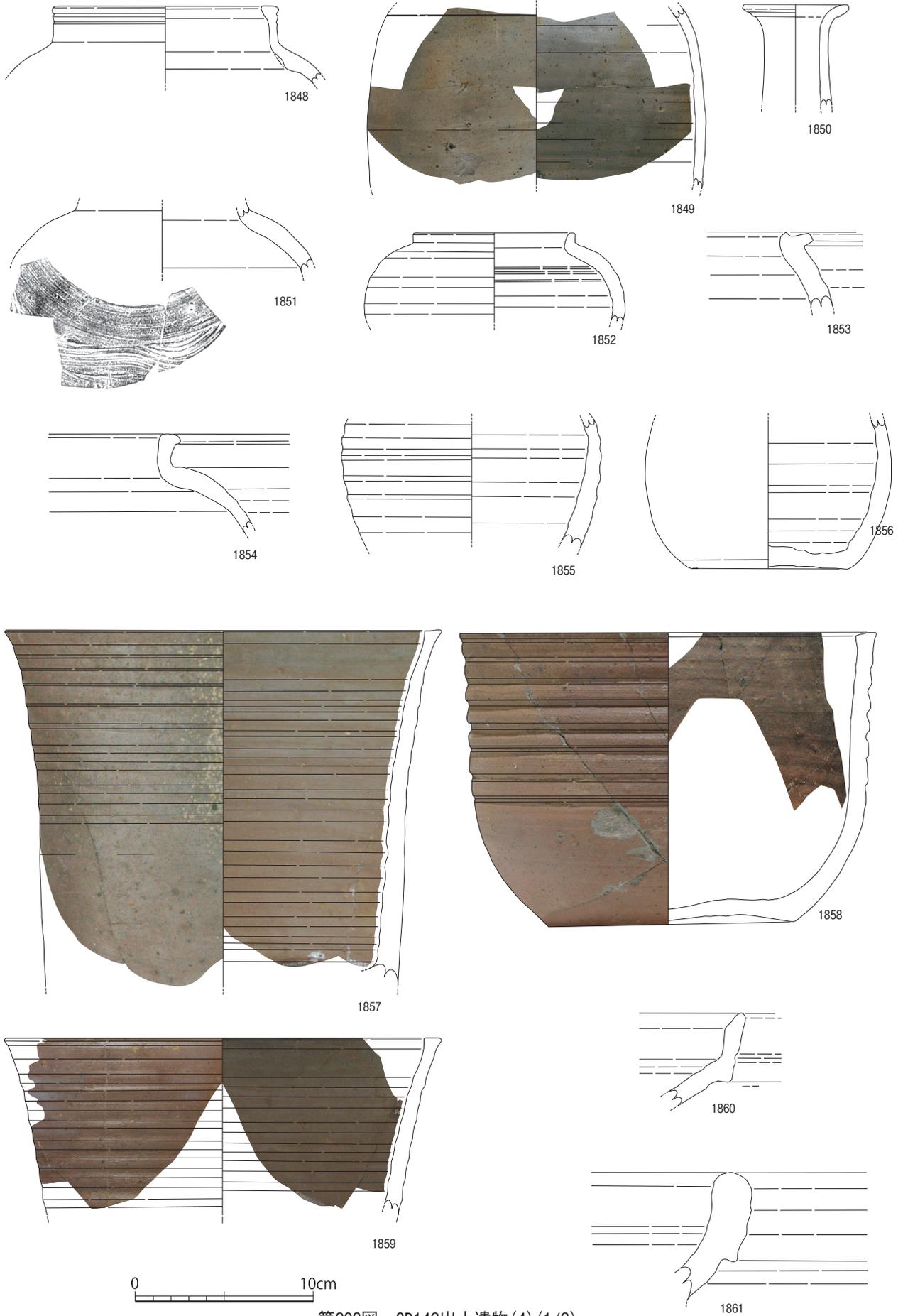
第205図 SD142出土遺物(1) (1/3)

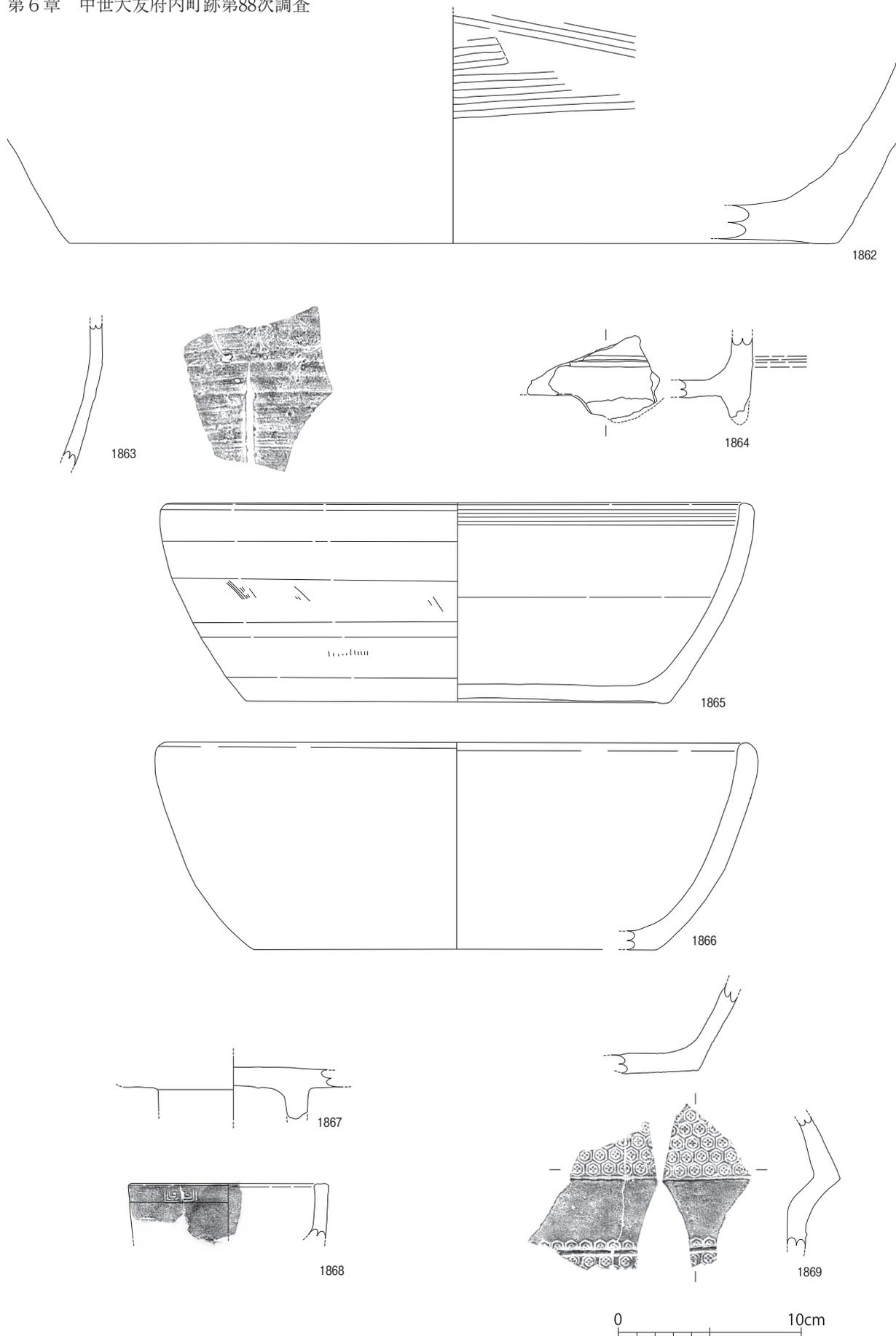


第206図 SD142出土遺物(2)(1/3)

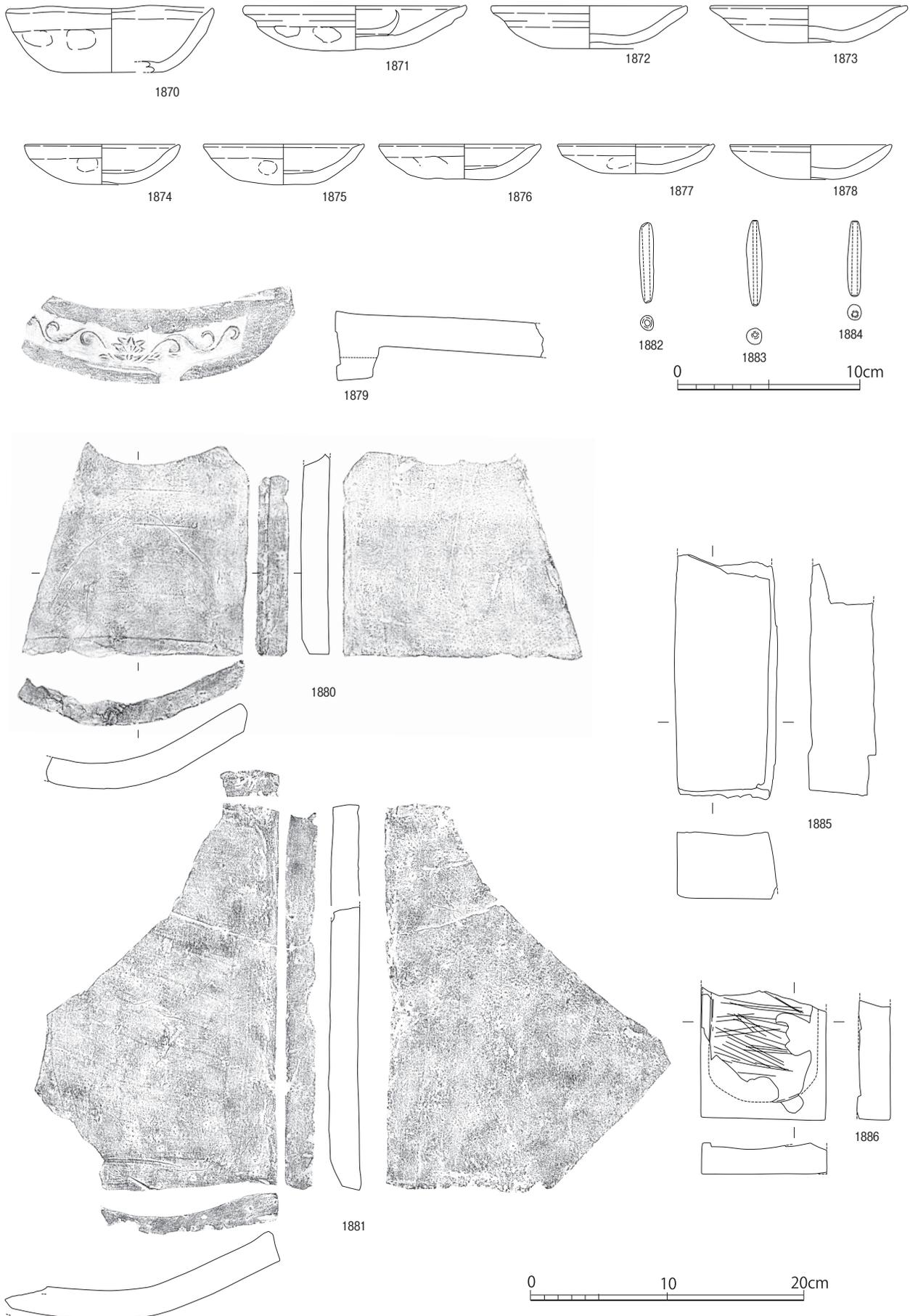


第207図 SD142出土遺物(3) (1/3)

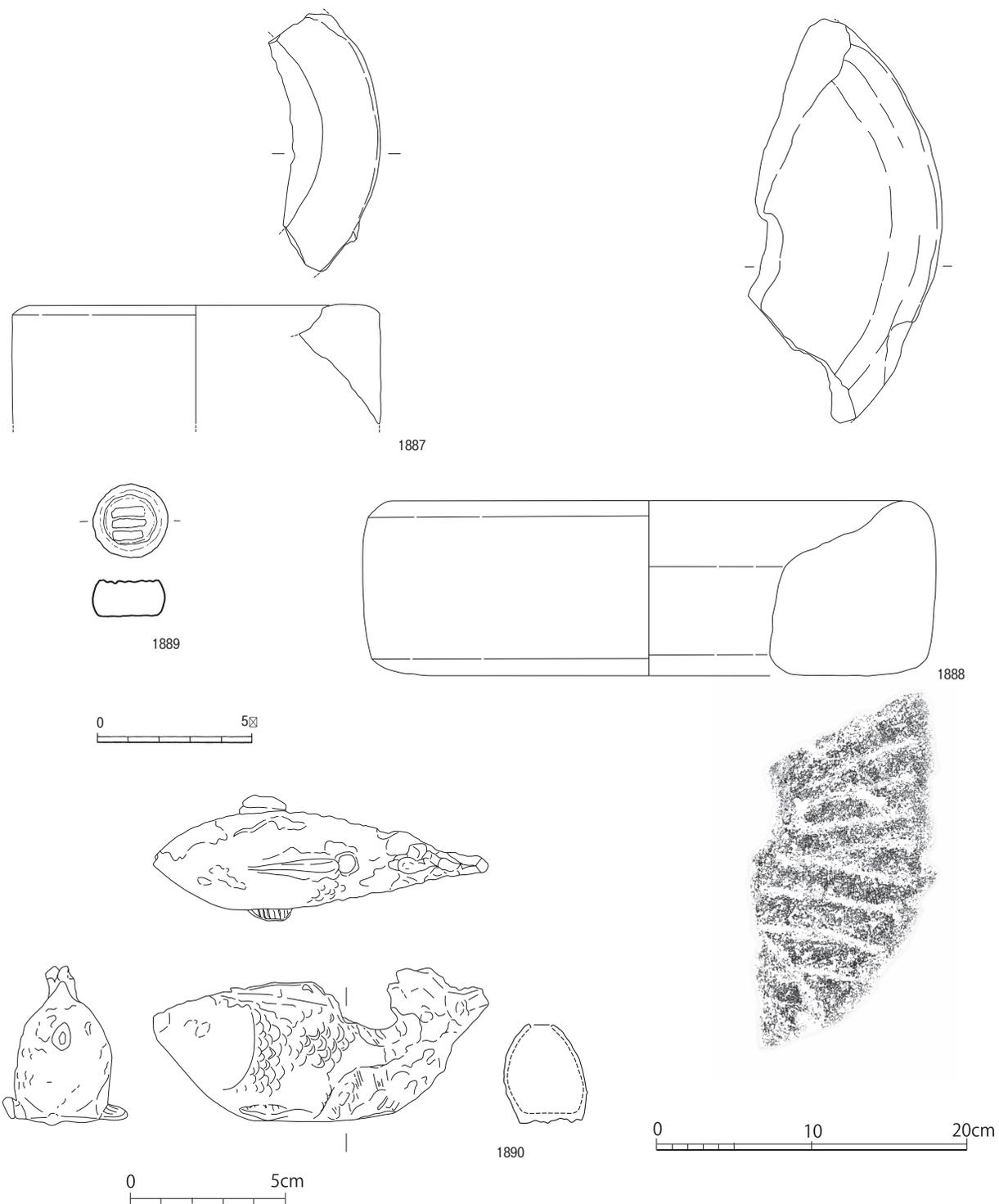




第209図 SD142出土遺物(5) (1/3)



第210図 SD142出土遺物(6) (1/3, 1/4)



第211図 SD142出土遺物(7) (1/2, 1/4)

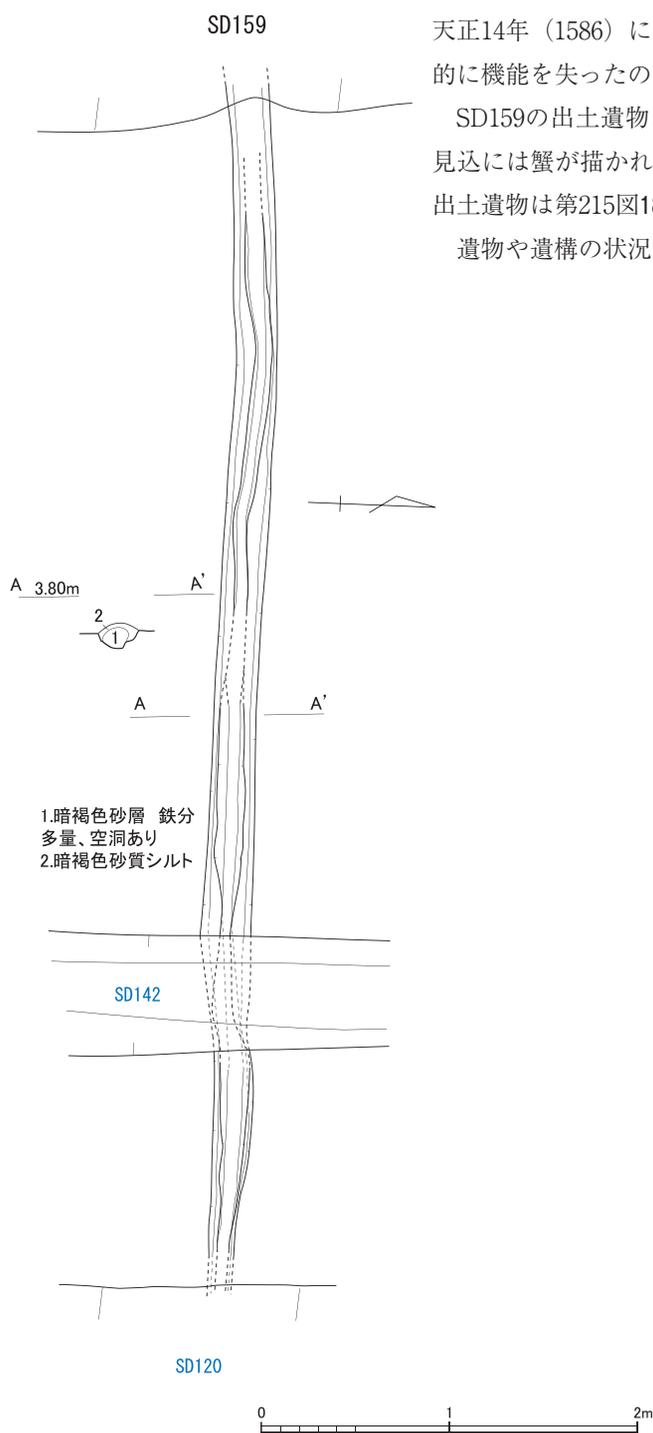
SD159、SD167（第212,214図）

暗渠排水

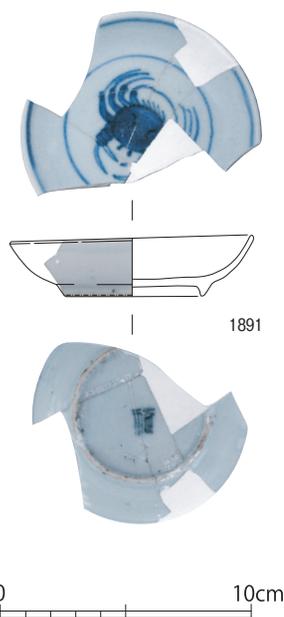
第2南北街路の下を通して、SD120に排水するための暗渠排水施設である。堀形は巾0.25mであるが、内部には竹か木のような有機質の樋が据えられていたと思われる、鉄分が壁に沈着した直径12cmの空洞が空いていた（写真図版89参照）。調査区西壁土層断面図（第4図）を見ると、SD167が22層の砂礫層中から掘られた溝の中に樋が据えられたことがわかる（写真図版96）。22層は第2南北街路西側の溝であるSD223（唐人町の堀か）が埋まった後に造られた道路面である。SD159は断面では位置関係がわからないが、SD035（新しい道路西側側溝）の底面が3.8mなのに対して、SD035に接する地点の樋の底面が3.96mであることを考えれば、SD159はSD035からSD120に水を流すための暗渠排水であった可能性が高い。排水先がSD120であるので、天正14年（1586）にはSD120が半ば埋まっていたことを考えると、最終的に機能を失ったのもSD120と同時期ということになる。

SD159の出土遺物は第213図1891で、景德鎮窯のE群の青花皿である。見込には蟹が描かれ、高台内には「福」の銘が描かれている。SD167の出土遺物は第215図1892で、漳州窯青花の大皿である。

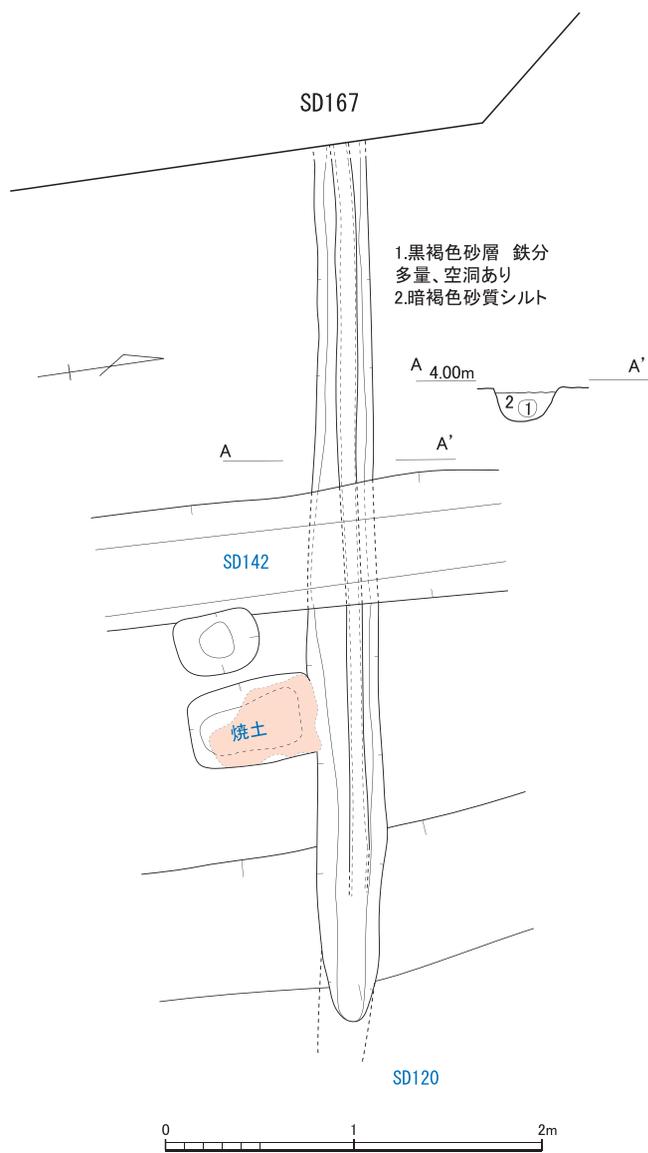
遺物や遺構の状況からして、天正期前半に機能していたと考えられる。



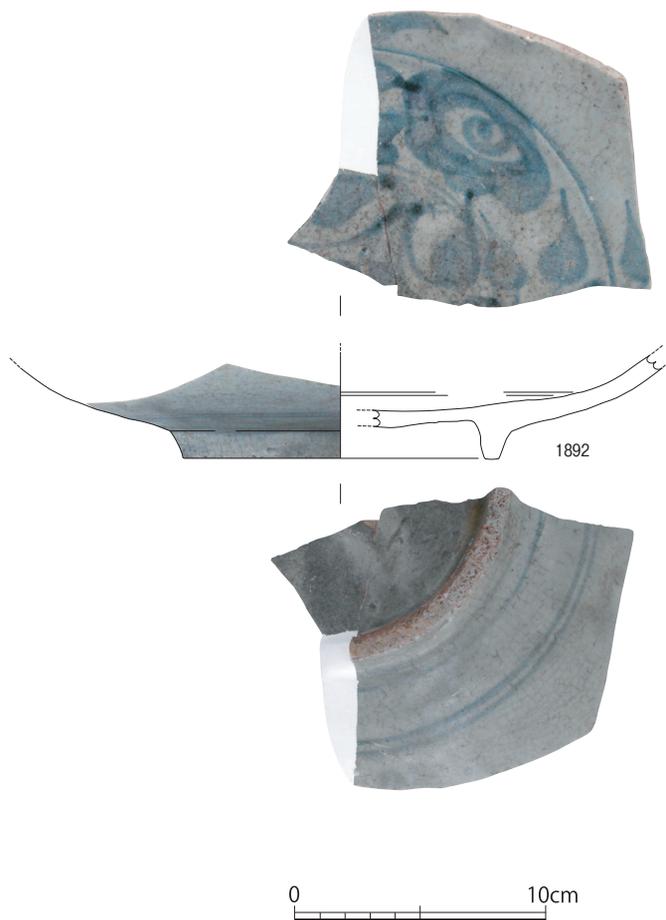
第212図 SD159(1/40)



第213図 SD159出土遺物(1/3)



第214図 SD167 (1/40)



第215図 SD167出土遺物 (1/3)

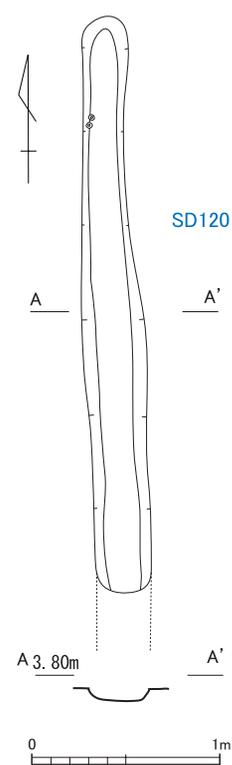
SD161 (第216図)

調査区の北側で確認された溝である。調査区北壁の土層図をみると、このSD161はSD120が中程まで埋められた後、SD142の直前に作られているのがわかる。幅は0.32~0.36m、深さは5~6cmである。長さは3.0m確認されたが、北側はまだ伸びる。南端は立ち上がってきっちりと終わっている。それより南側には全く痕跡はないので、道路側溝ではなかろう。

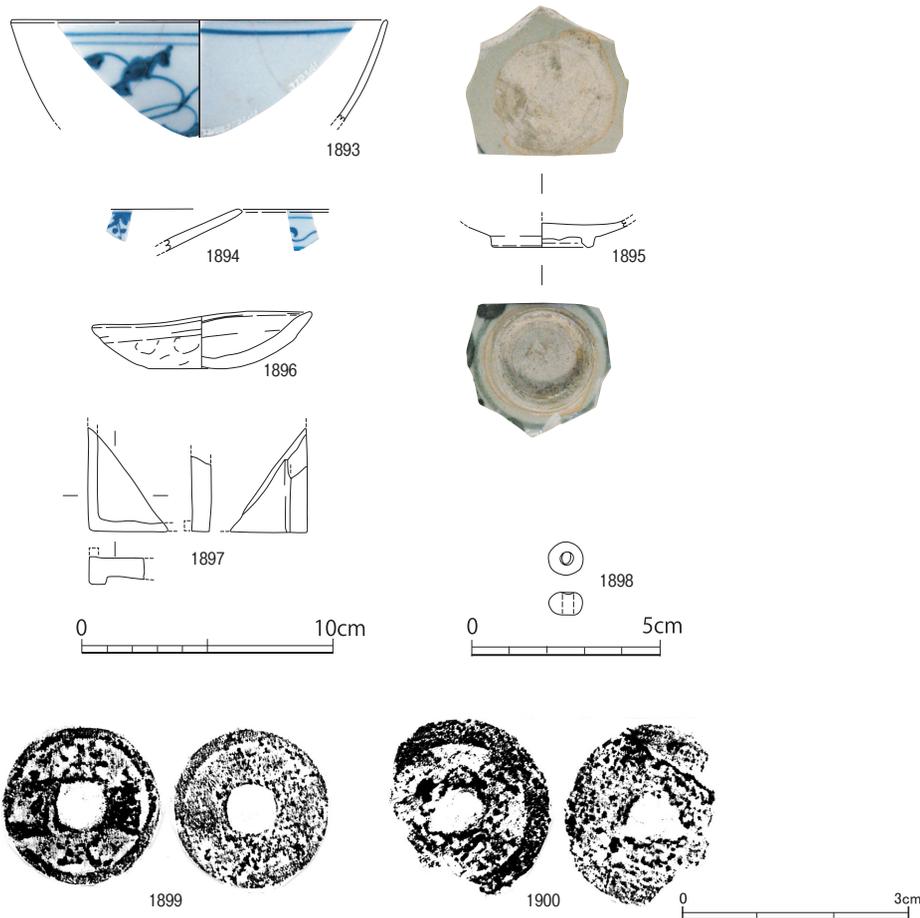
出土遺物は第217図1893から1900である。1893は景德鎮窯青花碗で、外面に唐草文が描かれる。1894も景德鎮窯青花の皿で、小野編年F群のものであろう。1895は漳州窯青花の皿で、見込みは丸く釉剥ぎされている。1896は京都系土師器、1897は硯、1898はガラス製の玉である。1899と1900は銅銭で、1899は「洪武通宝」、1900は「錢種不明」である。

ガラス小玉

SD161の時期は、天正14年(1586)年以前で、1580年を前後する時期と想定される。



第216図 SD161 (1/40)



第217図 SD161出土遺物(1/1, 1/2, 1/3)

SD174 (第91図)

調査区中央東寄りで確認された東西方向に延びる溝である。第95次調査区側から延びてきた溝は、第88次調査区のほぼ中央で終わる。この終わる地点は、SD033AやSD185、SD211などとほぼ同じである。特に後述のSD185とは規模、方向ともほぼ同じである。このことは、この2本の溝が2本一セット一セットで機能していた可能性を示唆している。また、他の溝もことごとく同一地点で終結するのは、その先に何らかの施設があったことを想定させる。それは前記したSD071の溝の可能性が高い。SD174は、長さ14.9m確認され、幅0.7~1.0m、深さ1.15mである。

出土遺物は第219図1901から第220図1926である。1901は如意形の足が付く香炉で、底部中央には小さな輪高台が付く景德鎮系の青磁である。1902は、帖花で花唐草を描く瓶?である。1903は瑠璃釉の小皿。1904は白磁の皿。

1905から1907は備前焼。1905と1906は播鉢で、前者は乗岡編年中世5期、後者は中世4期のものである。1907は鉢か。

1908は産地不明の陶器。1909と1910は瓦質の碗。1910は体部下端に突帯状の段が廻る。1911から1916は瓦質土器。1911と1912は浅鉢型の火鉢。1913は深鉢で、下端に突帯が廻る。1914は脚、1915は多条の突帯が廻る火鉢か。1916は甕である。

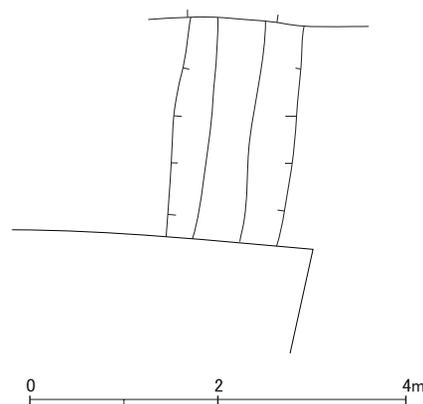
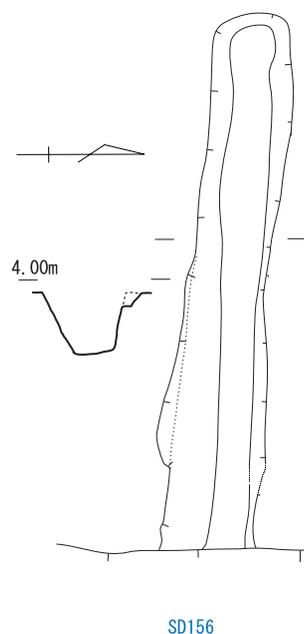
1917から1923は土師質土器。1917は底部糸切りの坏。1918から1923は京都系土器の小皿。1924と1925は平瓦で、1925は端部が上方に突出する。1926は石製の硯である。

SD174の時期は、15世紀代の遺物が多いものの、新しい京都系土師器が一定量出土していることを考えると、16世紀の後葉であるといえる。

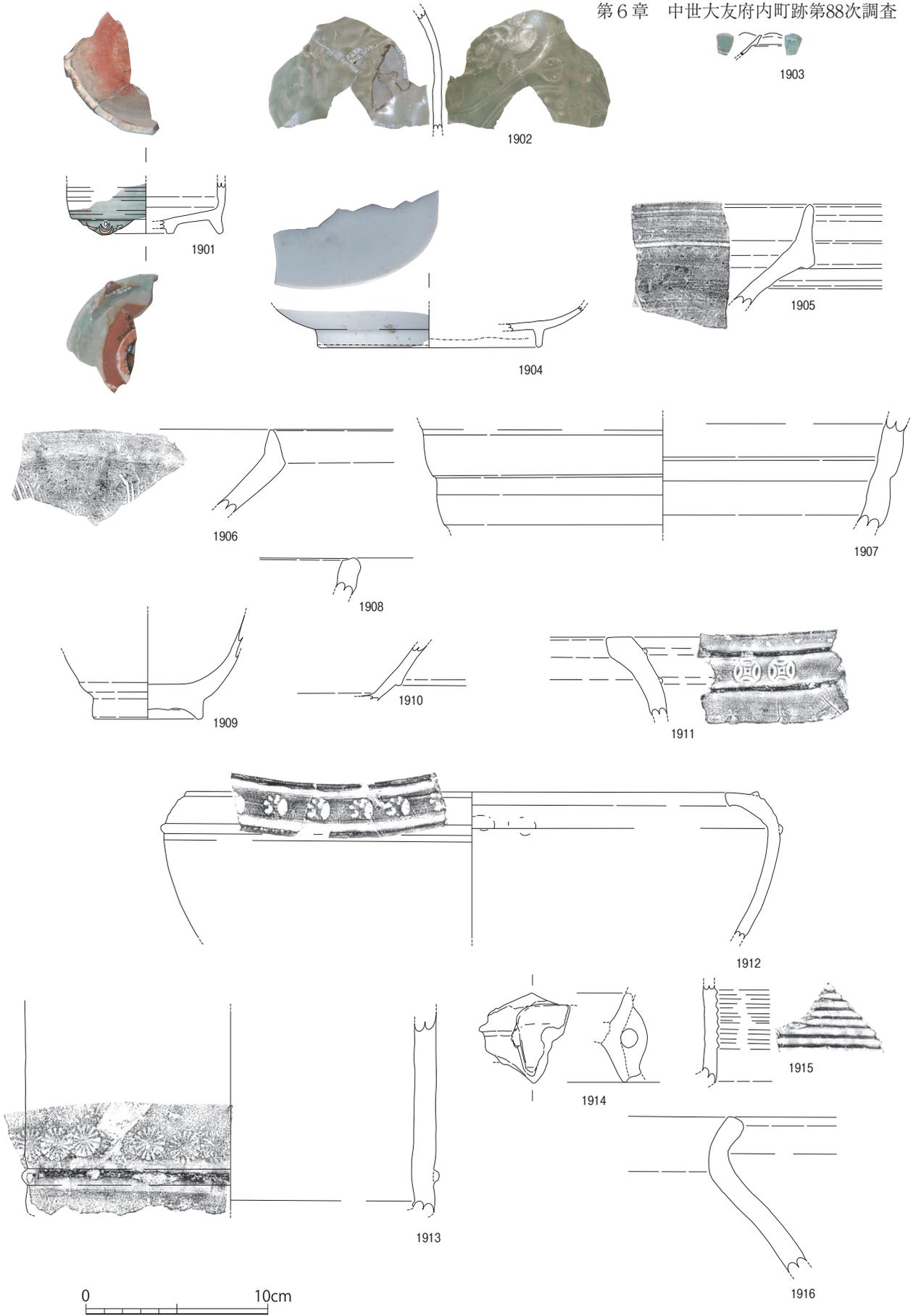
SD185 (第218図)

調査区中央やや南寄りを東西に延びる溝で、前項のSD174とほぼ平行し、SD071の手前で終結するのもSD174と同様である。おそらくSD174と一体となった溝であったと考えられる。検出された溝の長さは10.0m、幅は0.88~1.12mで、深さは0.66mである。SD156やSD173と切り合い関係があり、調査時には色調の微妙な違いからSD185が切られているように判断したが、確実ではない。

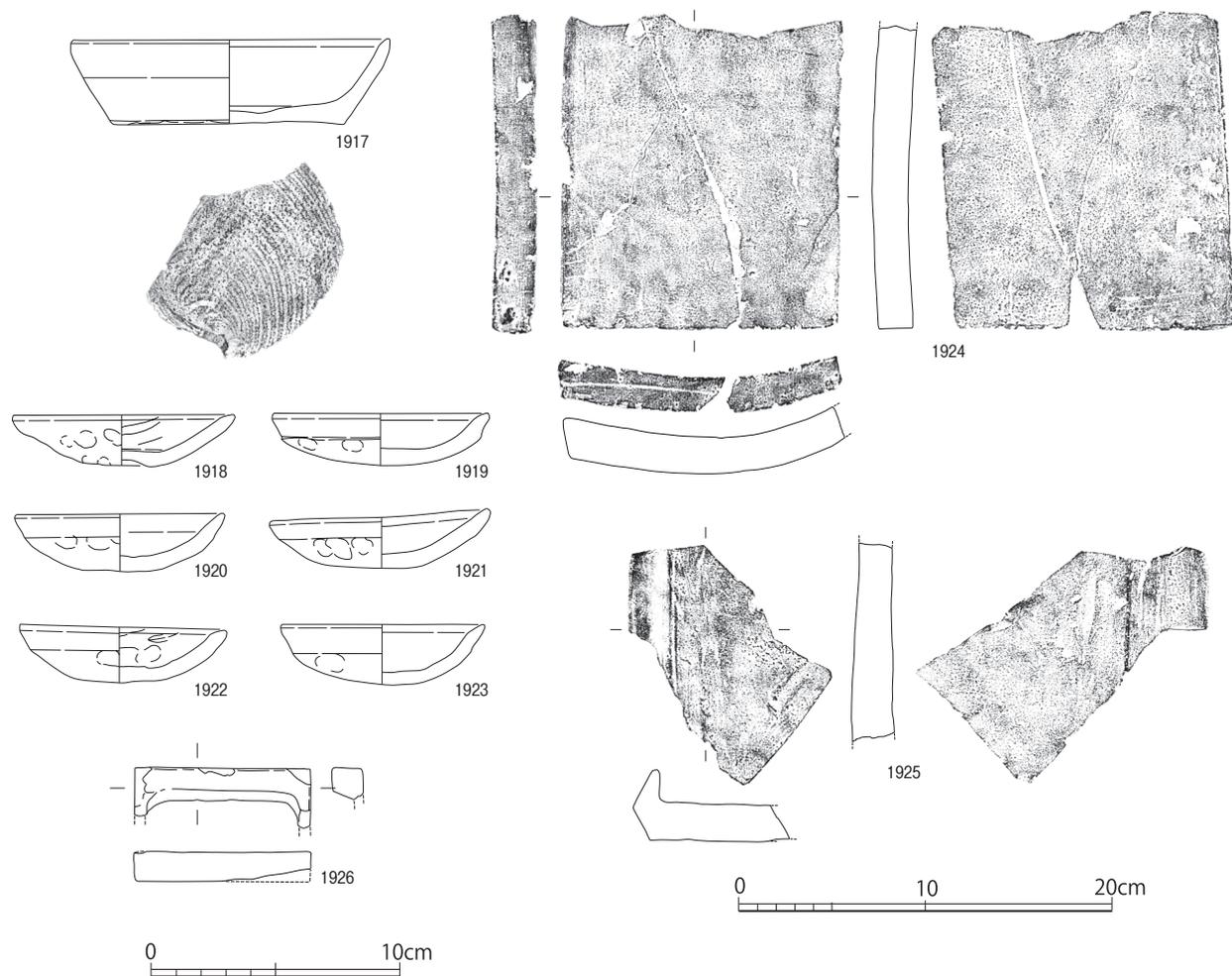
出土遺物は第221図1927から1941である。1927と1929は白磁で、1927は腰部が折れて外反して開く皿、1929は体部下半が露胎で、口縁端部内側がやや尖る森田編年D類の小皿である。1928は中国南方の吉田編年A類の焼締め陶器である。1930も中国の甕底部である。1931から1934は備前焼。1931と1932は乗岡編年中世6期の播鉢、1933は甕、1934は壺である。



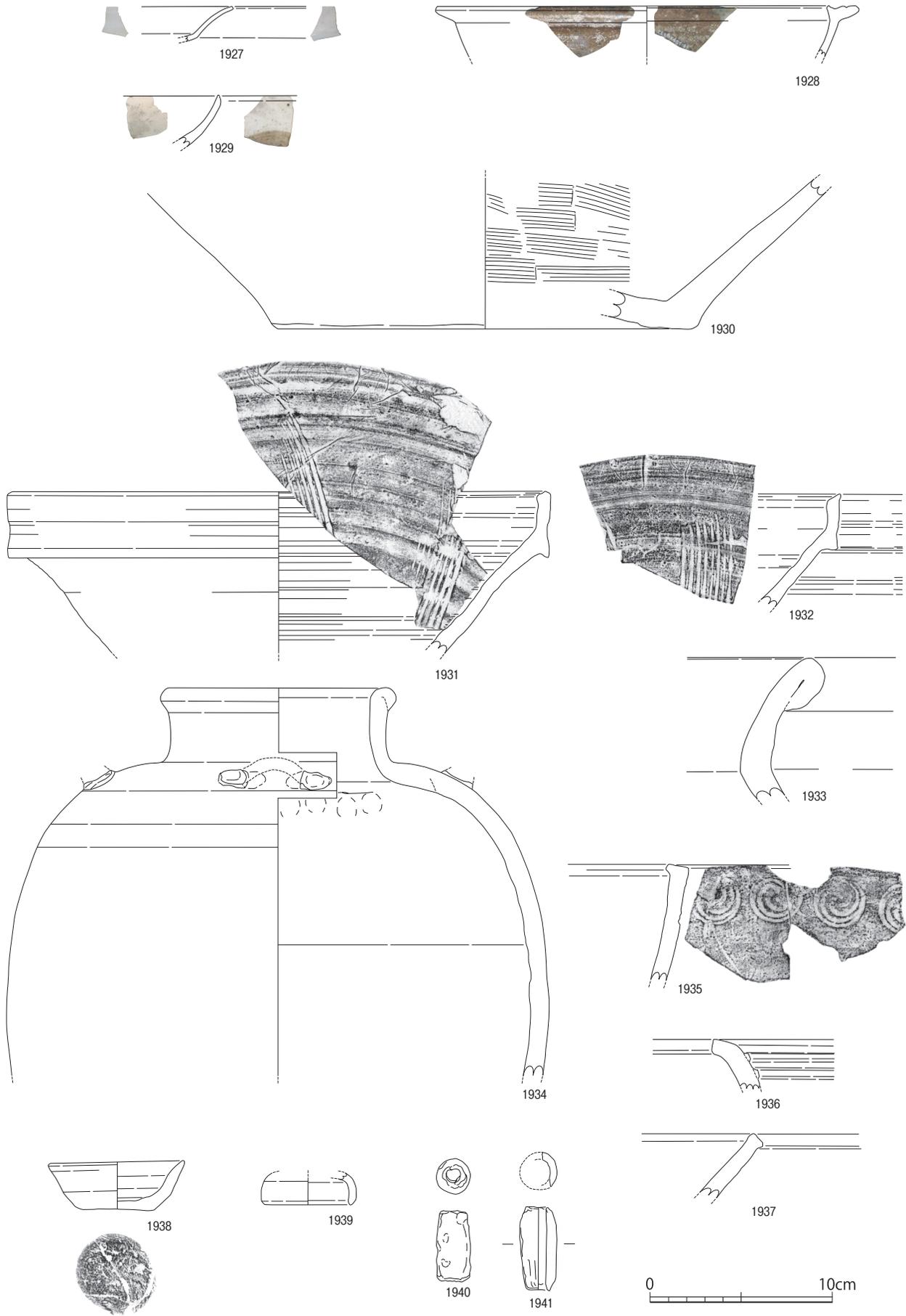
第218図 SD185(1/80)



第219図 SD174出土遺物(1) (1/3)



第220図 SD174出土遺物(2) (1/3, 1/4)



第221図 SD185出土遺物(1/3)

1935から1937は瓦質土器である。1935は口縁端部が内側に突出する浅鉢、1936は口縁部が緩やかに内湾する浅鉢、1937は鉢である。1938は底部糸切りの小皿、1939は焼き塩壺の蓋、1940と1941は素焼きの土錘である。

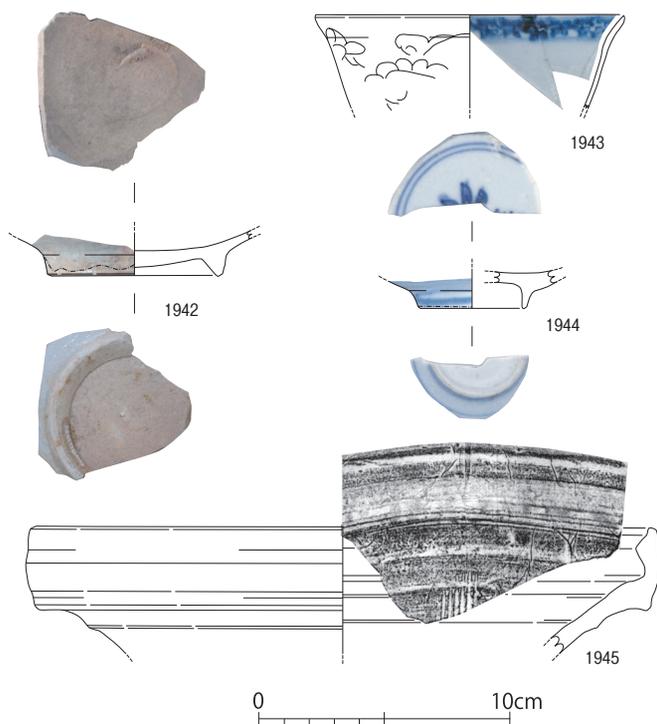
SD185の時期は、出土遺物に様々な時期のものを含む（新しいものが1点の場合には、取り上げ時などに混入した可能性もある）ので判断に苦しむが、吉田編年A類の鉢の存在やSD174との関係性も考慮に入れ、16世紀代の後葉としておく。

SD193（第222図）

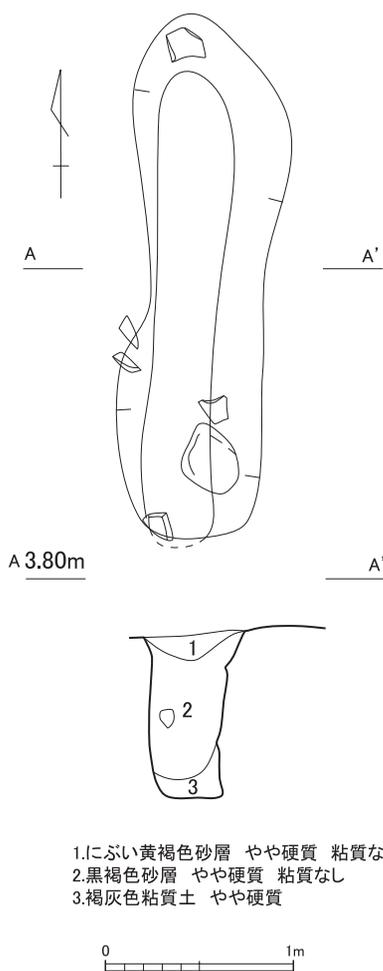
調査区の北西部で確認された溝である。長さは2.76m、幅は0.8m、深さは0.86mである。

出土遺物は第223図1942から1945である。1942は白磁で、内面底部に釉薬が掛かっていないことから、壺のような器形になろう。1943と1944は景德鎮窯青花である。1943は端反りの碗で、外面は毛彫りで花文を描く。1944は饅頭頭タイプで見込みに花文を描く碗である。1945は備前焼の播鉢である。

遺物からSD193の時期を推測すると、16世紀後葉である。



第223図 SD193出土遺物(1/3)



- 1.にぶい黄褐色砂層 やや硬質 粘質なし
- 2.黒褐色砂層 やや硬質 粘質なし
- 3.褐灰色粘質土 やや硬質

第222図 SD193(1/40)

SD223（第224図）

調査区の北西部で検出された南北方向に延びる溝である。SD253を切り、SD035やSK006から切られている。さらに調査区北壁断面図（第3図）をみると判るように、SD223は、古段階の道路遺構（第2南北街路）を切っており、埋没後にはSD223の上に新たに道路が構築されている。すなわ

唐人町の堀

ち、SD223は第2南北街路が造られた後に掘られ、途中で機能を失った溝とすることができる。溝は半分ほど自然堆積した後、上部は唐人町側から一挙に埋められている。位置から考えると、この西側に展開する唐人町の堀であった可能性もある。幅は2.15m、深さは1.45mで断面は緩やかなV字形を呈する。調査区内で南北に長さ12.2mほど確認されたが、南側は僅かに東側に膨らみ、屈曲していた可能性がある。

燭台

出土遺物は第225図1946から第226図1970である。1946は白磁の皿で、口縁部に僅かに段が見られる。1947は合子の身で、口縁部付近は施釉されない。1948と1949は五彩の碗。1950は景德鎮窯青花小型の碗で、見込みに折枝文、高台内に「壽」を書く。1951と1952は漳州窯青花で、1951は皿、1952は碗である。1953は陶製の灯明皿。1954から1958は備前焼。1954から1956は挿鉢。1957は甕、1958は壺である。1959から1962は瓦質土器である。1959は深鉢型の火鉢。1960も火鉢か。1961は甕、1962は鉢である。1963は燭台、1964は素焼きの蓋か。1965は焼き塩壺の蓋（小皿として実測）、1966は耳土器、1967から1969は素焼きの土錘、1970は白の下白である。

このSD223の時期は、前記したように最古の道路より新しく、最新の道路よりは古い。遺物から見ても、漳州窯青花が出土していることから、SD120とほぼ同じ時期に機能していたと考えられる。

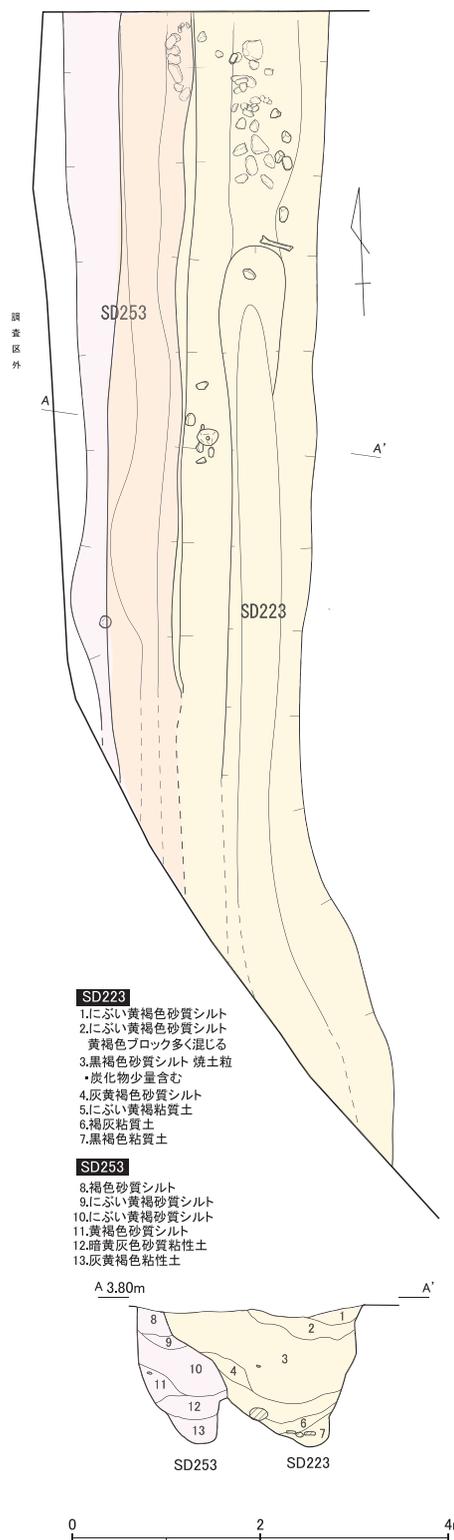
SD253 (第224図)

北方向に延びる溝である。丁度、調査区の拡張部にあたるため、南側へ追うことは出来なかったが、第80次調査区でもこのSD253に繋がると考えられる溝（第80次SD201）が検出されているので、少なくとも南北方向に87mは延びていることになる。東側の肩はSD223に切られており本来の溝幅は不明であるが、確認できた幅は0.88mで、深さは1.46mである。断面はV字形になるが、底部は平らである。

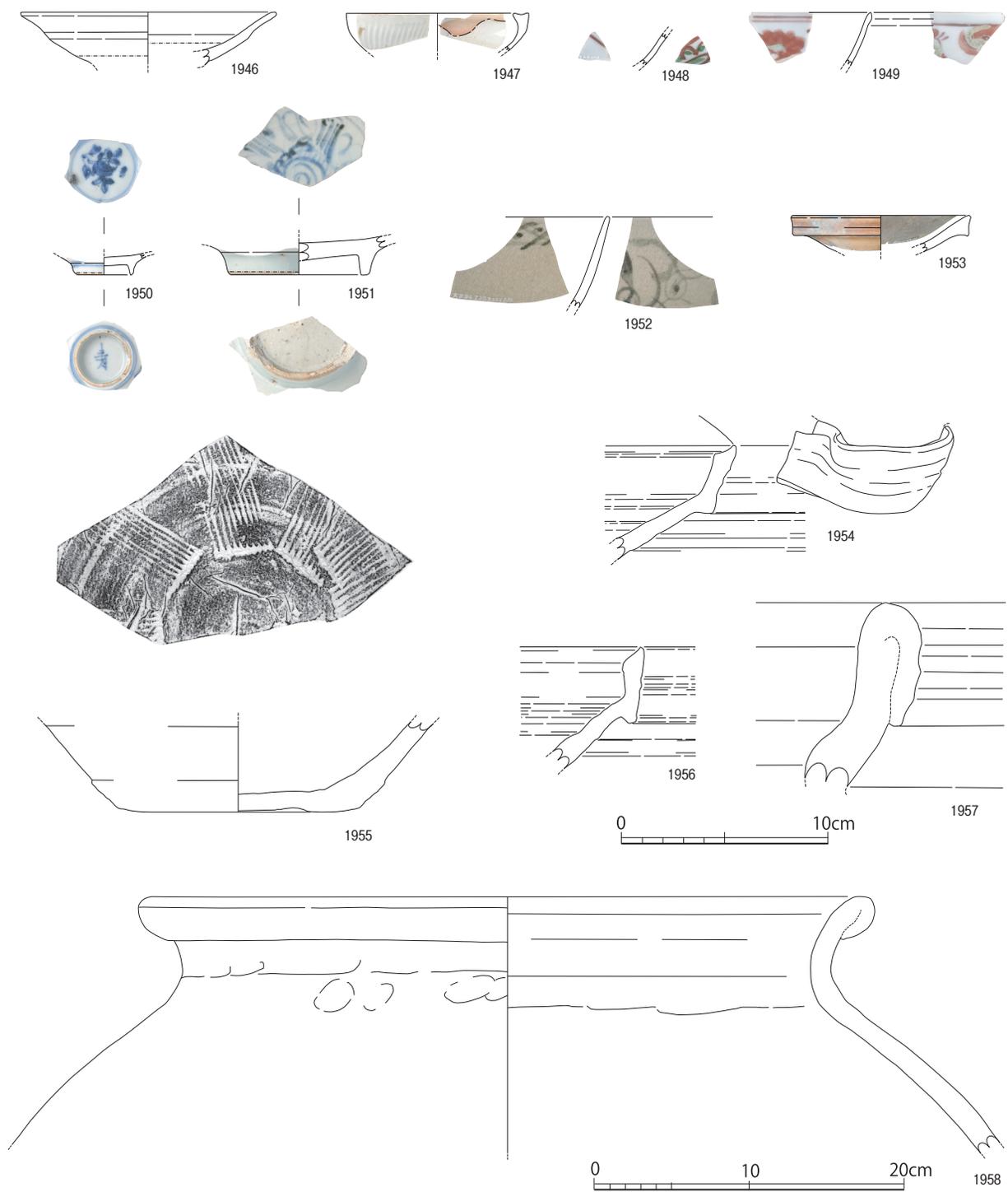
唐人町の堀  
道路側溝

この溝は、SD223と同様、この西側に展開する唐人町の「堀」と第2南北街路の西側側溝を兼ねた溝と考えられ、道路西側側溝では最も古く位置づけられる。しかし、出土遺物はほとんどなく、図示できるものはない。今回の調査区、すなわち「称名寺」西側の第2南北街路そのものが、おそらく16世紀の後半代になって構築されていると考えられることから、このSD253も16世紀の後半代で、SD223の構築時期である1570年代よりは遡る時期に位置づけることが出来るだろう。

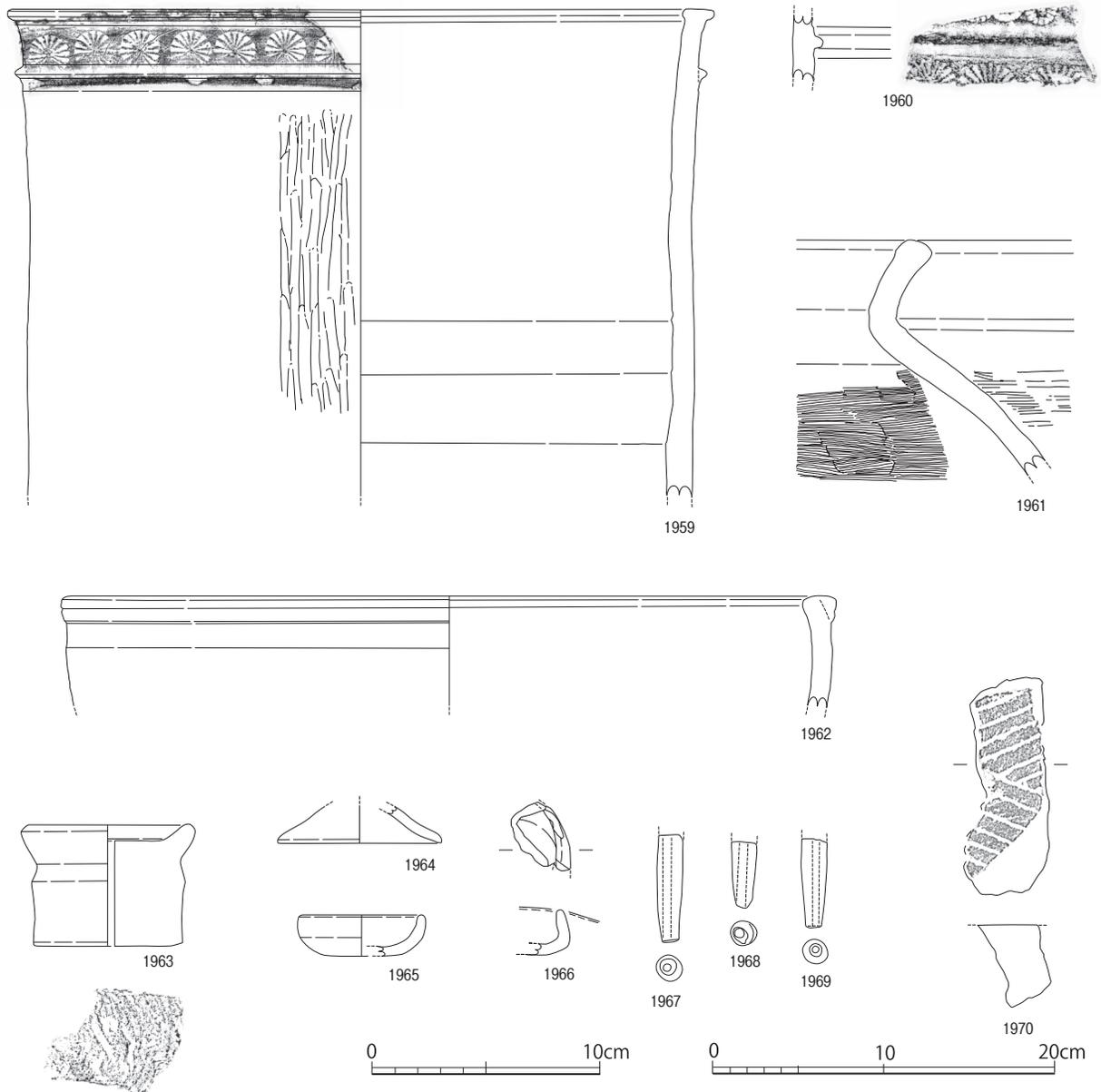
第2南北街路  
の構築



第224図 SD223 SD253(1/80)



第225図 SD223出土遺物(1) (1/3, 1/4)



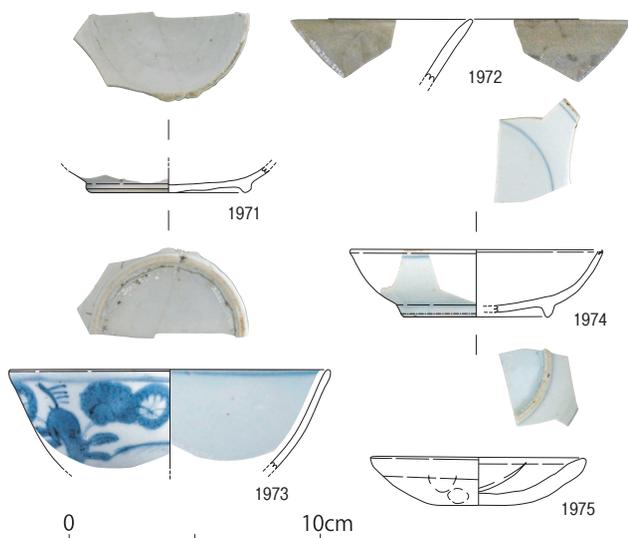
第226図 SD223出土遺物(2) (1/3, 1/4)

SD352 (第227図)

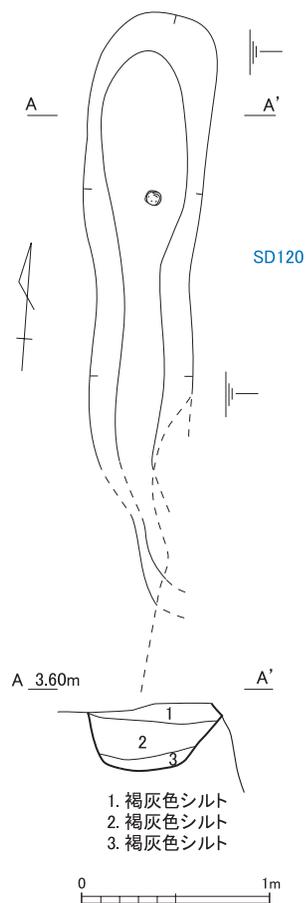
調査区の北西部で、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された溝である。幅は0.6~0.66m、深さは0.35mで、長さ6.4mにわたって確認できた。南側は浅くなって終わっている。

出土遺物は第228図1971から1975で、1971と1972は白磁である。1971は皿、1972は碗か。1973と1974は景德鎮窯青花で、1973は菊花が描かれる碗、1974は圈線のみ的小野編年E群の皿である。1975は京都系土師器皿である。

以上の遺物から、SD352の時期は16世紀後葉である。



第228図 SD352出土遺物(1/3)



第227図 SD352(1/40)

SD382 (第229図)

調査区の中程で、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された溝である。幅は0.65m、深さは0.40mで、長さ3.8mにわたって確認できた。SD439、SD383、SD378とと一緒に検出された。SD383を切っていることは土層断面図で確認できる。SD439に対しても切っていると考えられる。断面は箱形になる。

中国産四耳壺 出土遺物は第230図1976から1979で、1976は中国産の四耳壺の口縁部。1977と1978は京都系土師器。1979は平瓦である。

SD382の時期は、深い坏形の京都系土師器（1978）が出土していることから、SD120とほぼ同じ時期とすることが出来る。

SD383 (第229図)

第2南北街路を掘り下げる途中で、SD382と重なるように検出された溝である。幅は0.36m、長さは5.3m、深さは0.26mである。SD382よりは古いことが土層から確認できる。また、後述のSD439とSD378を切っている。

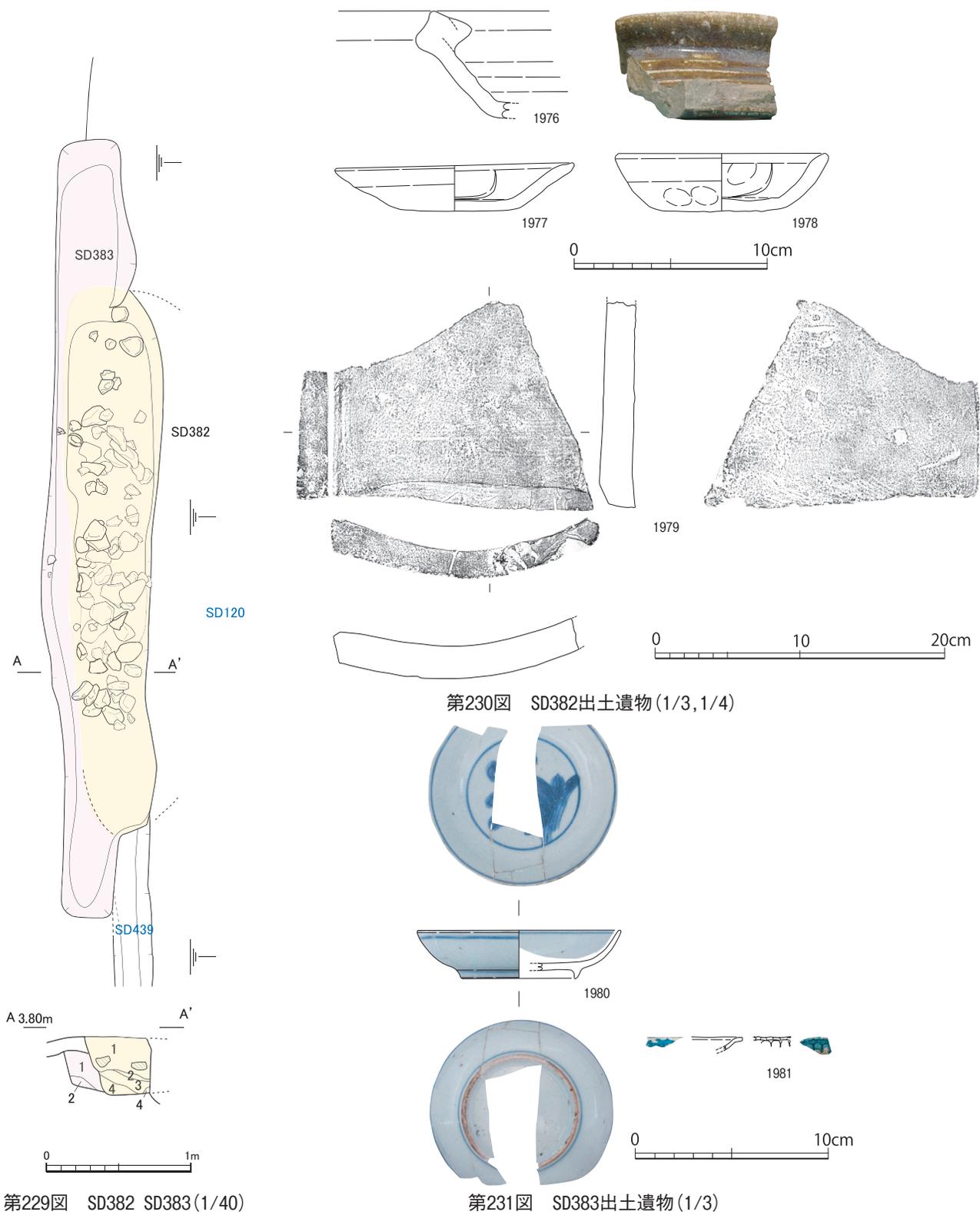
翡翠釉 出土遺物は第231図1980と1981である。1980は景德鎮窯青花の小野編年E群の皿である。この皿はSD120出土破片と接合している。1981は翡翠釉の菊花皿である。

SD383の時期は、SD1230と接合関係があるので、同時期に機能したと考えられる。前記したSD382とはごく僅かな時期差で掘削されたものと考えられる。

SD437 (第232図)

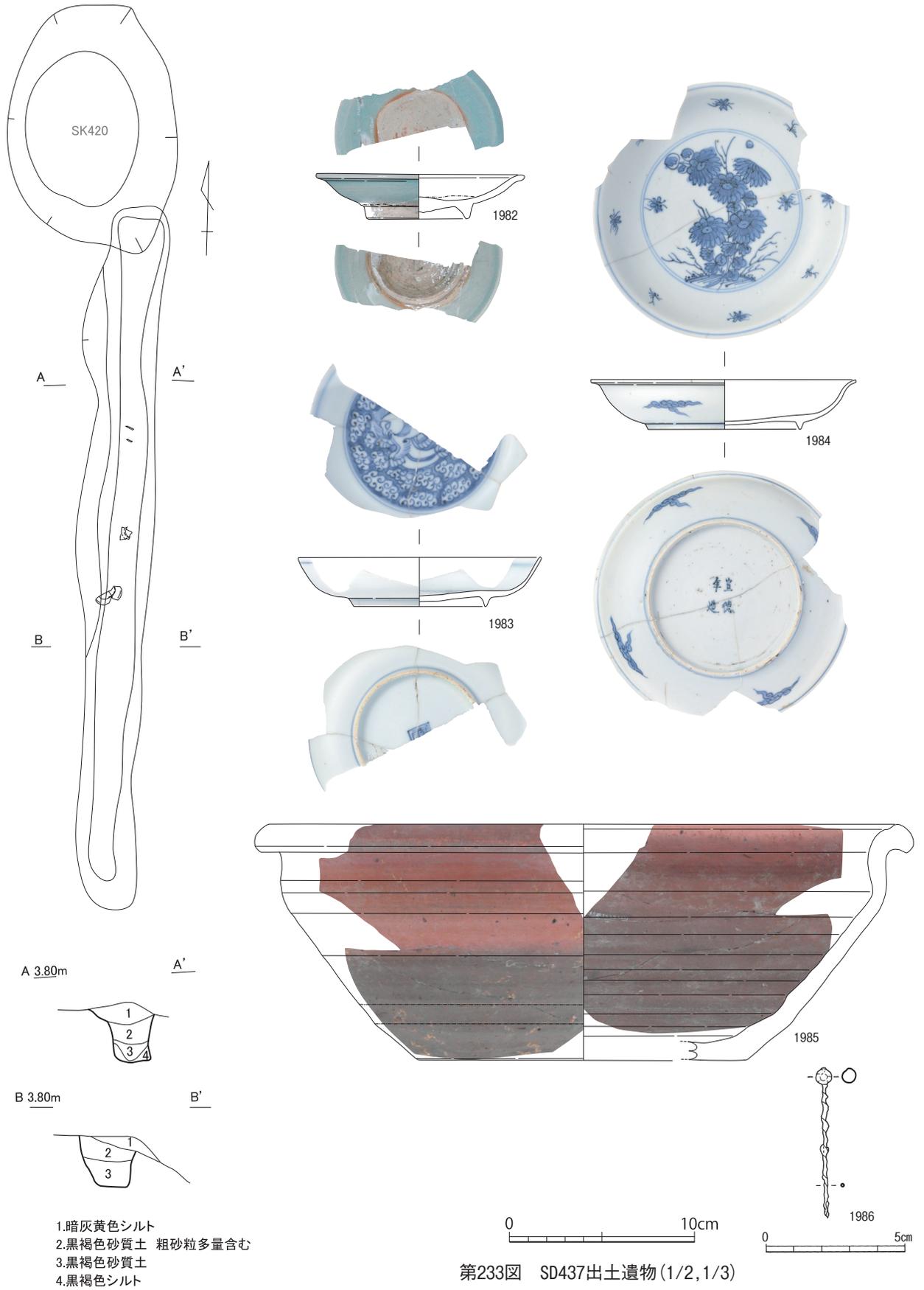
調査区の南よりで、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された溝である。SK420から一部切られている。長さは5.06m、幅は0.40~0.48mで、深さは0.40mである。断面はしっかりとした箱形を呈する。堆積状況は自然堆積である。

中国南方系青磁 出土遺物は第233図1982から1986である。1982は中国南方系の青磁で、八角形になる皿である。



見込みは円形に釉剥ぎされ、高台内も釉が掛かっていない。1983と1984は景德鎮窯青花である。1984は地面から生えた菊を描き、口縁部内側には虫を廻らせる。この1984はSD120出土のものと接合した。1983は雲文で埋められた獅子である。これもSD120出土破片と接合した。1985はタイのメナムノイ窯の焼締め陶器の鉢である。1986は銅製の釘状のもので螺旋状になる。

SD437の時期は、SD120と同じ時期に機能したものと考えられる。



第232図 SD437(1/40)

第233図 SD437出土遺物(1/2,1/3)

(3) 土坑

SK015 (第234図)

調査区北端中央で検出された土坑で、南北0.80m、東西1.08m、深さ0.52mである。内部には備前焼播鉢が浮いた状態で出土している。

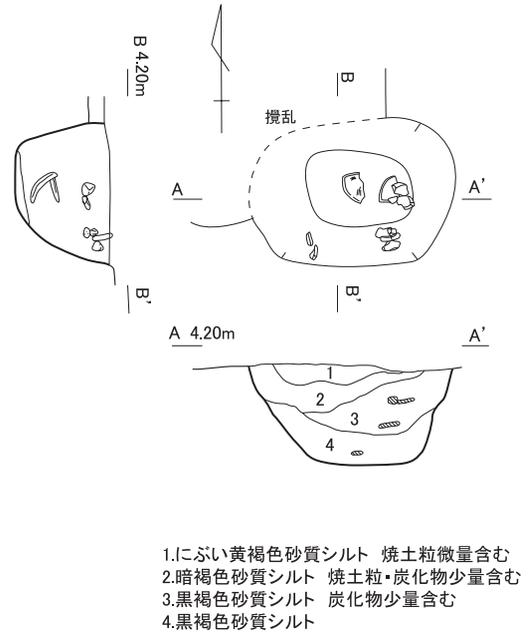
第235図1987が播鉢で、内面には交差する摺り目があり、近世1期のものである。

SK149 (第236図)

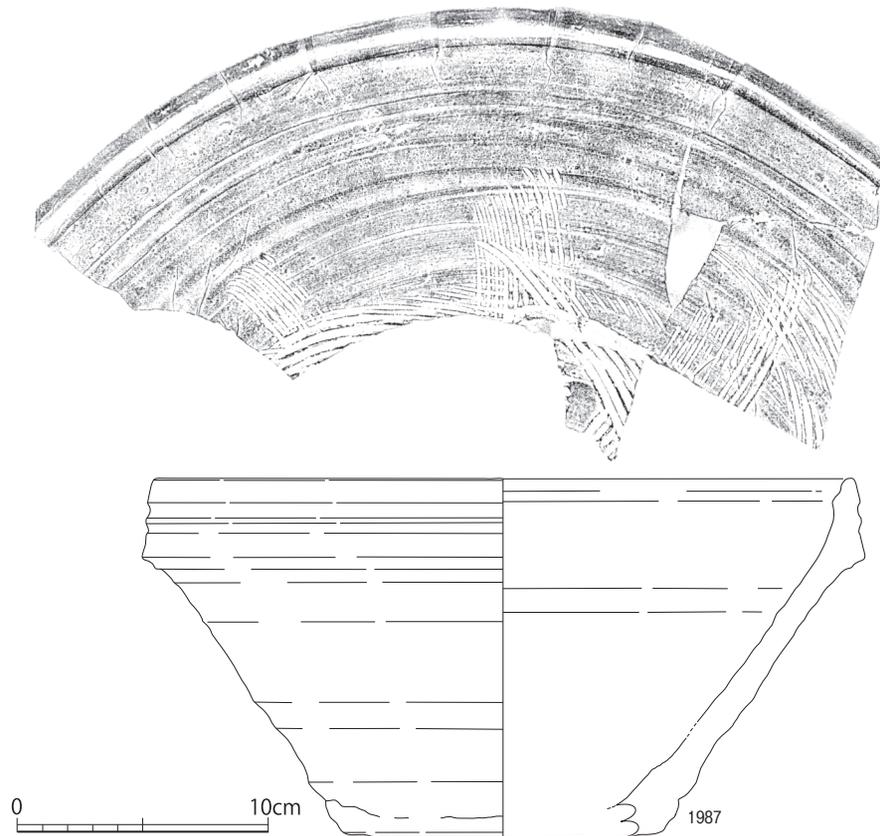
SK207と重なるように検出された土坑で、切り合い関係は不明であった。しかし、SK207の縁に並べられた礫がSK149まで延びているので、あるいはSK207が拡張されたものかもしれない。土層などでは確認できなかった。

出土遺物は第237図1988から1990である。1988は中心飾りが菱形になるa類。1989は平瓦。1990は布目がある破片で製塩土器か。

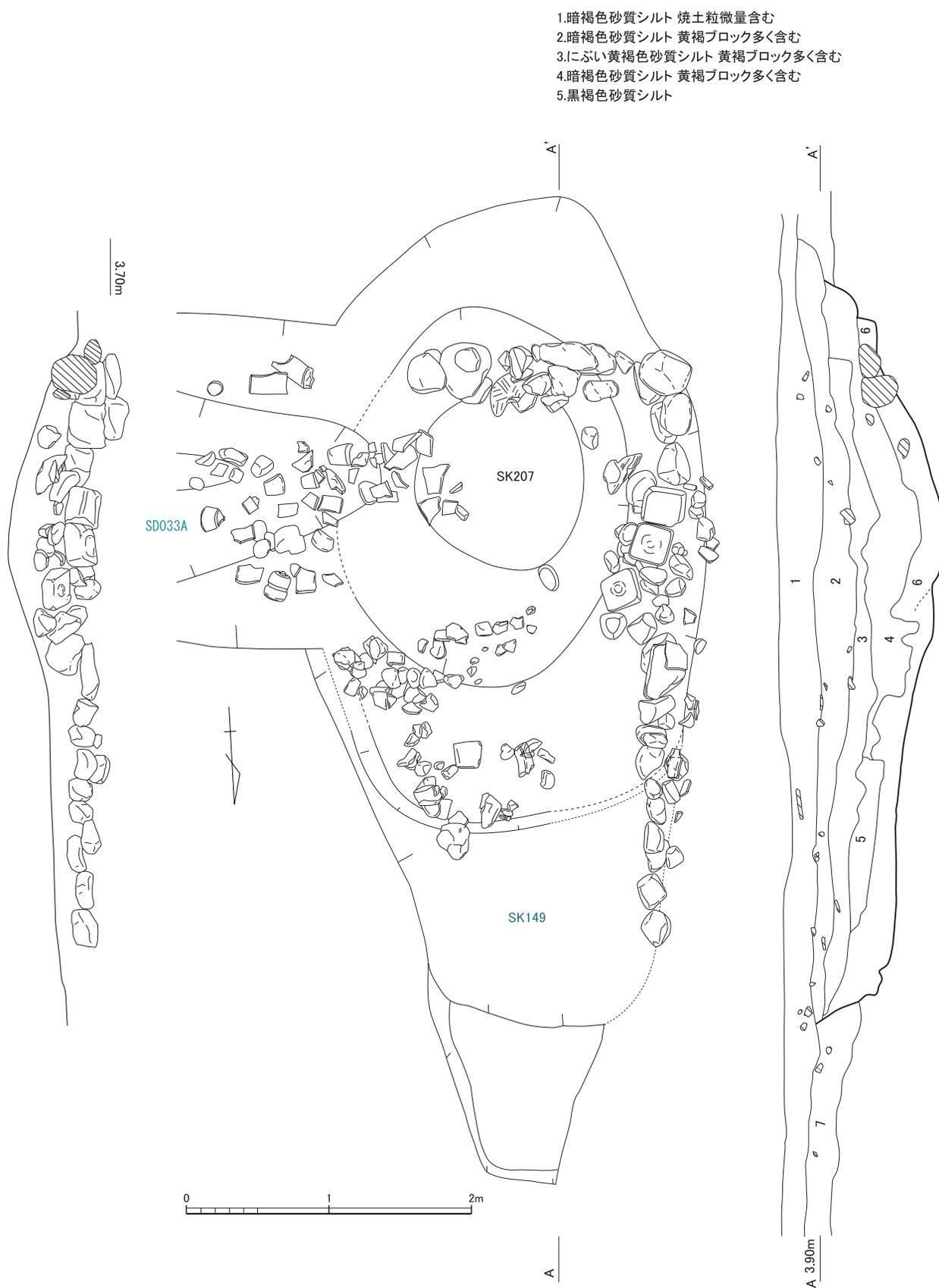
この遺構の時期は、SK207と一体という解釈で、この時期に置いておく。



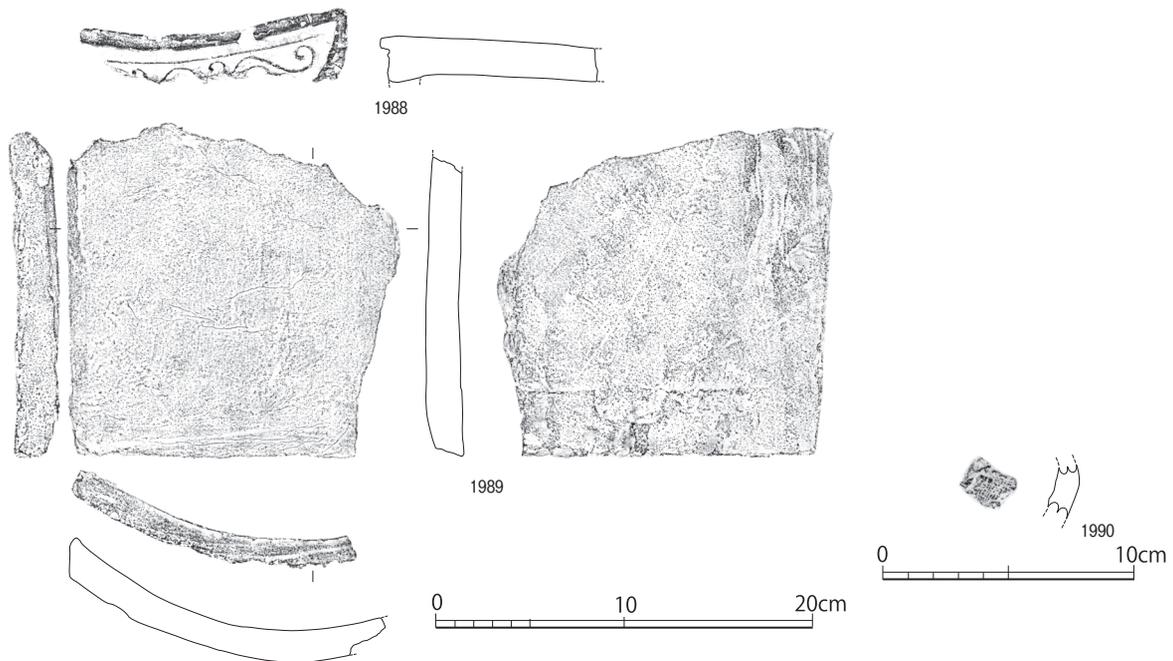
第234図 SK015(1/40)



第235図 SK015出土遺物(1/3)



第236図 SK149 SK207 (1/40)



第237図 SK149出土遺物(1/3,1/4)

SK207 (第236図)

池

前項のSX206、SX208で述べたように、これらの排水施設の手前で水を貯めるための池と考えられる土坑である。土坑の堀形は南北5.7m、東西3.0m、深さ1.2mの長楕円形であるが、礫や五輪塔石材を使った護岸と考えられる石積みがL字状に残っており、それから考えると、機能していた時はしっかりした長方形の池状のものであったと復元できよう。この土坑とSX206、SX208との連結部がどのようになっていたのかは不明である(写真図版106)が、あるいはもう少しSX206とSX208は東側に延びていたのかもしれない。

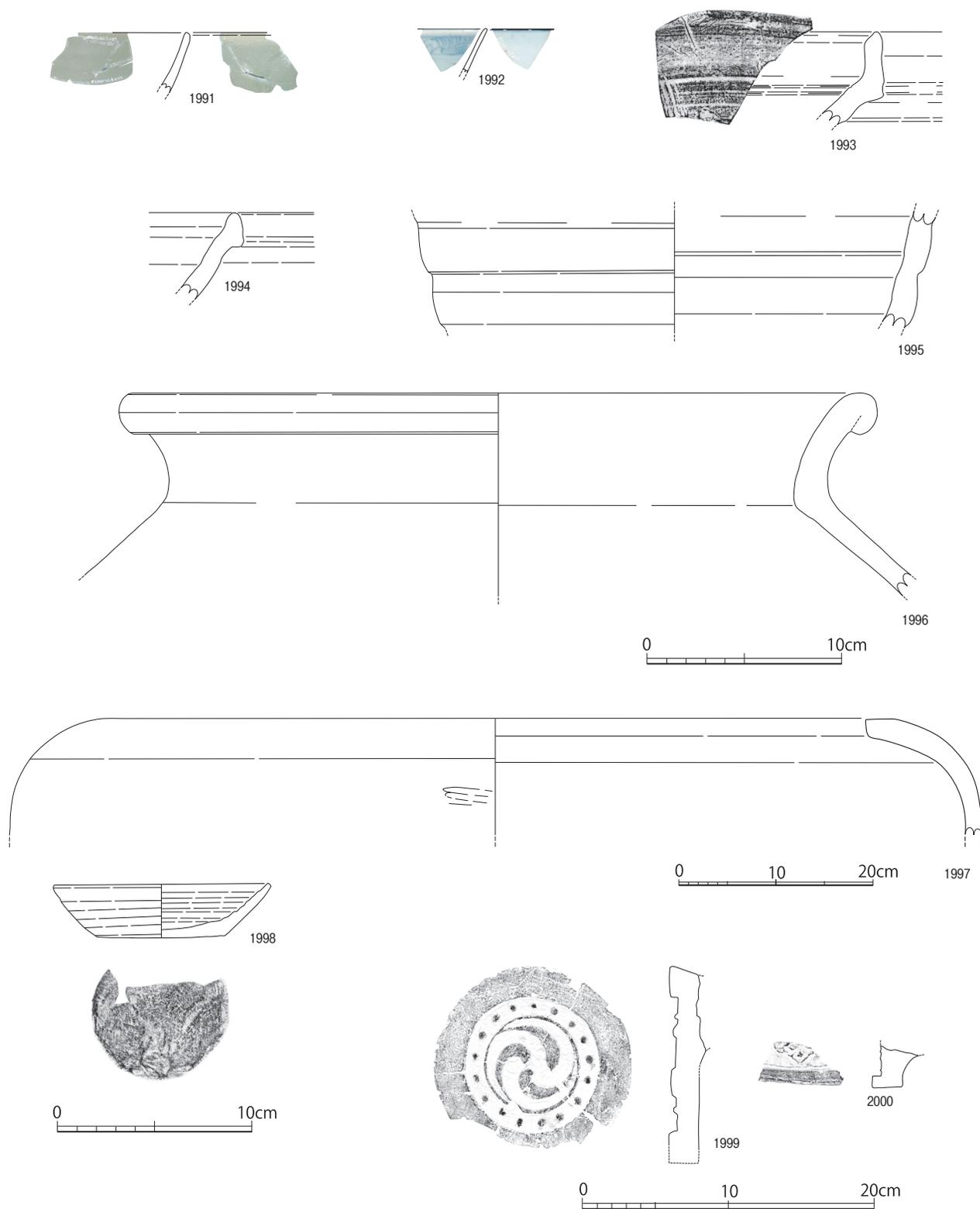
排水の状況

また、このSK207にはSD033Aが東から延びてきて接続している。調査時はSK207とSD033Aは別々な遺構と考えて調査し、遺物も後述のようにSD120と同時期を明らかに示すものは出土していないが、一体的に機能した遺構と考えてよいと思われる。つまり、堀(SD120)で囲まれた施設の内部を東西に延びる溝(SD033A)によって水を集め、一旦池(SK207)に貯めた水を暗渠(SX206・SX208)を通して堀(SD120)に排水していたというように解釈できる。

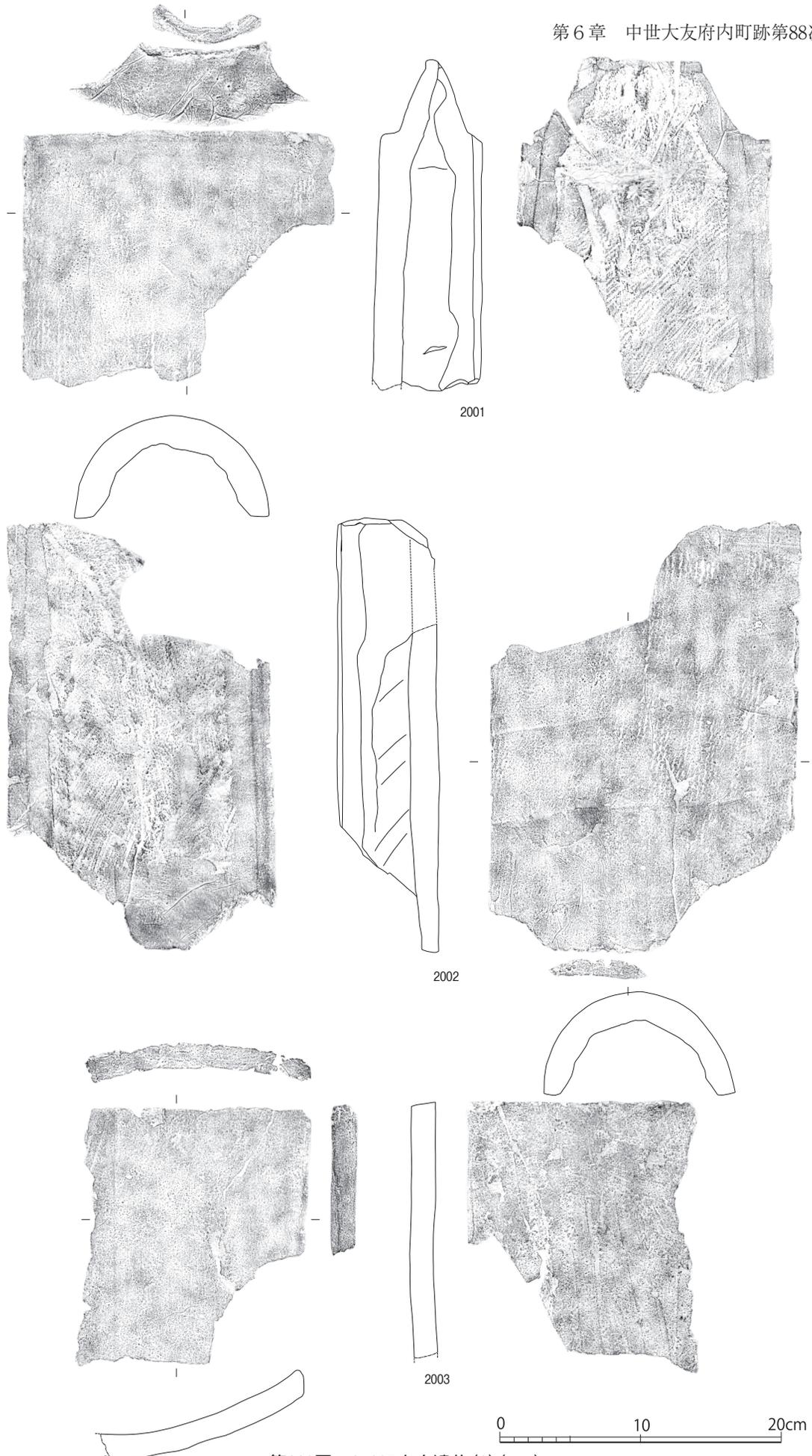
出土遺物は第238図1991から第240図2005である。1991は鎬蓮弁を持つ龍泉窯青磁碗である。1992は内面波濤文が廻る青花椀である。1993は備前焼播鉢。1994は東播系須恵器の鉢、1995は産地不明の陶器鉢か。1996と1997は瓦質土器で、1996は甕、1997は浅鉢。1998は底部糸切りの土師質土器で、内外面に轆轤目を残す。1999は軒丸瓦瓦当で、巴文が小さく珠文が17点あるB類である。2000は中心飾りが四菱の平瓦瓦当a類である。

2001と2002は丸瓦、2003と2004は平瓦である。2005は挽き白の上白である。

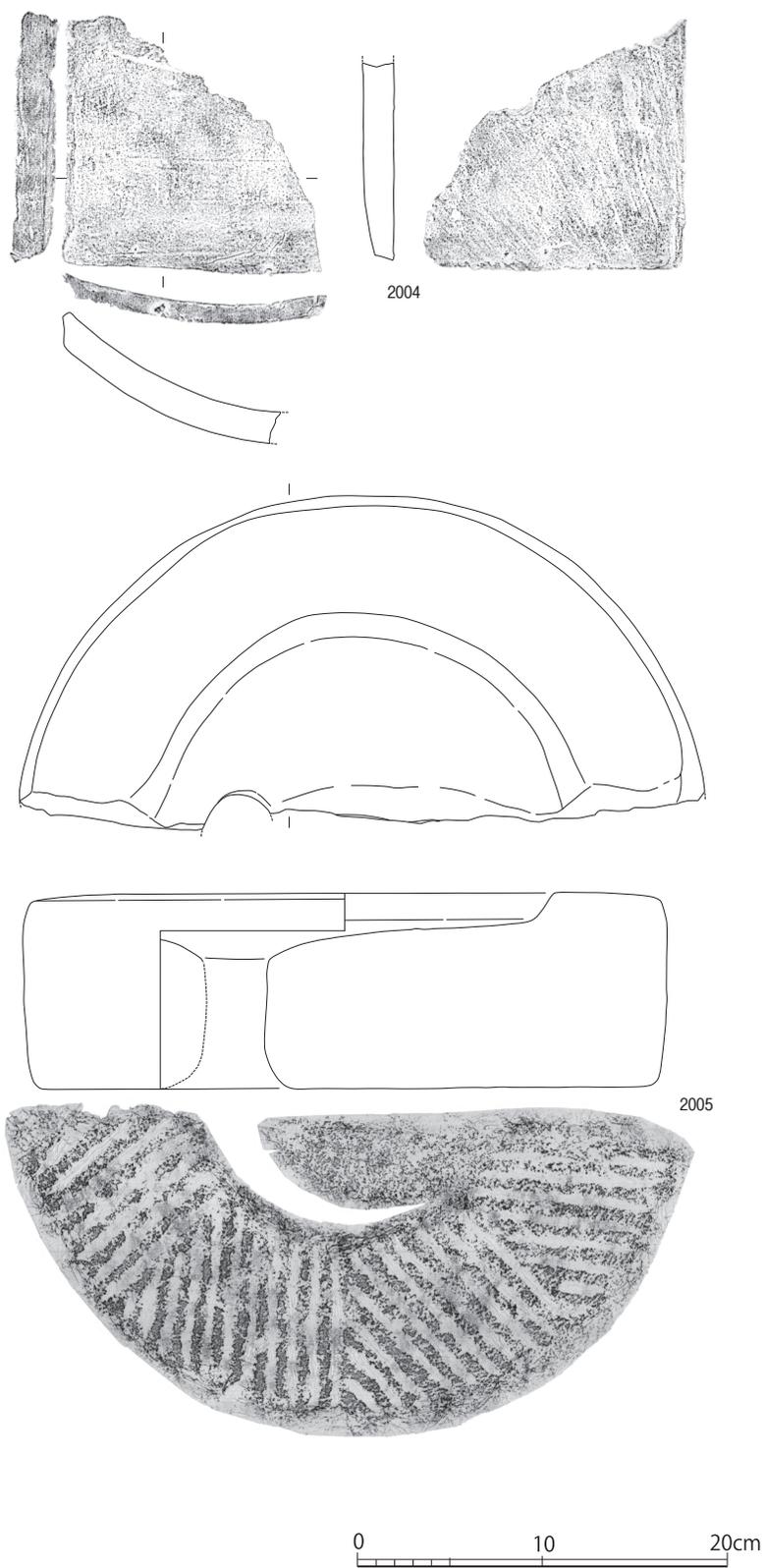
出土遺物からはSD120との同時性を明示する遺物は出土していないが、状況から同時期と判断した。



第238図 SK207出土遺物(1) (1/3, 1/4, 1/6)



第239図 SK207出土遺物(2) (1/4)



第240図 SK207出土遺物(3)(1/4)

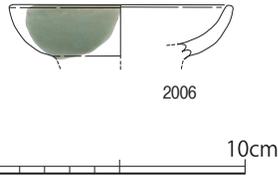
SK220 (第241図)

調査区中央やや南寄り、SD185埋没後に掘られた土坑である。長軸1.12m、短軸0.80m、深さ0.25mの楕円形を呈する。

灯蓋

出土遺物は第242図2006である。龍泉窯青磁であるが、破片が小さく器種は不明である。形状からは灯蓋の可能性もある。

SK220の時期は、この第II段階のSD185埋没後に掘られていることから、この第II段階かあるいは第III段階である。遺物では積極的に第3期にするものが無いので、一応この段階としておく。



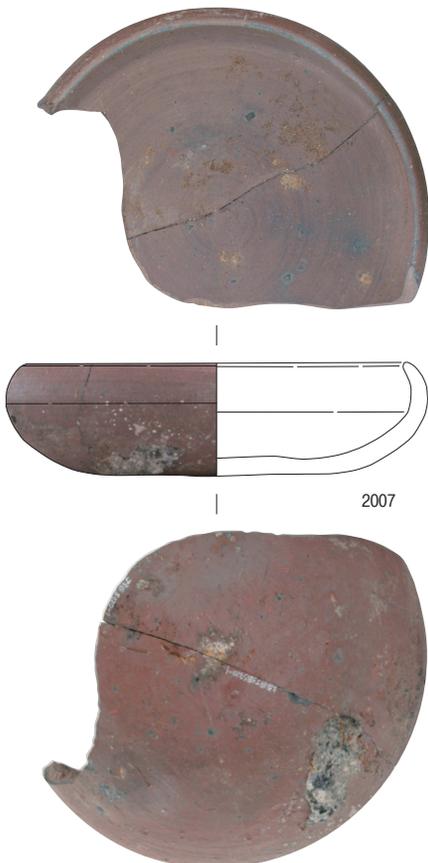
第242図 SK220出土遺物(1/3)

SK320 (第243図)

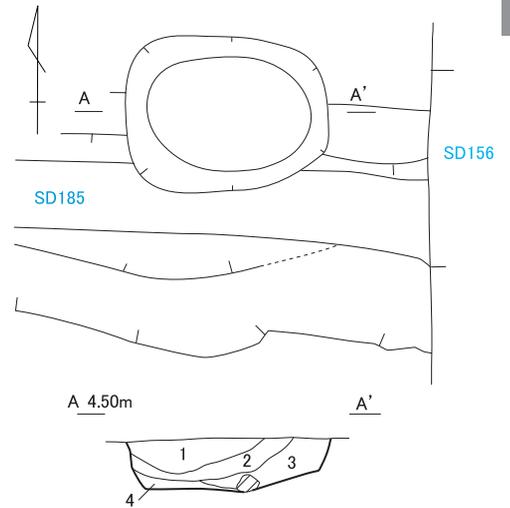
第2南北街路を掘り下げる途中で確認された土坑である。南北1.12m、東西0.32mの長楕円形を呈し、深さは0.20mである。

出土遺物は第244図2007と2008である。2007は備前焼の鉢で、底部と体部の間が明瞭ではない。2008は京都系土師器皿である。

以上の2点だけではあるが、道路最終面よりは古いので、SK320の時期は16世紀後葉としておく。



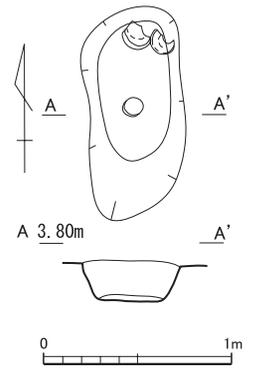
第244図 SK320出土遺物(1/3)



- 1.黒褐色砂質シルト 焼土粒少量含む
- 2.黒褐色砂質シルト 細砂粒少量含む
- 3.黒褐色砂質シルト
- 4.黒褐色砂質シルト



第241図 SK220(1/40)



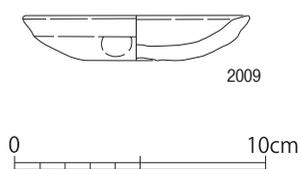
第243図 SK320(1/40)

SK321 (第245図)

SK320と同様、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された土坑である。南北1.10m、東西0.80mの長楕円形を呈し、深さは0.60mである。SD120の断面図(第111図)を見ると、SK320は最も古い道路面を掘り込んで作られていることがわかり、さらにSD120と同時期に機能していたと考えられる。

出土遺物は第246図2009の京都系土師器である。

SK321の時期は、16世紀後葉である。



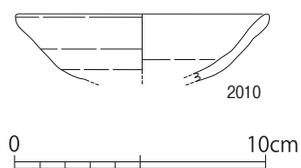
第246図 SK321出土遺物(1/3)

SK322(第247図)

SK320と同様、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された土坑である。南北0.71m、東西0.84mの隅丸方形を呈し、深さは0.47mである。

出土遺物は第248図2010の土師質土器である。

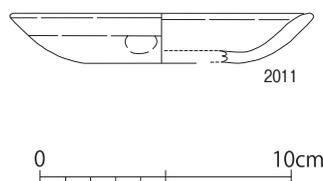
SK321の時期は、2010だけでは判断できないが、道路下遺構ということでこの段階に置いておく。



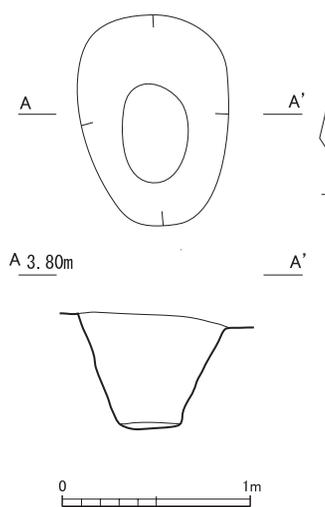
第248図 SK322出土遺物(1/3)

SK347(第249図)

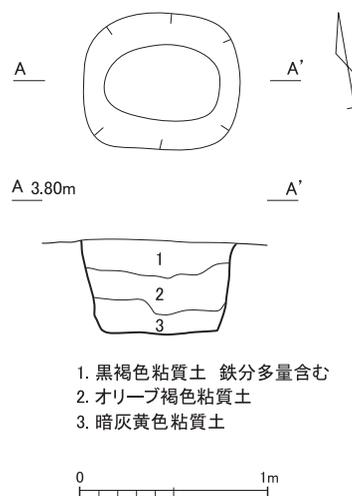
SK320と同様、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された土坑である。南北1.50m、東西0.84mの隅丸方形を呈し、深さは0.62mである。



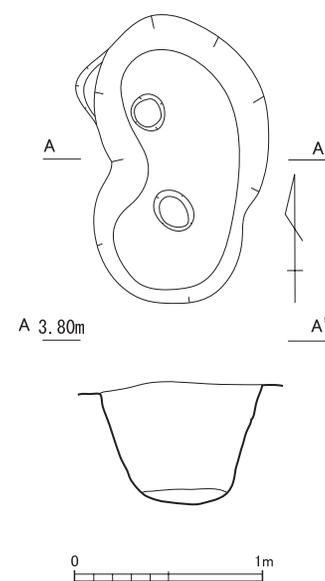
第250図 SK347出土遺物(1/3)



第245図 SK321(1/40)



第247図 SK322(1/40)



第249図 SK347(1/40)

第2南北街路構築以前の井戸SE440を切っている。

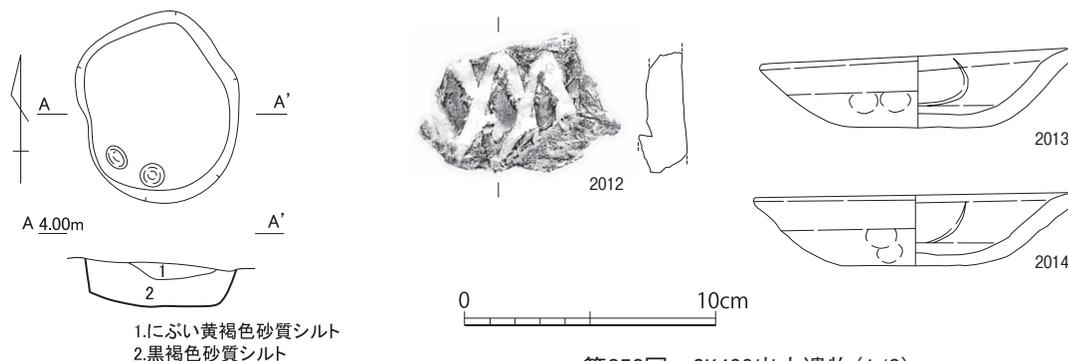
出土遺物は第250図2011の京都系土師器で、やや薄手ではあるものの16世紀後半代のものである。SK347の時期は京都系土師器の年代観から16世紀後半とする。

SK400 (第251図)

調査区南側中央で確認された土坑で、長径1.06m、短径0.78mの楕円形を呈する。深さは0.20mである。土師質土器が壁際で2枚出土している。

出土遺物は第252図2012から2014である。2012は接合部で剥がれた瓦質土器の破片で、太い刻みが入れている。器種は不明。2013と2014は京都系土師器である。

SK400の時期は、16世紀後葉である。



第252図 SK400出土遺物(1/3)

第251図 SK400(1/40)

SK420 (第253図)

調査区の南よりで、第2南北街路を掘り下げる途中で確認された土坑である。SD437を切っている。南北1.72m、東西1.22mの楕円形で、深さは0.28mである。

出土遺物は第254図2015から2018である。2015と2016は景德鎮窯青花碗である。2015は見込みに卍形雲文を、外面に人物と雲文を描くいわゆる饅頭心タイプのものである。2016の文様は不明である。2017は備前焼の鉢、2018は京都系土師器である。

SK420の時期は、出土遺物から16世紀後葉である。



第254図 SK420出土遺物(1/3)

第253図 SK420(1/40)

(4) その他

SX206、SX208（第255～258図）

**排水施設** 調査区の中央やや北寄りで確認された、凝灰岩製の石塔部材や板石を使用して作られた排水施設である。南北に2基並んで検出されたので、北側をSX206、南側をSX208として説明する。

まず、この2基の関係であるが、第256図の断面図から判るようにSX208の堀方を切ってSX206が作られている。底面の高さも異なることから、同時期に機能したのではなく、SX208が機能を失ってSX206を作ったと考えられるが、SX208の石を積み直すことによって機能を回復させることも可能なだけに、若干の疑問も残る。

**五輪塔部材** SX206は全ての石材を凝灰岩製五輪塔の部材でまかなっている。まず、地輪を6個一列に並べ導水路の床を作る。そして、それぞれの地輪にほぼ対応するように、側壁として地輪と火輪を並べる。その上に火輪を天井石として、逆さまに臥せる形で架けている。側石は本来12基（石）あったと考えられるが、その内7基しか残らず、天井石は3基しか残っていなかった。

**凝灰岩製石材** SX208は、凝灰岩製の加工した石材を主に使用して作られている。導水路の床として長方形の石を4枚並べ、側壁としては左右とも3枚、天井石としては2枚の長方形の石で塞いだ隙間を五輪塔の火輪と未加工の石で塞いでいる。検出時の状況としては、断面図からわかるように、東から3番目の床石がずれて、さらに天井石も中央付近で内部に落ちかかった状態であった。

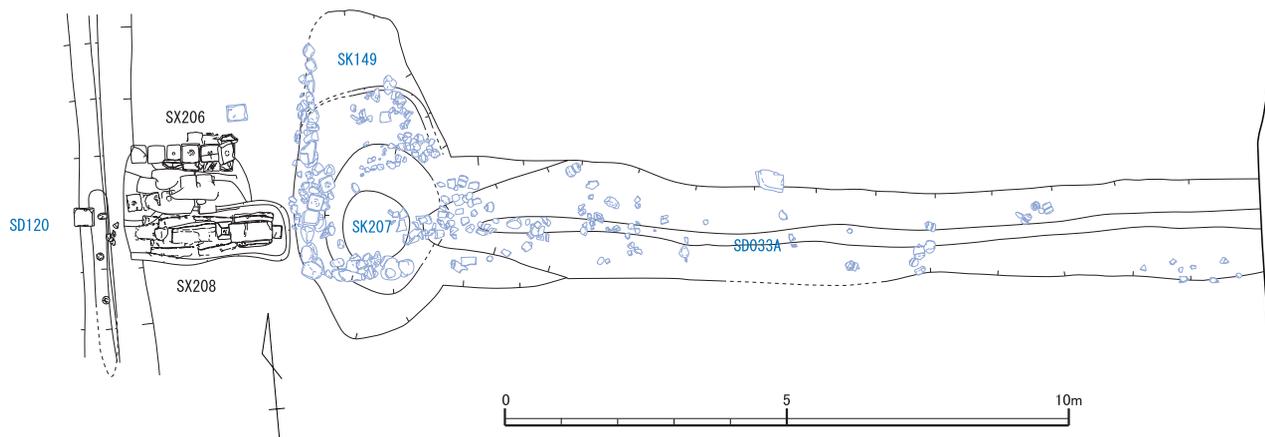
これらの排水施設は、SD120に向け開口していたと考えられる。実際、SX206の西側すぐ下のSD120の壁の途中からは、SX206を構成していたと考えられる五輪塔火輪が1基がずれ落ちた形で出土している。では反対側（東側）はどうかというと、SK207の土坑がある。詳細は後述するが、壁際に礫を積んで池状にしたもので、一旦このSK207に溜まった水を、SX206、SX208を通してSD120に排水していたことが想定できる。さらに、SX206とSX208は天井石で覆っていたことから、いわゆる暗渠と考えられる。そうすると、SD120とSK207の間の空間には、SX206などを封じ込めた土塁や築地のような施設が存在したこととなる。

**暗渠**  
**土塁や築地**

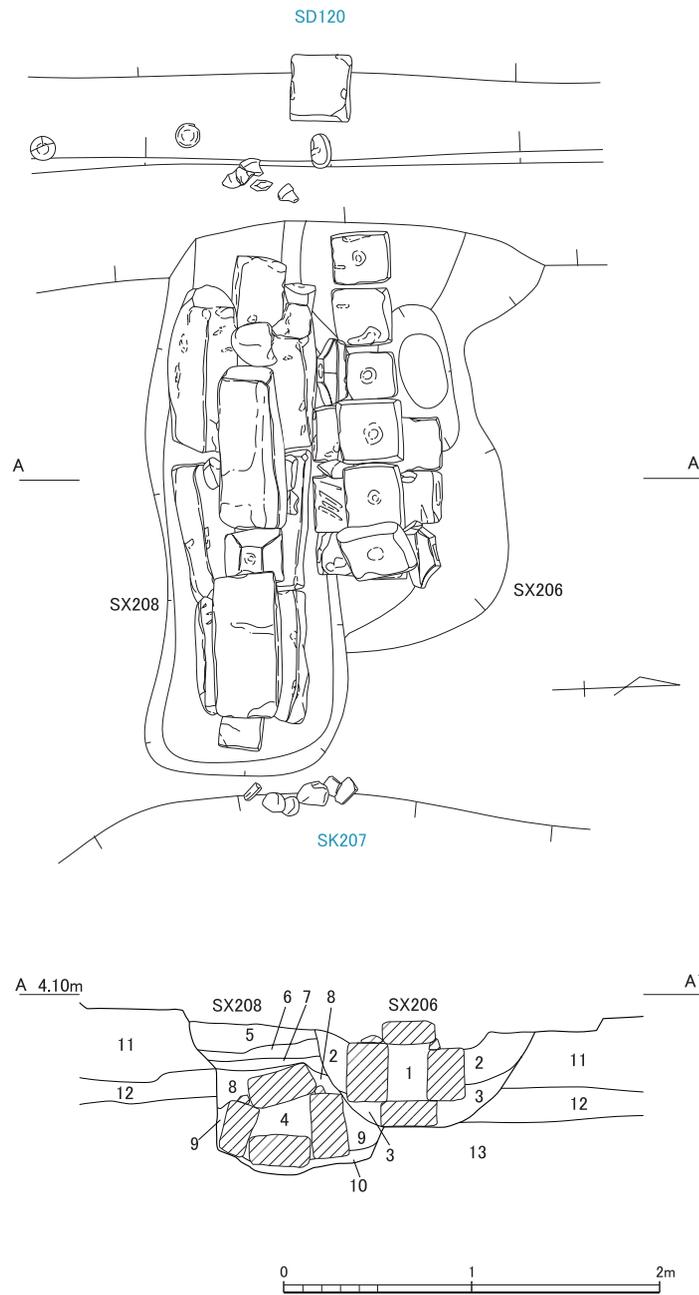
出土遺物はいずれも堀形内から出土したもので、SX206のものは第259図2019から第260図2036である。2019は龍泉窯青磁の鏝縁皿で、鏝の端部が上方に摘み上げられるもの。内面には蓮弁文がある。2020は瓦質土器の火鉢と考えられる破片で花文のスタンプがある。2021から2036は五輪塔部材である。

SX208からは第261図2037から2040が出土している。2038から2040は五輪塔部材である。2037は龍泉窯青磁碗で、口縁部が小さく外反する。内外面とも無文である。

遺構の時期は、SD120が機能していた時期と同時であるので、1570年代から1580年代の前半である。

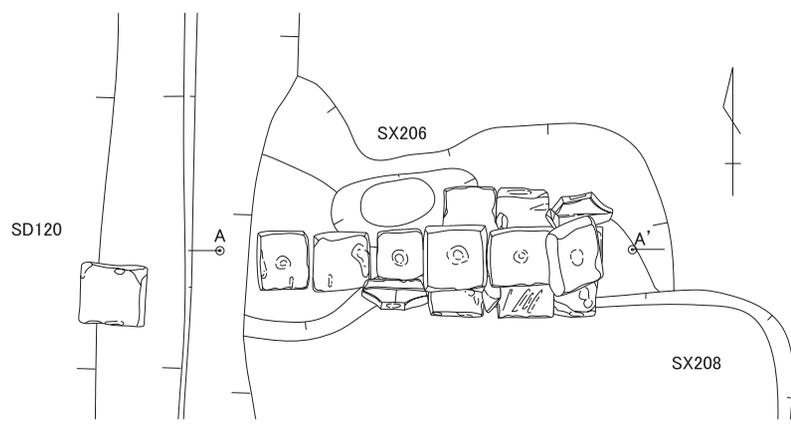
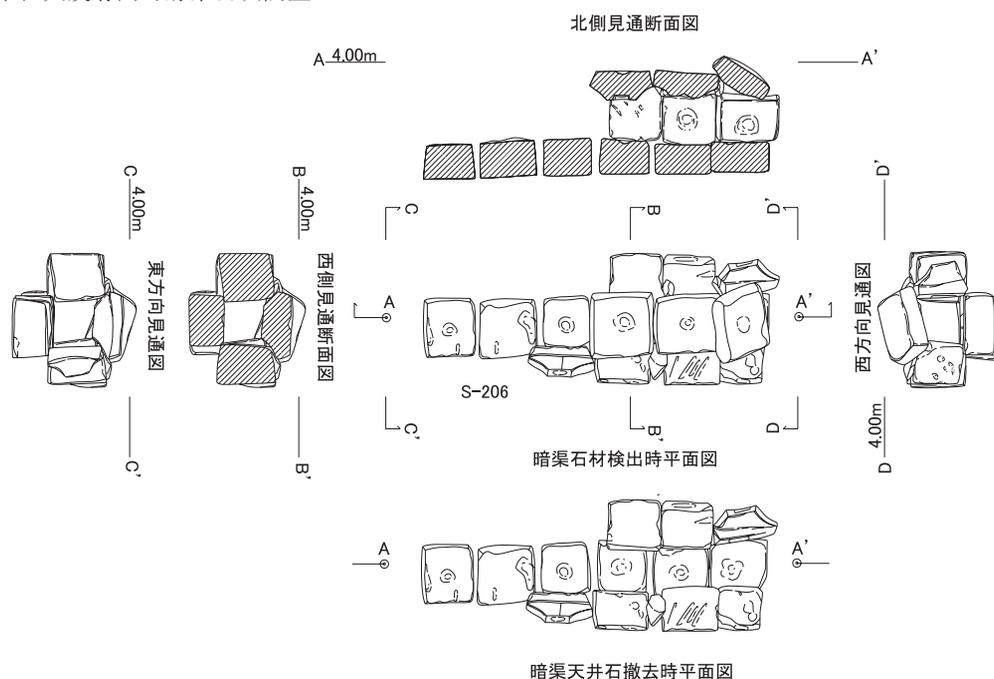


第255図 SX206、SX208とSK207、SD033Aの位置関係

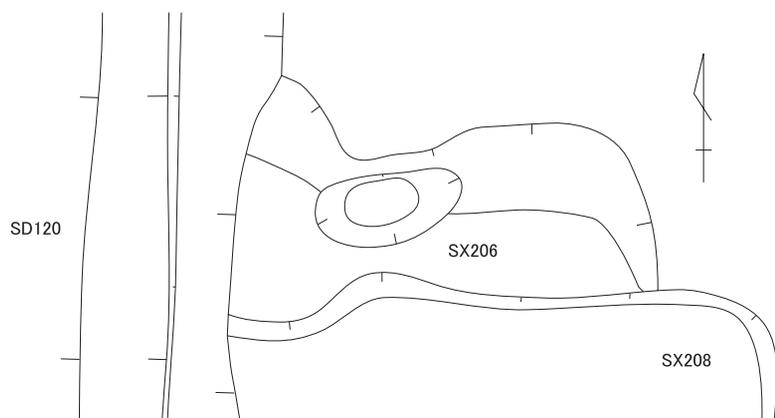


1. 灰黄褐色砂質シルト SX206 暗渠内埋土
2. にぶい黄褐色砂質シルト SX206 埋土
3. 暗褐色砂質シルト SX206 埋土
4. 灰黄褐色砂質シルト SX208 暗渠内埋土
5. 褐色砂質シルト SX208 埋土
6. 灰黄褐色砂質シルト SX208 埋土
7. にぶい黄褐色砂質シルト SX208 埋土
8. 黒褐色砂質シルト SX208 埋土
9. 暗褐色砂質シルト SX208 埋土
10. 暗褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む、SX208 埋土
11. 褐色砂質シルト SD160 埋土
12. にぶい黄褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む、SD160 埋土
13. にぶい黄褐色砂質シルト SD160 埋土

第256図 SX206、SX208検出状況(1/40)



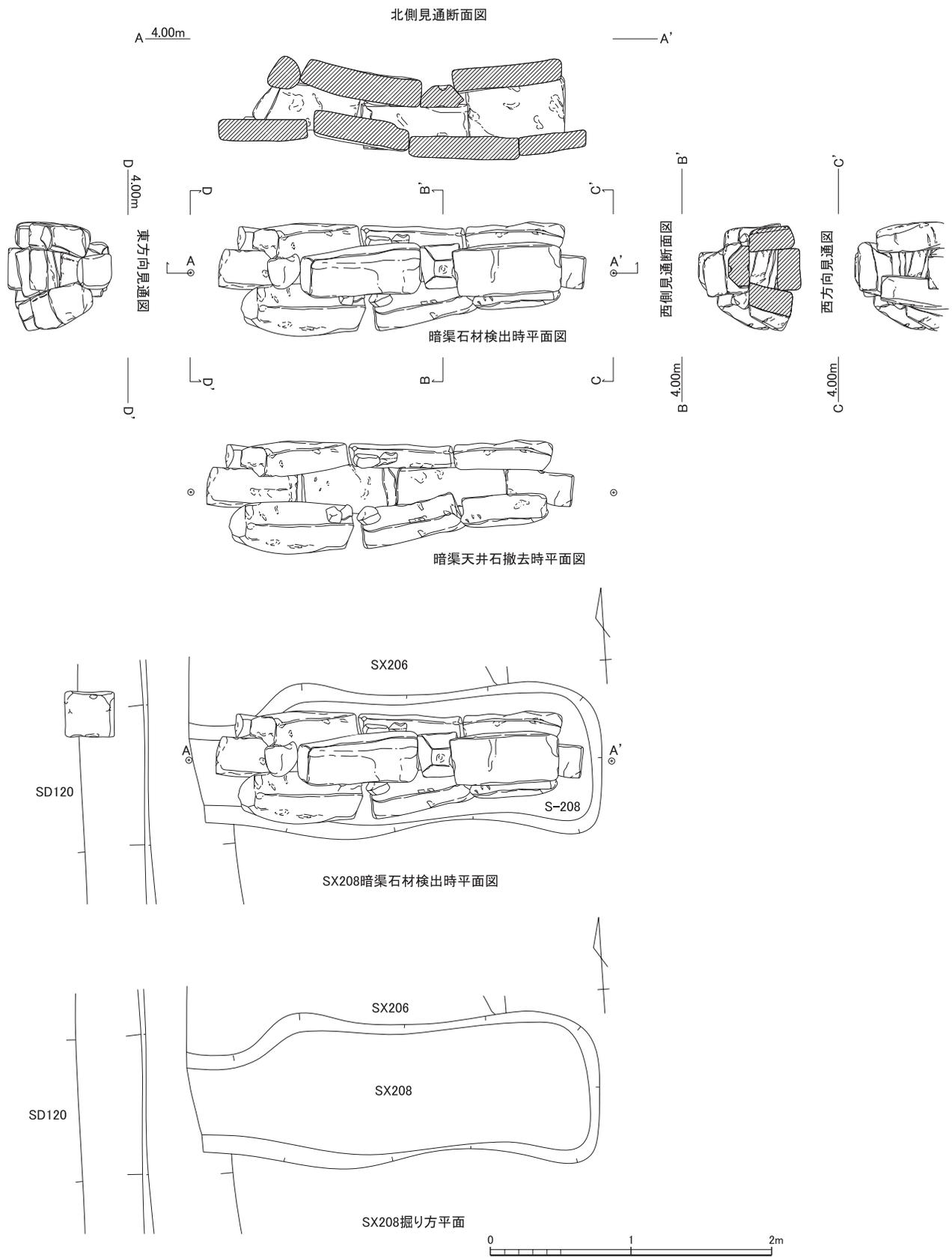
SX206暗渠石材検出時平面図



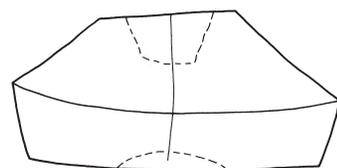
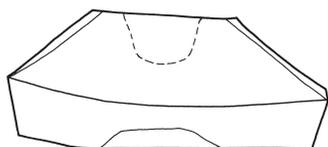
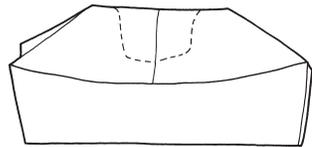
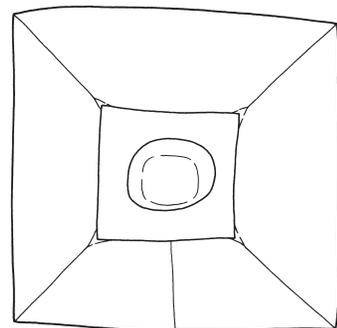
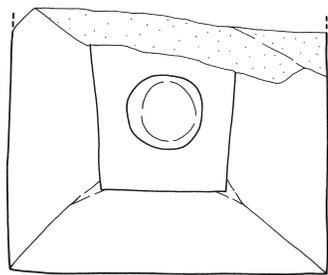
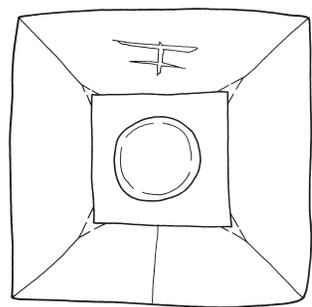
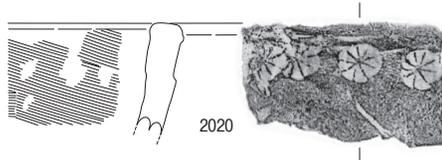
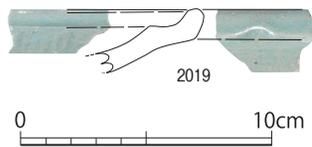
SX206掘り方平面



第257図 SX206(1/40)



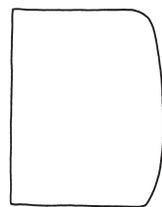
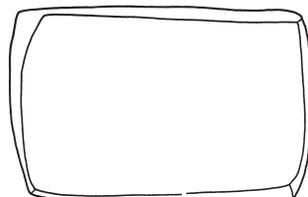
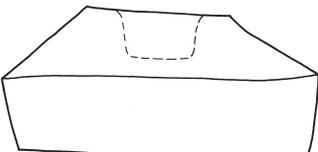
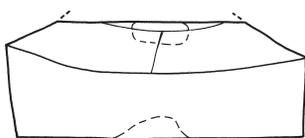
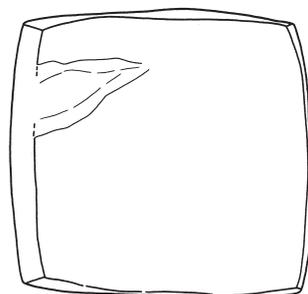
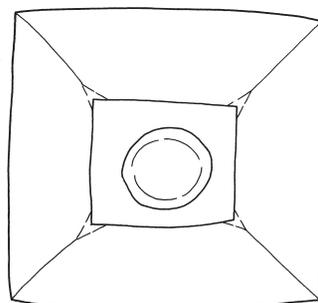
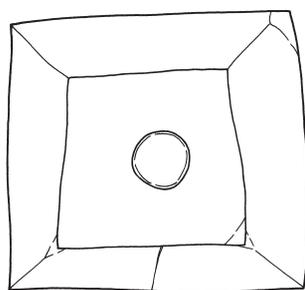
第258図 SX208(1/40)



2021

2022

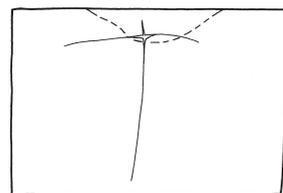
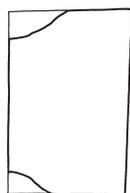
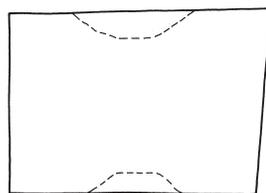
2023



2024

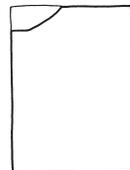
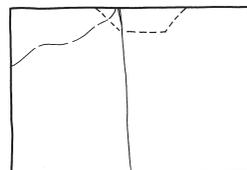
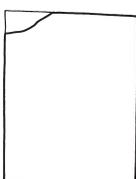
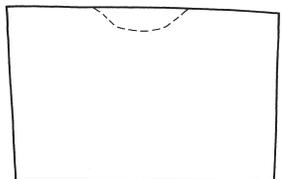
2025

2026



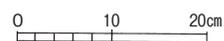
2027

2028

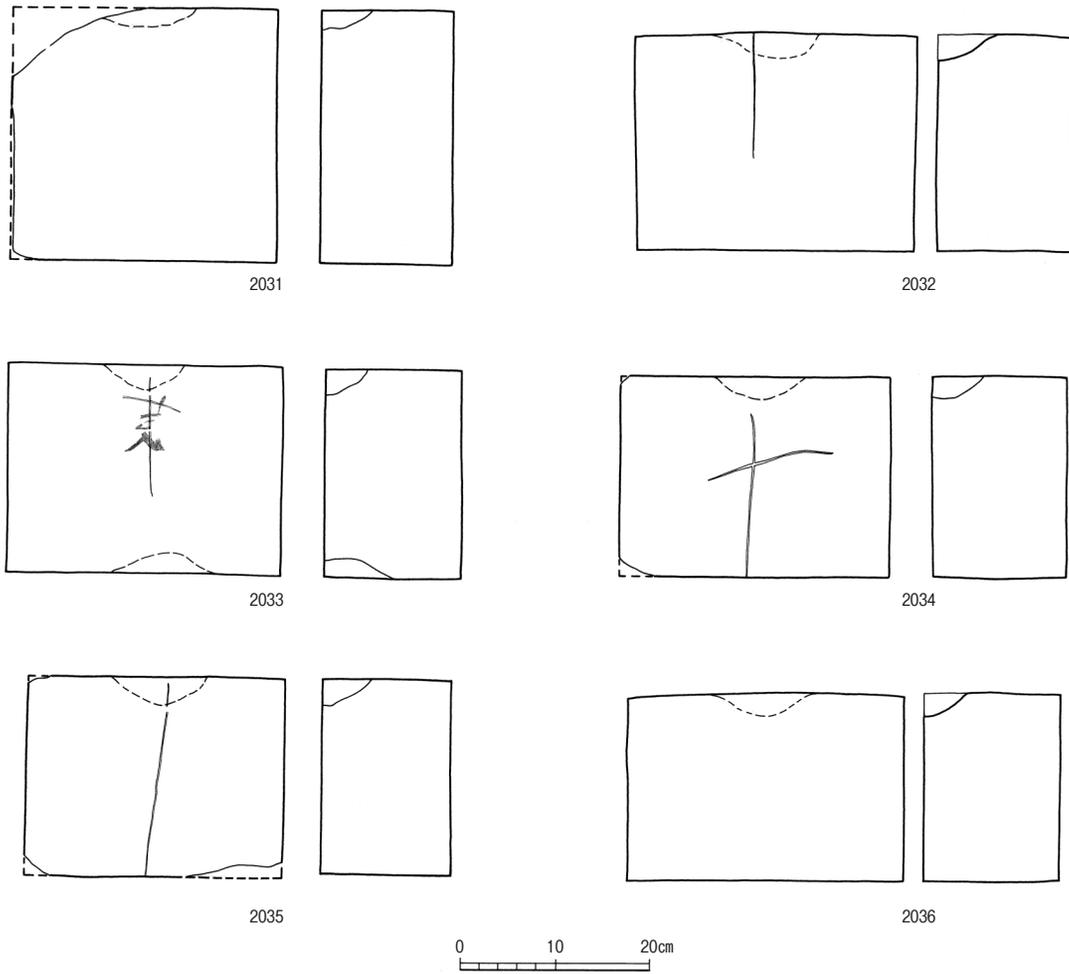


2029

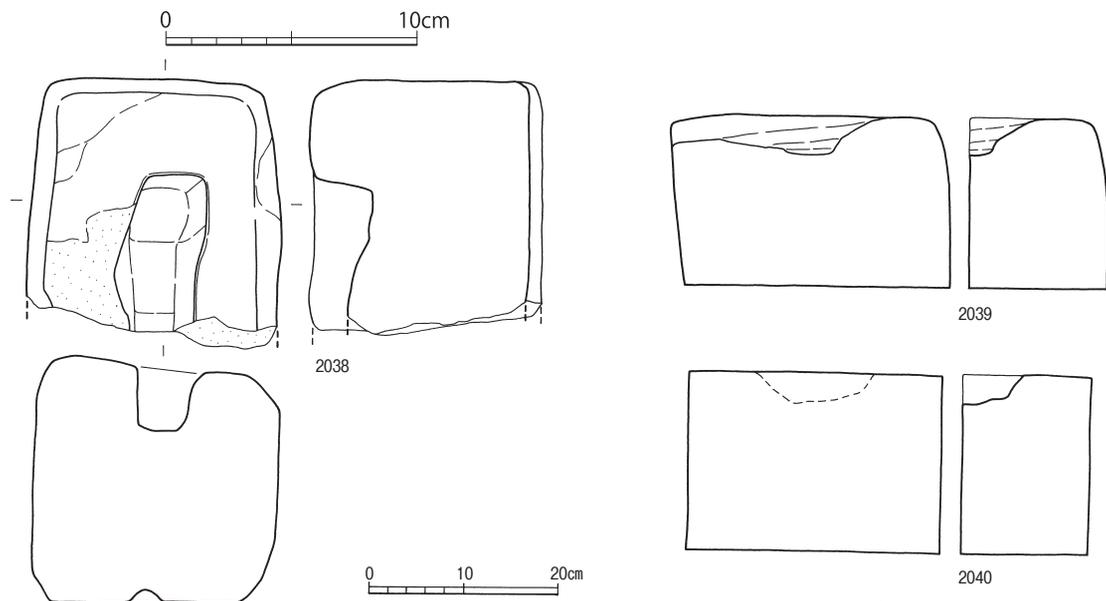
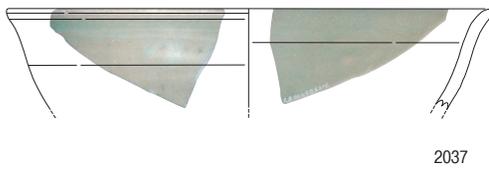
2030



第259図 SX206出土遺物(1) (1/3, 1/8)



第260図 SX206出土遺物(2)(1/8)



第261図 SX208出土遺物(1/3, 1/8)

SX310 (第262図)

調査区の南西部で検出された焼土が厚く堆積した広がりである。焼土は、第2南北街路の側溝であるSD142が埋没した後、道路面と一部SD120の内部にかけて厚さ10～20cmで堆積し、内部には遺物を多量に含んでいた。この焼土は島津氏侵攻に伴う火災処理の焼土と考えられるので、焼土の堆積自体は天正14年以降のこととなるが、含まれる遺物は天正14年段階に使われていたものの可能性が高いのでこの段階で扱う。

出土遺物は第263図2041から第269図2090である。2041から2043は青磁である。2041は菊花皿で、畳付けに砂が付着している、2042も同様の皿と思われる。2043は輪花になる腰折れの皿。これらはいずれも淡い発色の景德鎮窯青磁である。2044から2047は白磁。2044は口縁部が小さく外反する。内面に沈線が一条廻る。2045と2046は皿の高台。2047は壺または瓶の口縁部である。2048から2052は景德鎮窯青花碗である。2048は見込みに卍形の雲文、2049は実(桃?)のついた折枝文、2050と2051は団龍を描く。2052は花文であろう。2049を除いて饅頭心タイプである。2053と2054は漳州窯青花碗。見込みは円形に釉剥ぎしており、コバルトの発色が悪く茶色になっている。2055は龍泉窯青花の小野編年E群の皿で、龍が描かれている。2056は漳州窯青花の皿で、見込みには比較的丁寧に唐草文が描かれている。2057も漳州窯青花の皿で、口縁部が鐳状に伸びる。外面の中程にソギによる溝が巡る。口縁端部上面には雲文?帯を描く。2058は褐釉磁器で、縦方向に列点文のような小さな突起が並ぶ。

2059と2060は瀬戸美濃系の天目茶碗である。2059は削り出しの高台を持つ。2060は小型天目茶碗である。2061から2063は備前焼である。2061と2062は摺り目はわからないが、乗岡編年中世6期bから近世1期aにかけてのものである。2063は壺で、口縁部が外反しながら開く。2064は焼締め陶器の底部で、中国産かもしれない。

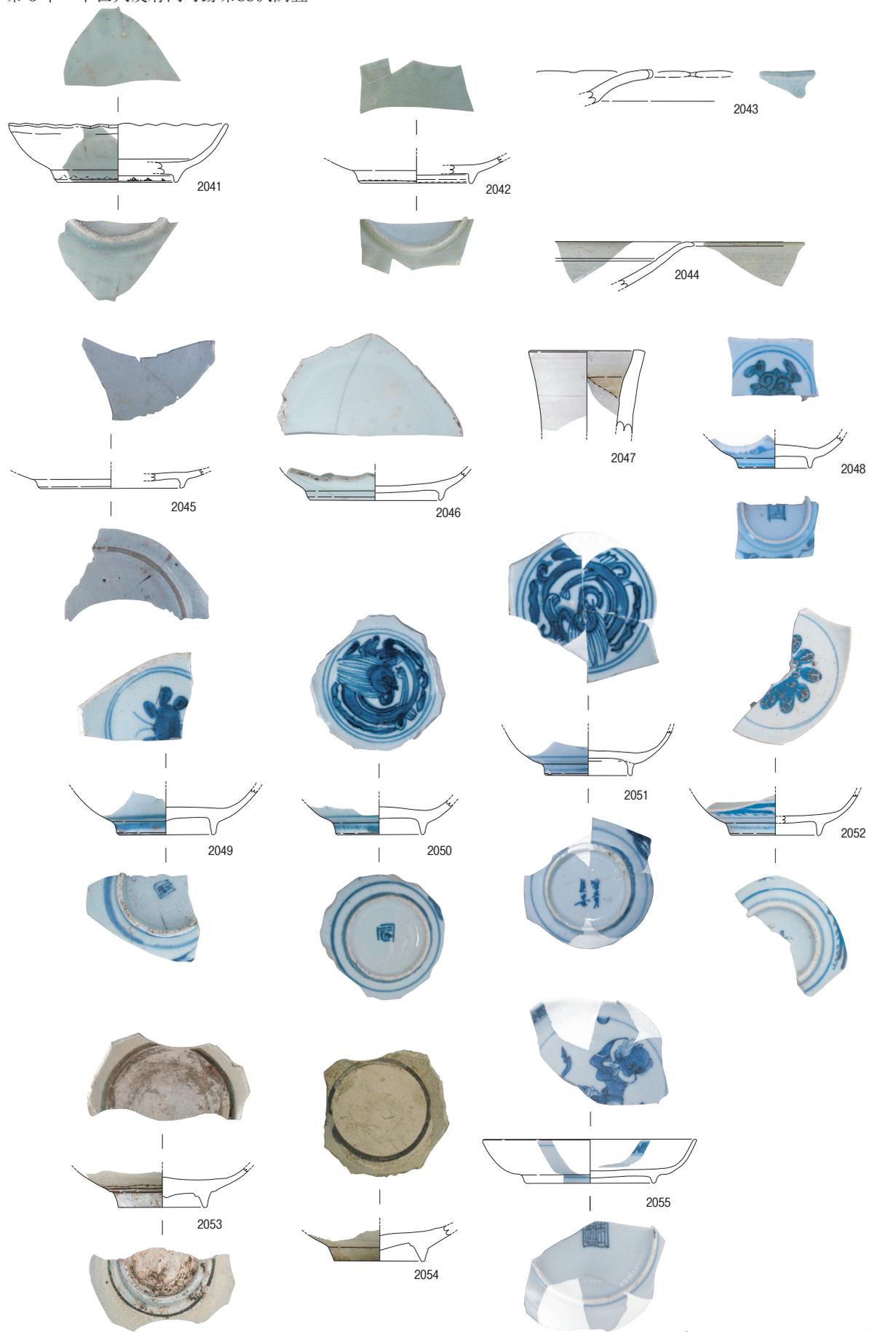
瓦質土器  
華瓶  
2065から2067は瓦質土器である。2065は上面から見て六角形を呈する花瓶と思われる優品である。同一個体の破片がSE070(井戸)とSD142から出土している。2066も上面から見て六角形を呈するが、スタンプ文も違うので、別個体と思われる。2067は甕の底部である。

面戸瓦  
2068から2086は瓦である。2068と2069は丸瓦瓦当で、2068は巴が小さな圏線に納まり、珠文が17点のB類、2069は巴が大きく珠文が38個のC類である。2070は平瓦瓦当で、中心飾りがやや硬化した蓮華文のe類である。2071から2076は丸瓦で、内面の吊紐痕が大きいもの(2071、2072)と、幅の狭い多条のもの(2074)がある。2075は道具瓦、2076は面戸瓦である。2077から2084は平瓦である。横幅は25cm程度ある。2085と2086は塼である。

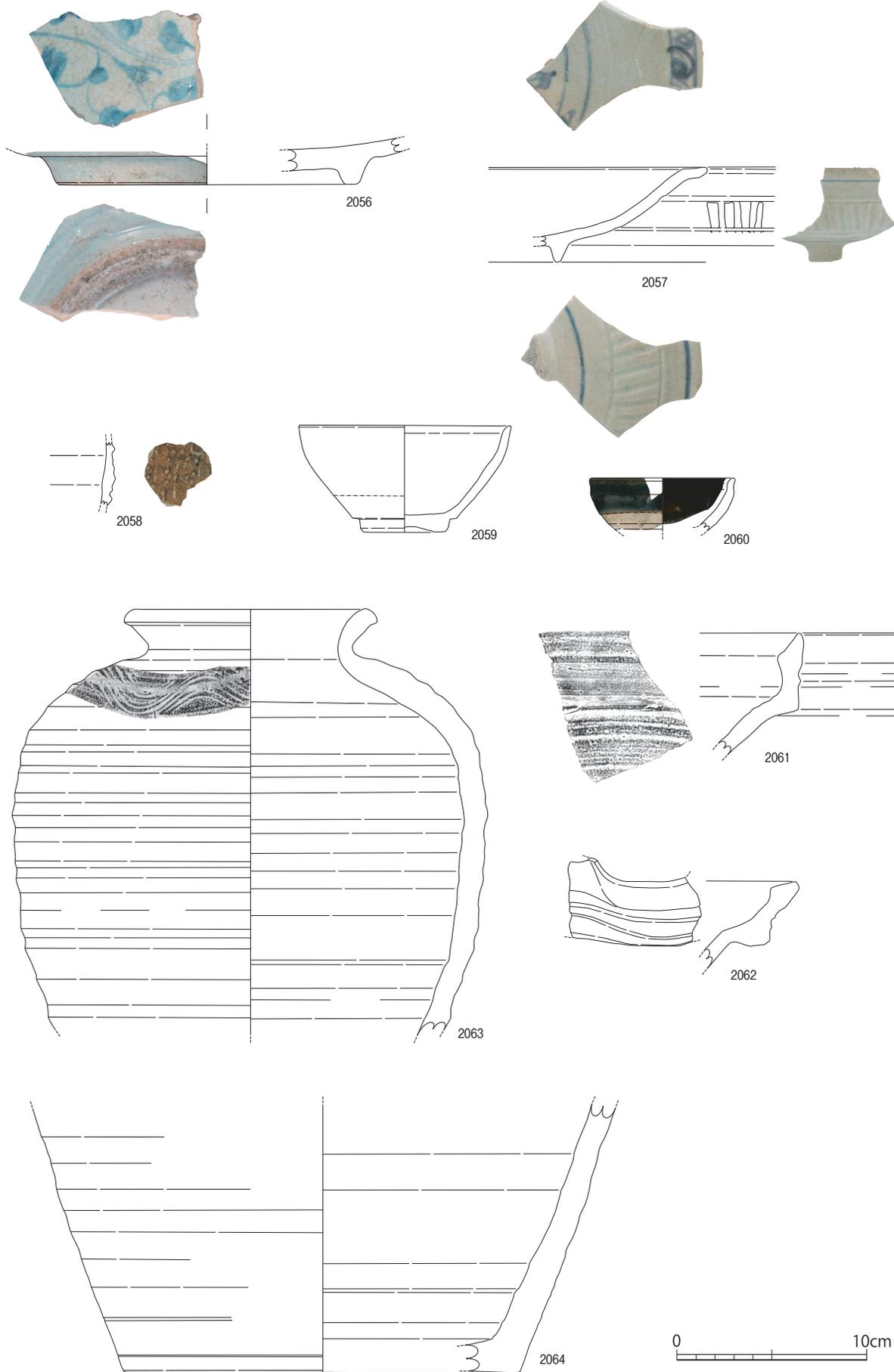
燭台  
2087は素焼きの燭台、2088は器種不明の脚部で、外面はよく磨かれている。脚は大きく開く。2089は素焼きの土錘、2090は茶臼の下臼である。

以上の遺物は、前記したように1584(天正14)年と考えられる火災に伴ういわゆる「火災処理遺構」と考えられるので、遺物群の時期は天正14年段階の一括資料と考えて良いだろう。

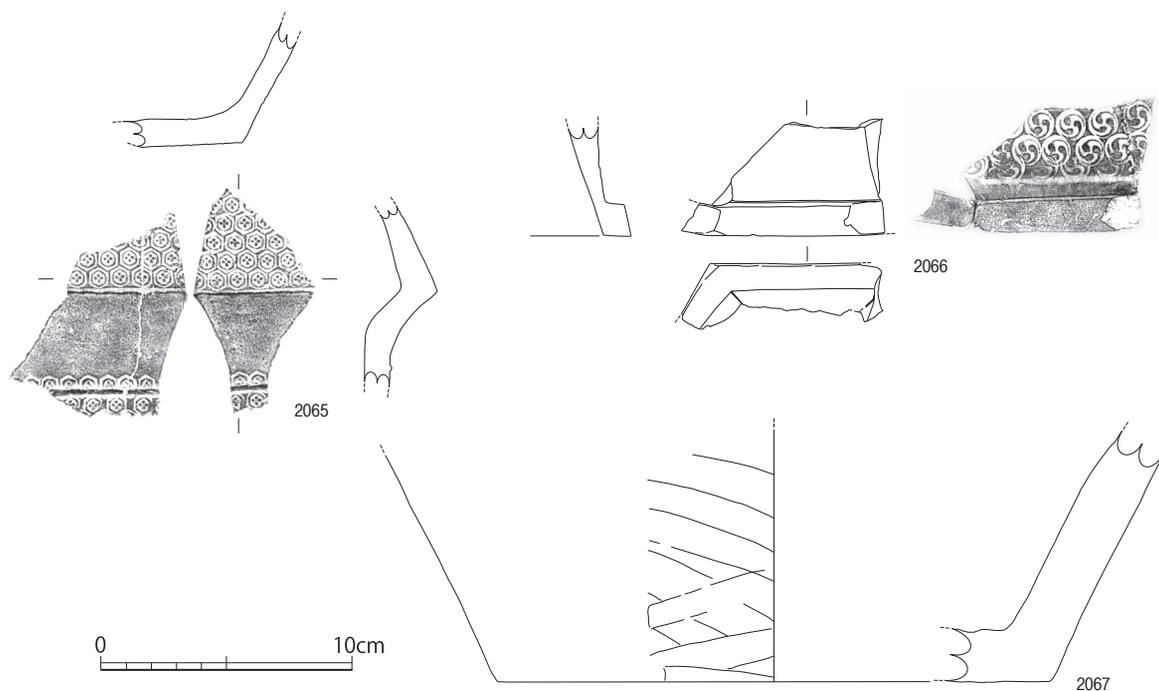




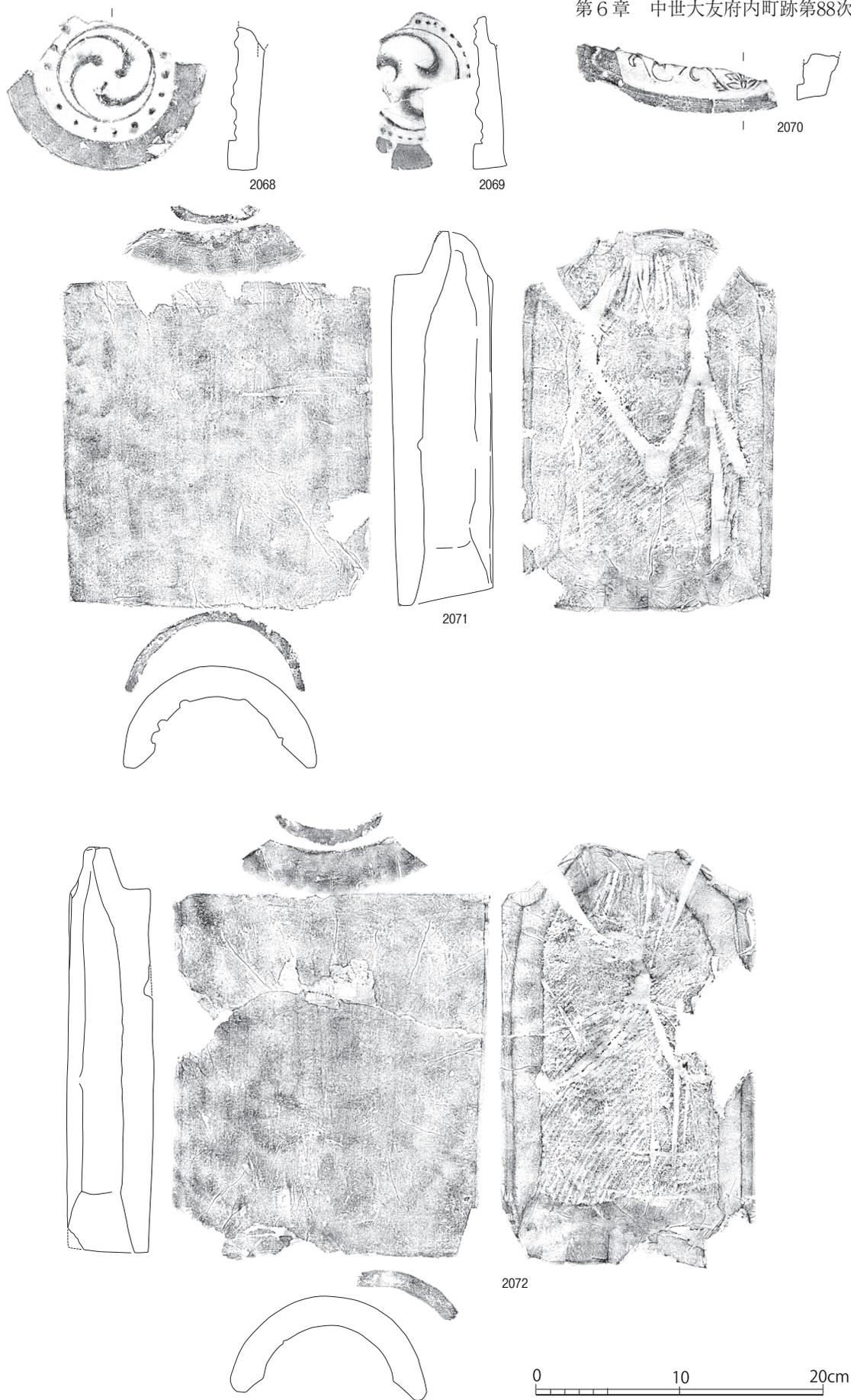
第263図 SX310出土遺物(1) (1/3)



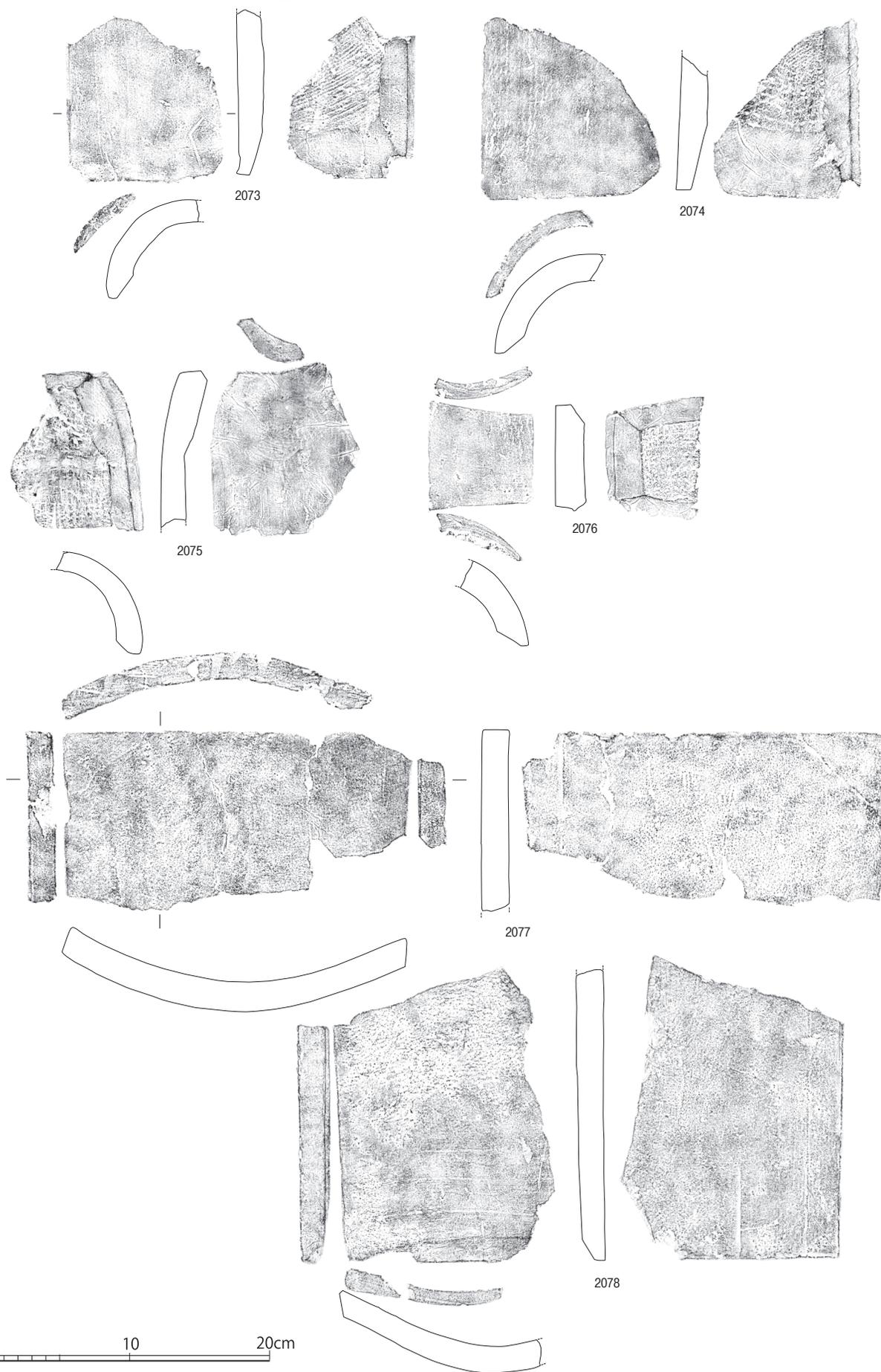
第264図 SX310出土遺物(2) (1/3)



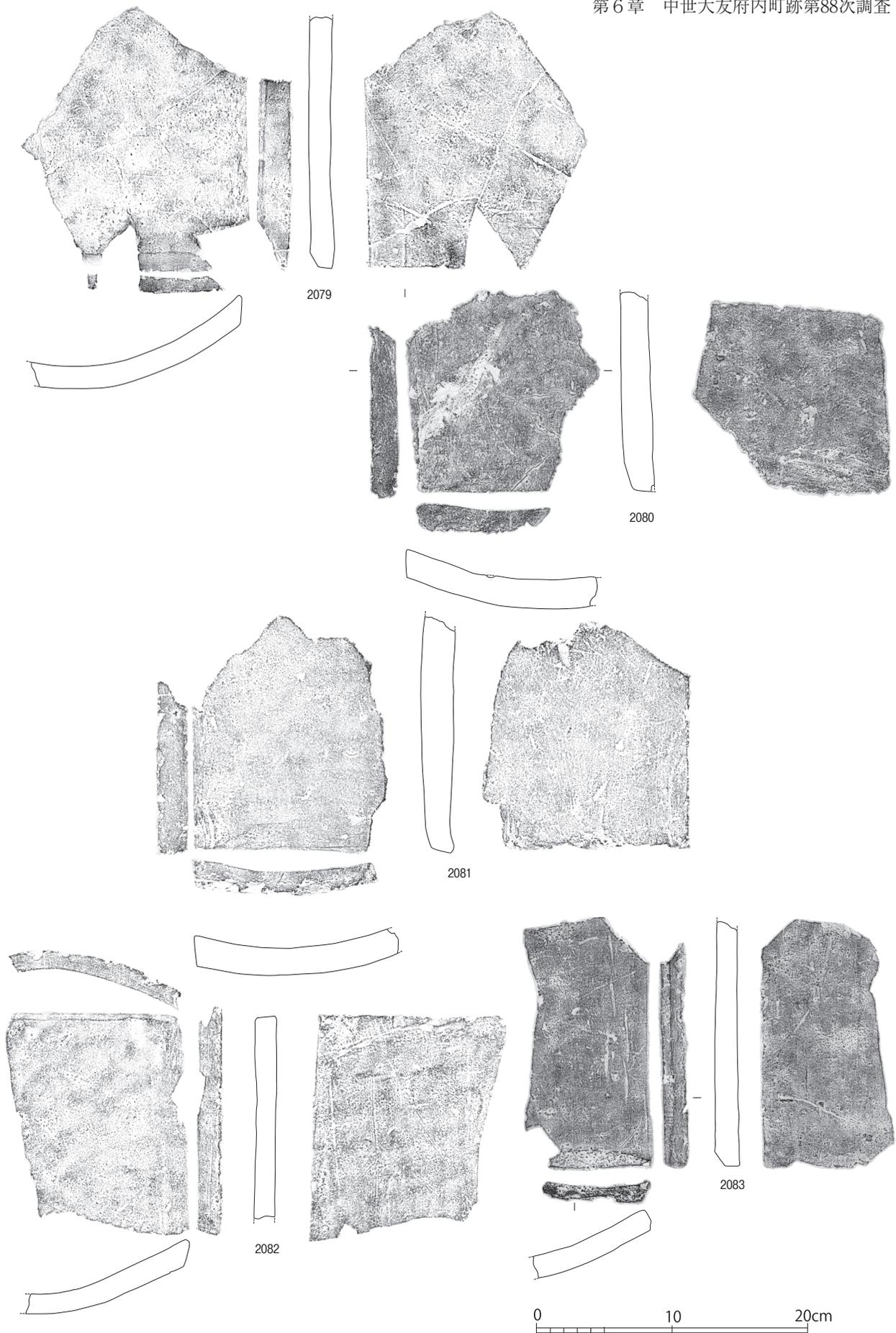
第265図 SX310出土遺物(3) (1/3)



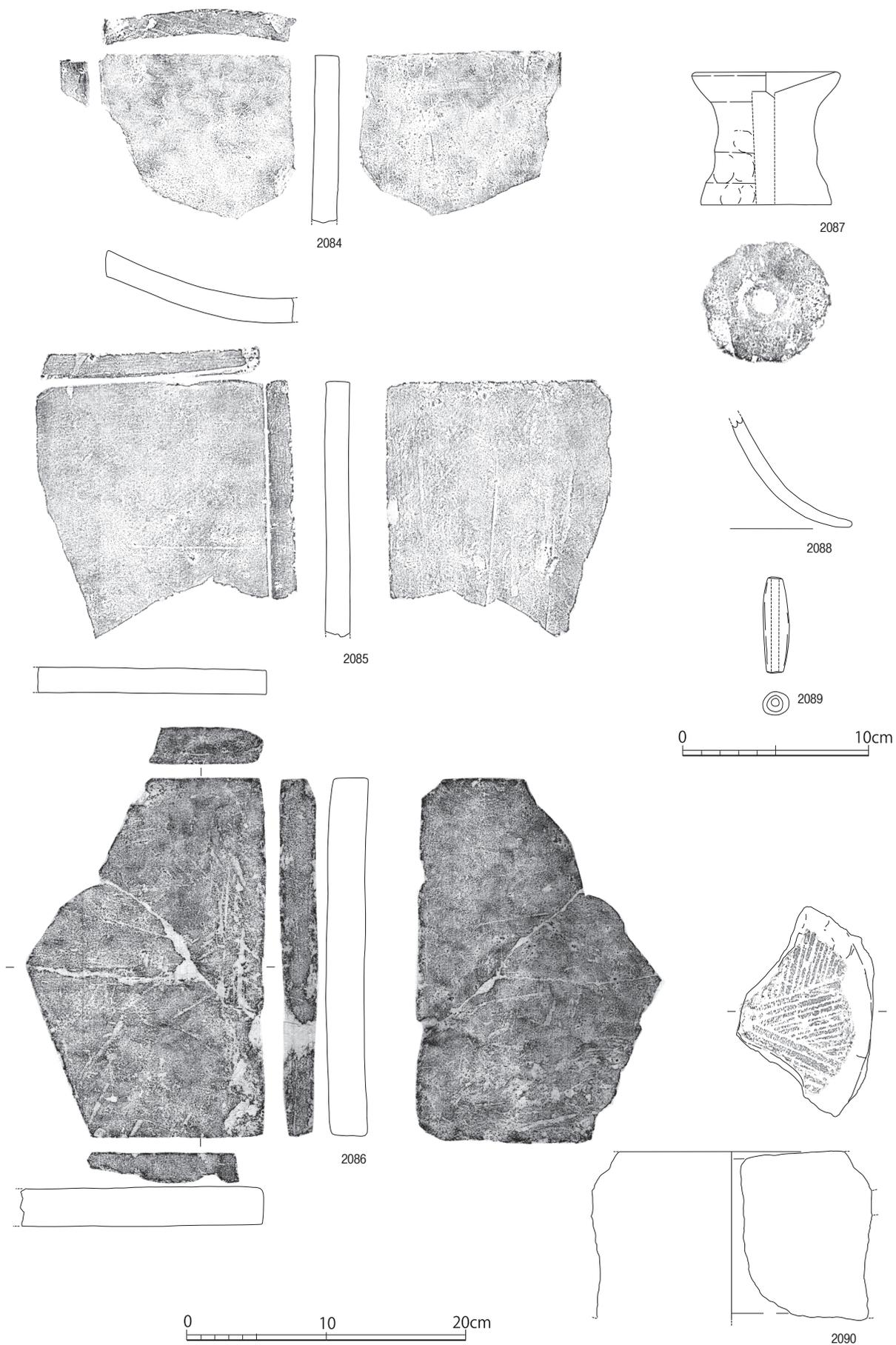
第266図 SX310出土遺物(4) (1/4)



第267図 SX310出土遺物(5) (1/4)



第268図 SX310出土遺物(6) (1/4)



第269図 SX310出土遺物(7) (1/3, 1/4)

3 「寺院（称名寺）」段階（1341年～1560年代）の遺構・遺物

暦応4年（1341）～永禄年間（1558～1570）  
 ここでは、暦応4（1341）に称名寺が名ヶ小路町に創建されてから、永禄年間（1558～1570）に沖の浜に移転するまでの時期に相当する遺構をあつかう。

(1) 溝

SD033B（第270図）

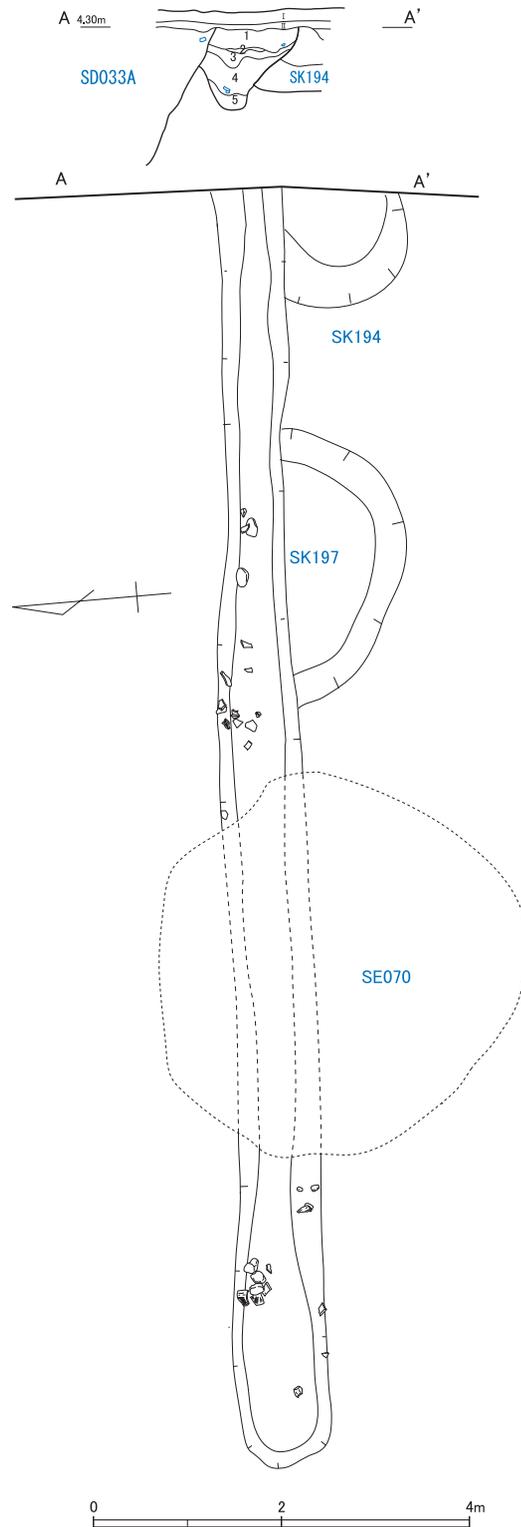
SD033Bは調査区の中央付近で東西に延びる溝である。当初はSD033Aと1本の溝と思われたが、掘り下げると2本であることがわかったため、新しい方をSD033A、古い方をSD033Bとした。SK194を切っている。巾0.88m、深さ0.80mで、長さは13.4m確認している。東側は調査区外に延びるが、西側はSK207の手前で終わる。

出土遺物は第271図2091から2101である。2091は同安窯青磁椀。2092は白磁の碗、2093は白磁の皿で、高台は挟りが入る。2094は瓦質の碗。2095から2097は瓦質土器で、2097は輪花となる。2098は耳土器、2099は平瓦、2100は土製の玉。2101は銅銭で「永楽通宝」である。

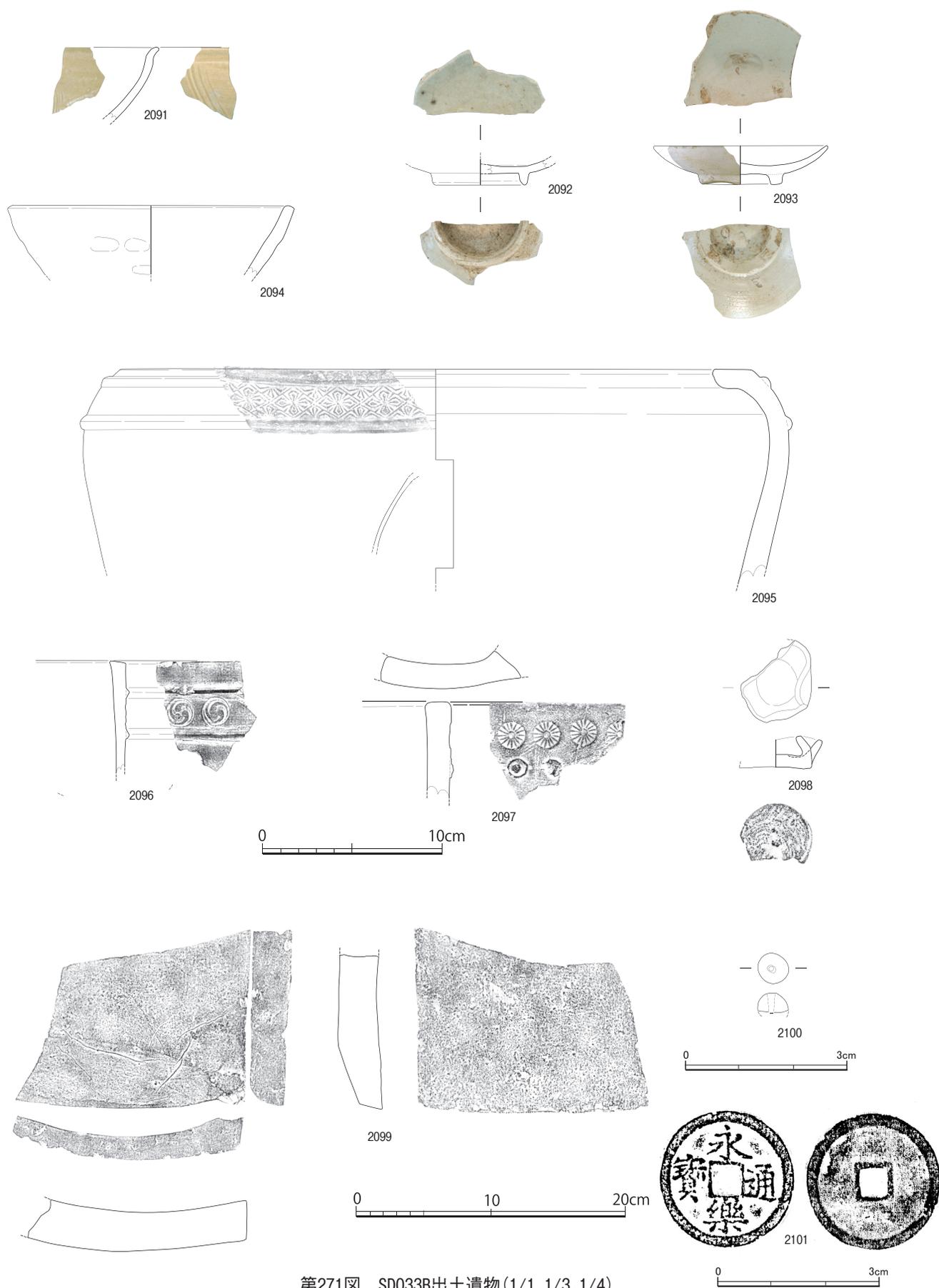
遺構の時期は、15世紀の後半代と考えられる。

土玉

- |   |          |     |       |      |        |             |
|---|----------|-----|-------|------|--------|-------------|
| 1 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性なし   |             |
| 2 | 10YR4/4  | 褐色  | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性なし   |             |
| 3 | 10YR3/3  | 暗褐色 | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性なし   | 焼土少量含む      |
| 4 | 10YR3/2  | 黒褐色 | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性なし   | 焼土・炭化物少量含む  |
| 5 | 10YR3/2  | 黒褐色 | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 黄褐色ブロック少量含む |



第270図 SD033B (1/80)



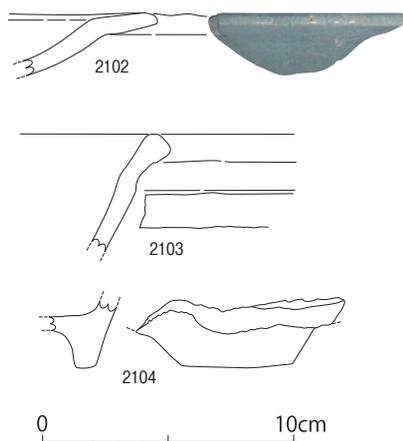
第271図 SD033B出土遺物(1/1, 1/3, 1/4)

SD060A、B (第272図)

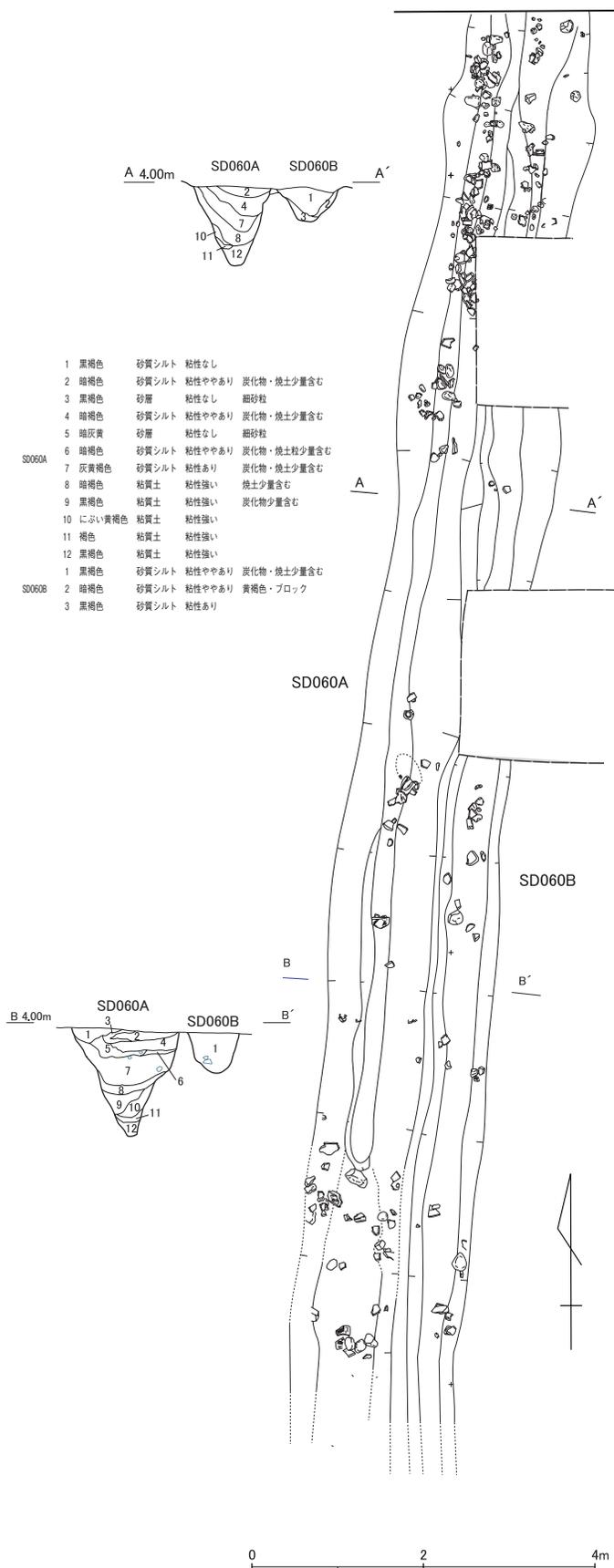
調査区の北側において、やや東寄り  
りて検出された南北に延びる溝で、  
SK061を切っている。北側は調査区外  
に延びるが、南側はSD033Aと重なる  
あたりで終わる。これは、SD033Aの  
南側ではSD060の検出面レベルでも掘  
り込みが検出されなかったことによ  
る。当初は1本の溝と思われたが、掘  
り下げると2本が切り合って平行に延  
びているのが確認されたので、新し  
い方をSD060A、古い方をSD060Bと  
した。SD060Aは、幅1.1m、深さ1.2m  
で、断面V字形を呈す。SD060Bは、  
巾0.77m、深さ0.4mで、断面は緩やか  
なU字形を呈す。このSD060Bを南側  
に延長するとSD225にほぼ繋がるの  
で、あるいは一セットとなるような遺  
構だったのかもしれない。

出土遺物の内、第273図2102から  
2104はA、Bの帰属が不明。2102は青  
磁の口折皿で、2103は瓦質土器の鍋、  
2104は火鉢の脚部である。

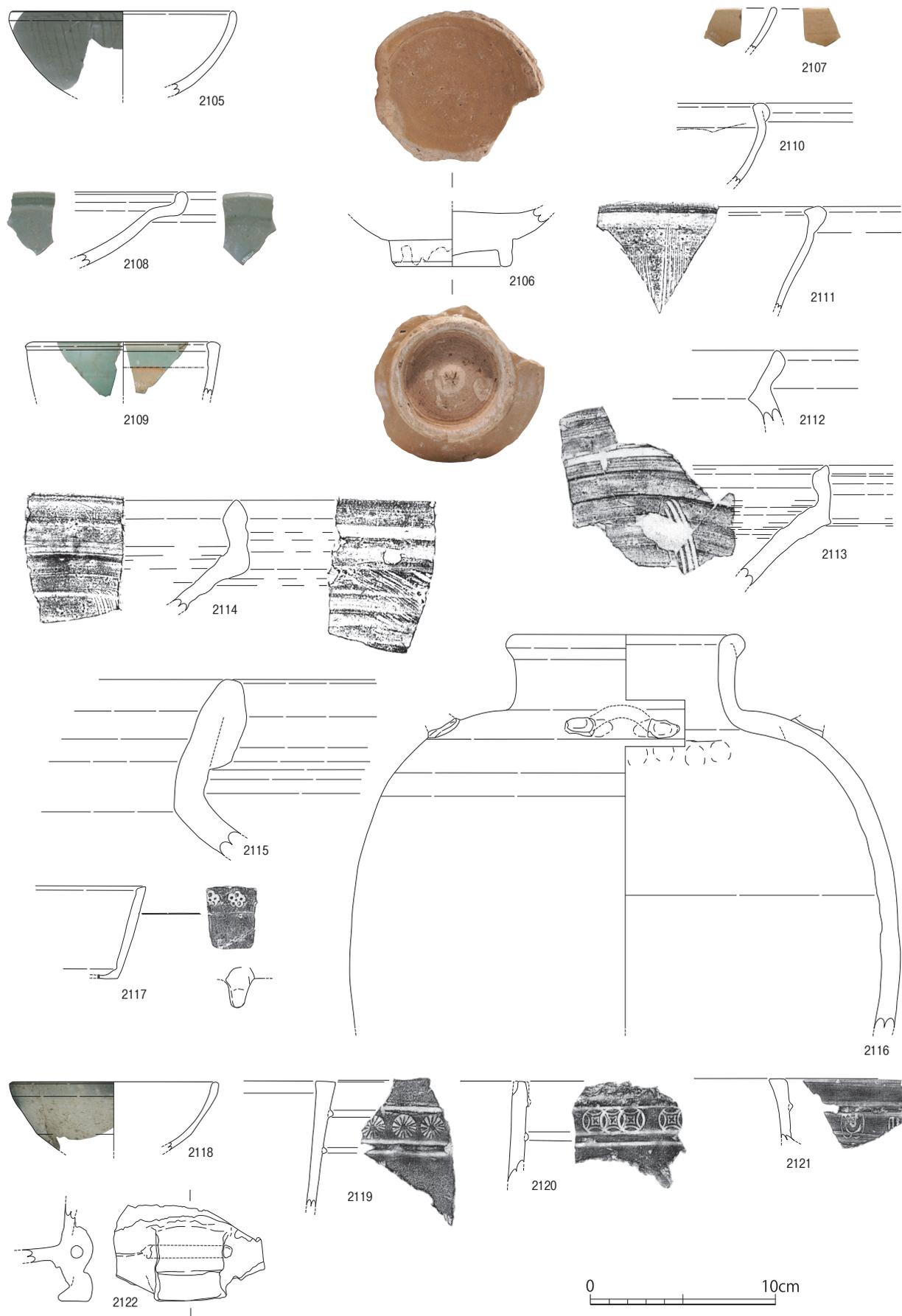
第274図2105から第277図2137は  
SD060A出土。2105から2109は青磁。  
2105は篋描き沈線で連弁文を刻む。  
2106と2107は焼きのあまい碗で、無  
文である。2108は口縁部が一度折れ  
て、端部が強く上方に折れる皿または  
盤。2109は香炉で、淡い釉薬がかかる。



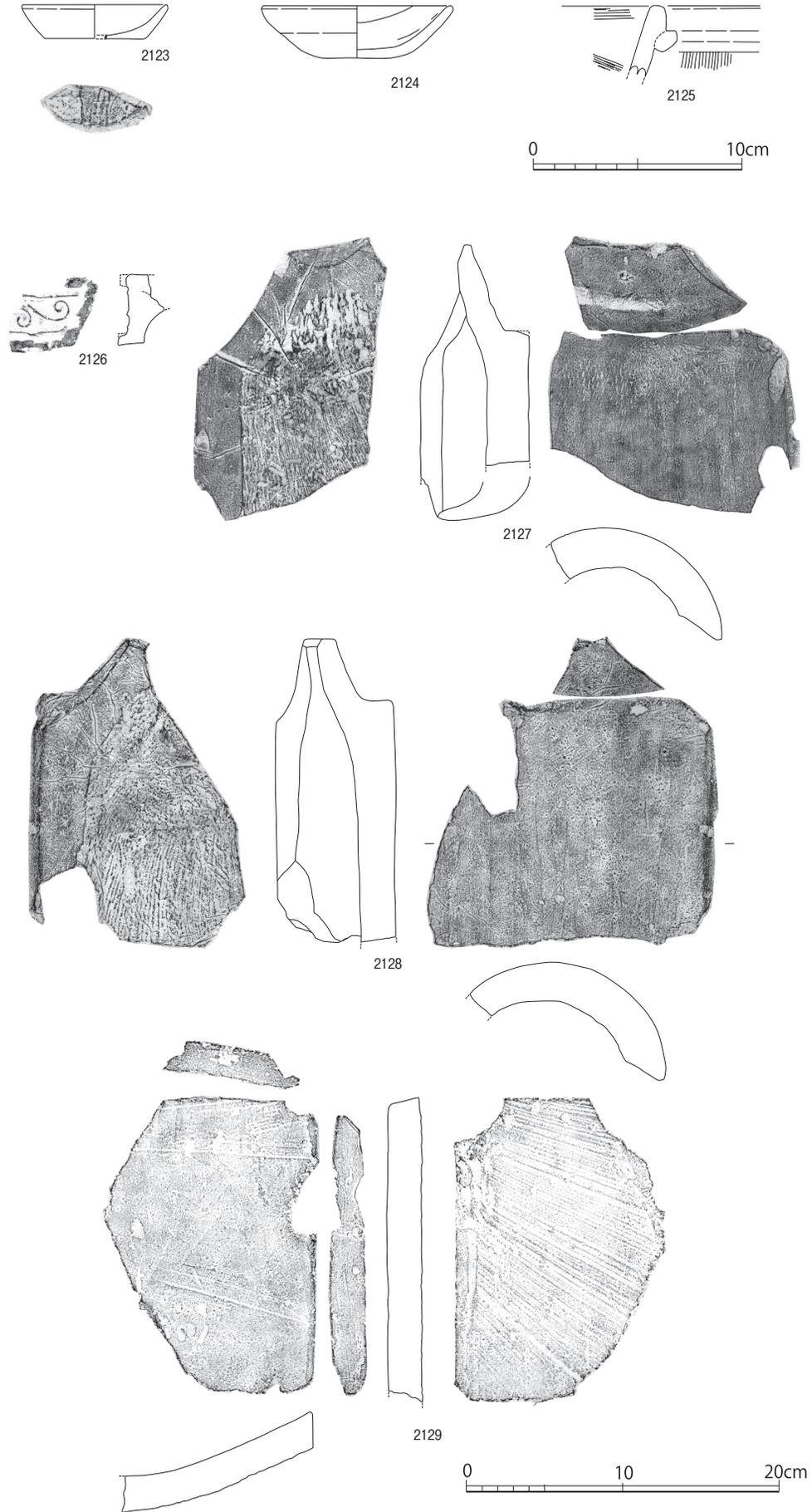
第273図 SD060出土遺物(1/3)



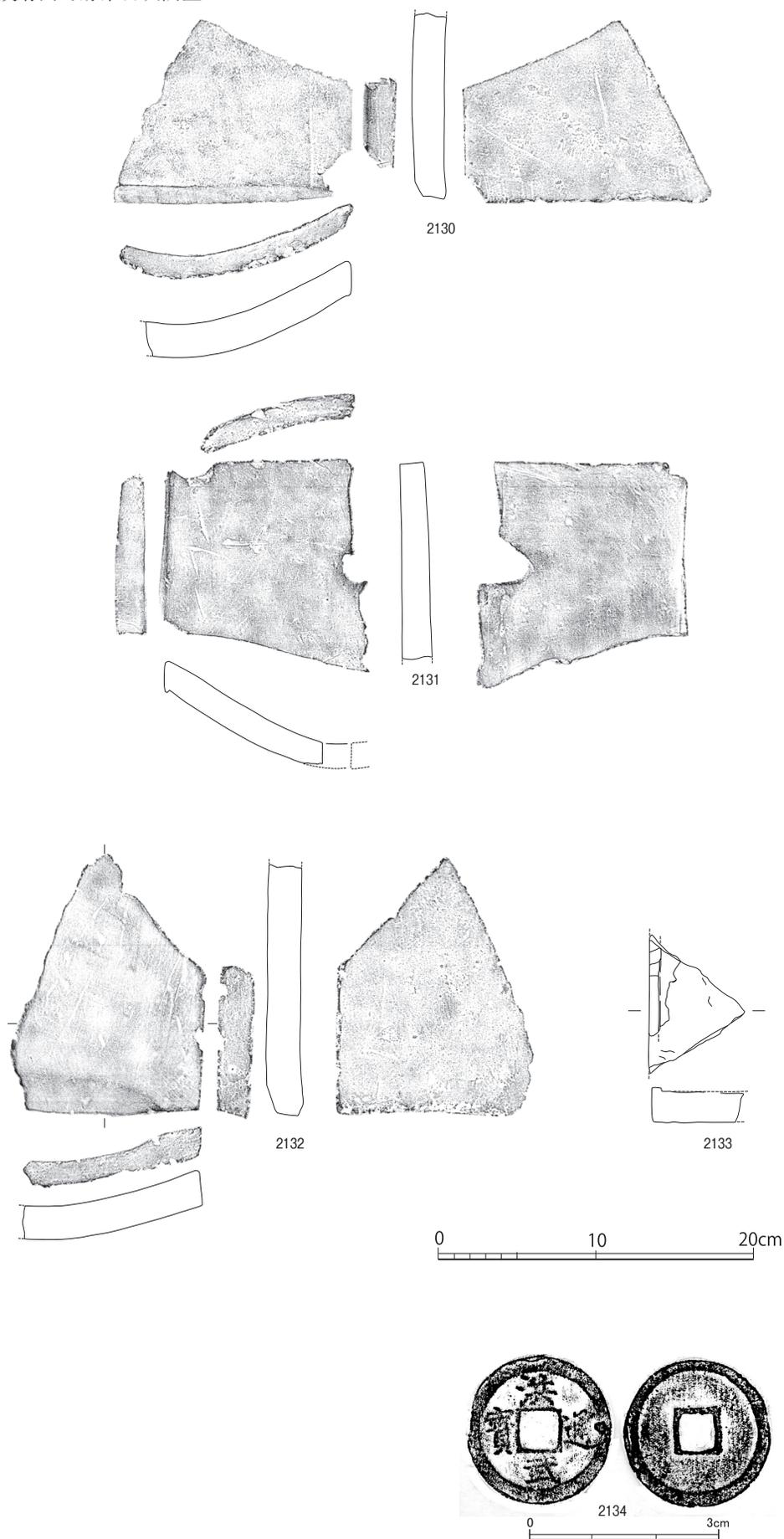
第272図 SD060A SD060B(1/80)



第274図 SD060A出土遺物(1) (1/3)

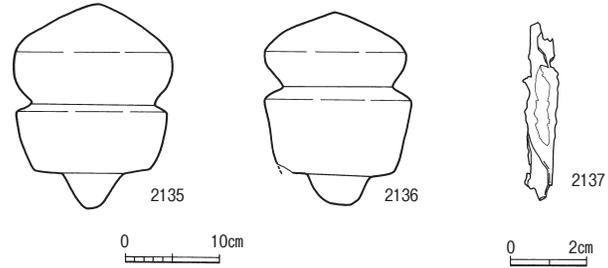


第275図 SD060A出土遺物(2) (1/3, 1/4)



第276図 SD060A出土遺物(3) (1/1, 1/4)

中国南部の産か。2110は中国産の鉢、2111は同じく中国産の播鉢である。2112は産地不明の焼締陶器、2113から2116は備前焼。2117から2122は瓦質土器。2117は香炉、2118は碗、2119から2122は火鉢。2123は糸切り底の土師器小皿、2124は京都系土師器である。2125は突帯を巡らせる素焼きの鍋。2126から2132は瓦で、2126は蔦が上向きに強く巻くもので、中心飾りが菱形になるa類か。2127と2128は丸

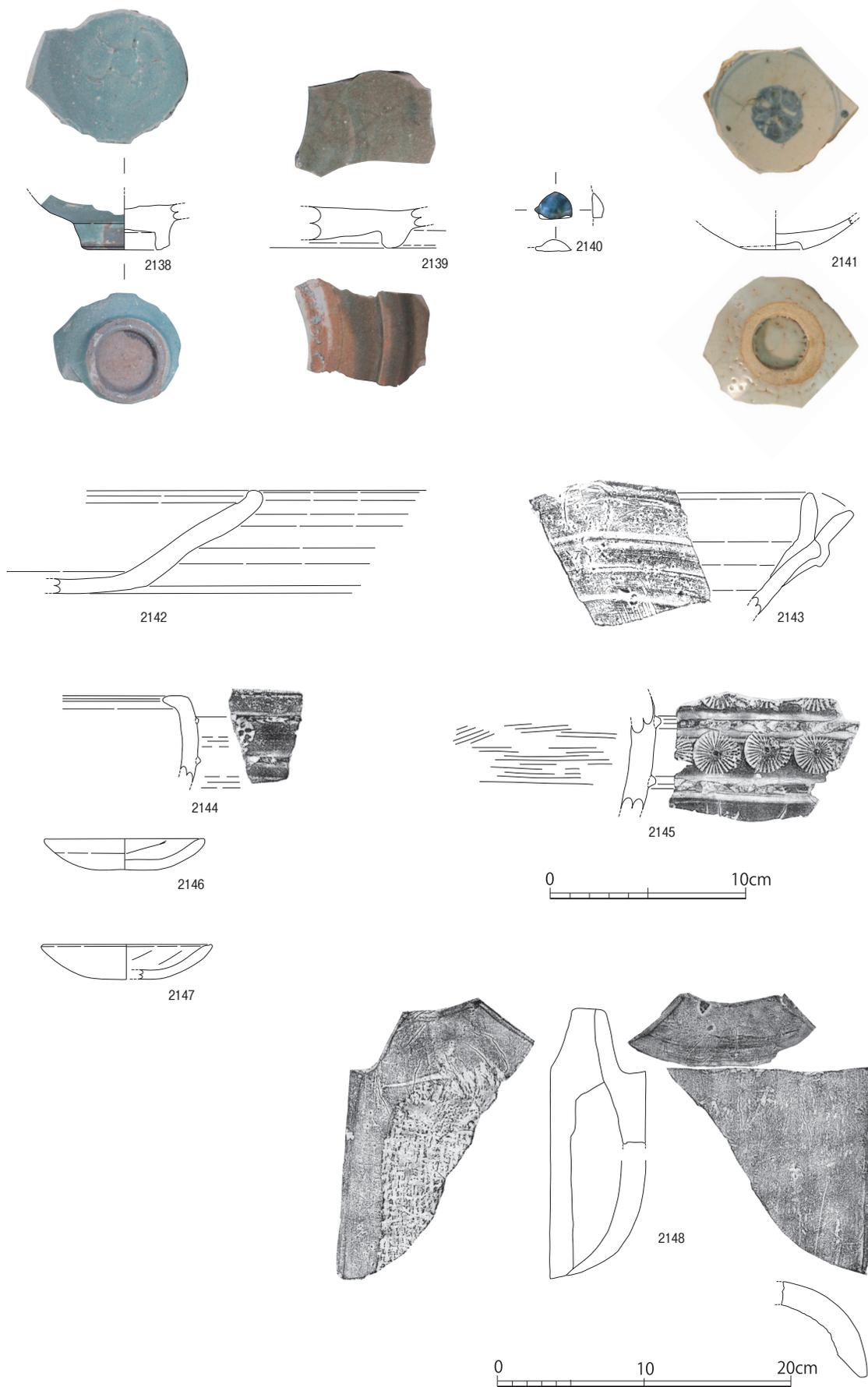


第277図 SD060A出土遺物(4) (1/2, 1/8)

瓦、2129から2132は平瓦である。2133は赤間石の砥石。2134は銅銭で洪武通宝である。2135と2136は五輪塔空風輪。2137は銅製で棒状を呈する。

第278図2138から2148はSD060B出土。2138と2139は青磁。2138は無文の碗。2140は景德鎮青花。摘みか。2141は漳州窯青花の皿。2142と2143は備前焼。2142は鉢、2143は播鉢。2144と2145は瓦質土器火鉢。2146と2147は京都系土師器。2148は丸瓦。

遺構の時期は、備前焼が中世5期bから6期aで、C群の青花皿の存在も合わせ考えると、15世紀後半から16世紀前半ということになるが、やや古手の京都系土師器の存在を考慮すると、16世紀代でも中頃に近い年代か。



第278図 SD060B出土遺物(1/3,1/4)

SD156 (第279図)

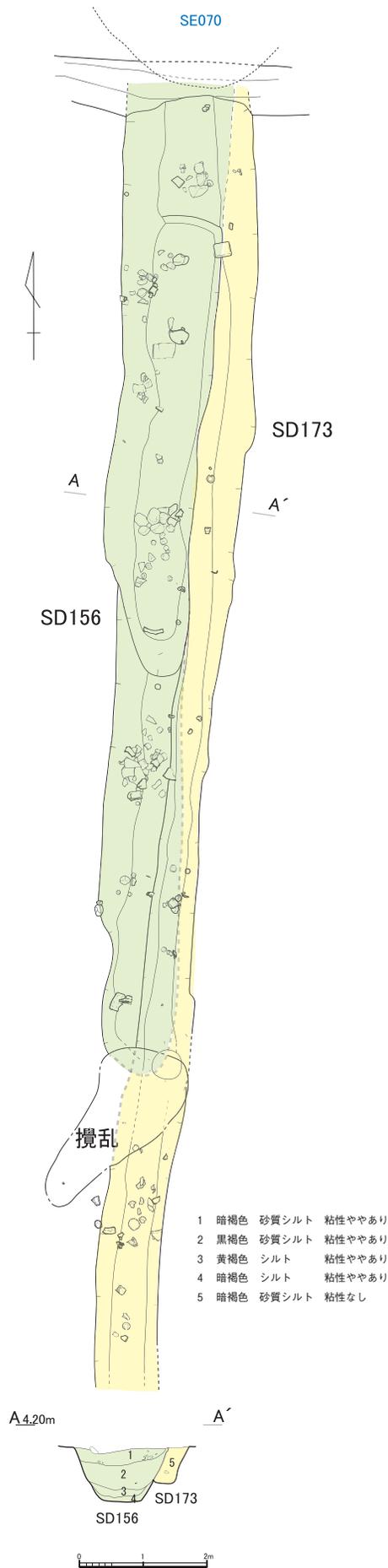
調査区の南西部で、南北に延びる溝である。SD173と重なるように切っており、調査区南端手前（攪乱のところ）で終わる。北側はSD174に切られており、その北側ではSE070やSD033Aがあって存在を確認できなかった。しかし、SD033Aの北側では検出出来ていないので、これらの遺構が重なったあたりで終結するものと考えられる。検出出来た長さは19.8m、幅は最大で1.50m、狭い所で1.30mで、深さは0.8mである。また、調査時点では表面からは確認できなかったが、完掘時に丁度中程で更に2本の溝が切り合ったものであることが確認できた。切っている方をSD156A、切られている方をSD156Bとする。しかし、一括で取り上げた遺物も多く、時期の特定を困難にしている。

2本の溝

出土遺物は第280図2149から第286図2237で、AとBどちらに帰属するか判る遺物は一覧表にその旨記載している。2149から2162は青磁。2149は細線式の蓮弁文が描かれ、見込みには文字がある。2150は見込みに印花文がある。2151は見込みに印花文がある碗。2152は無文である。2153は見込みは露胎で、中国南方系の青磁碗。2154と2155は口縁端部が小さく外反する碗で、2154は無文、2155は篋描きの直線文がある。2156は腰折れの皿。2157は口縁部があまり反らないが、盤と考えられる。内面は蓮弁文が太く彫られ、口縁端部は輪花状に刻まれている。2158と2159は鏝縁の盤。2158は稜花になる。2160は底部の破片で器種不明。2161は内面底部まで施釉されておらず、香炉のようなものかもしれない。2162は口縁部が外反する小型の鉢で、あるいは高坏の坏部かもしれない。

2163と2164は白磁である。2163は見込みと高台裏に砂目の跡が残る碗である。2164は小型の杯で、腰がすどく屈曲するところから、八角杯になると思われる。

2165は朝鮮王朝産の瓶で、全面を菊輪文が退化した印花で覆う。2166と2167は中国産の壺である。2168は瀬戸美濃系の天目碗。



第279図 SD156 SD173(1/100)

備前焼 2169から2178は備前焼播鉢である。乗岡編年中世3期後半から中世5期のものである。2179は備前焼壺、2180は甕で、播鉢と同時期のものである。2181は常滑焼甕である。

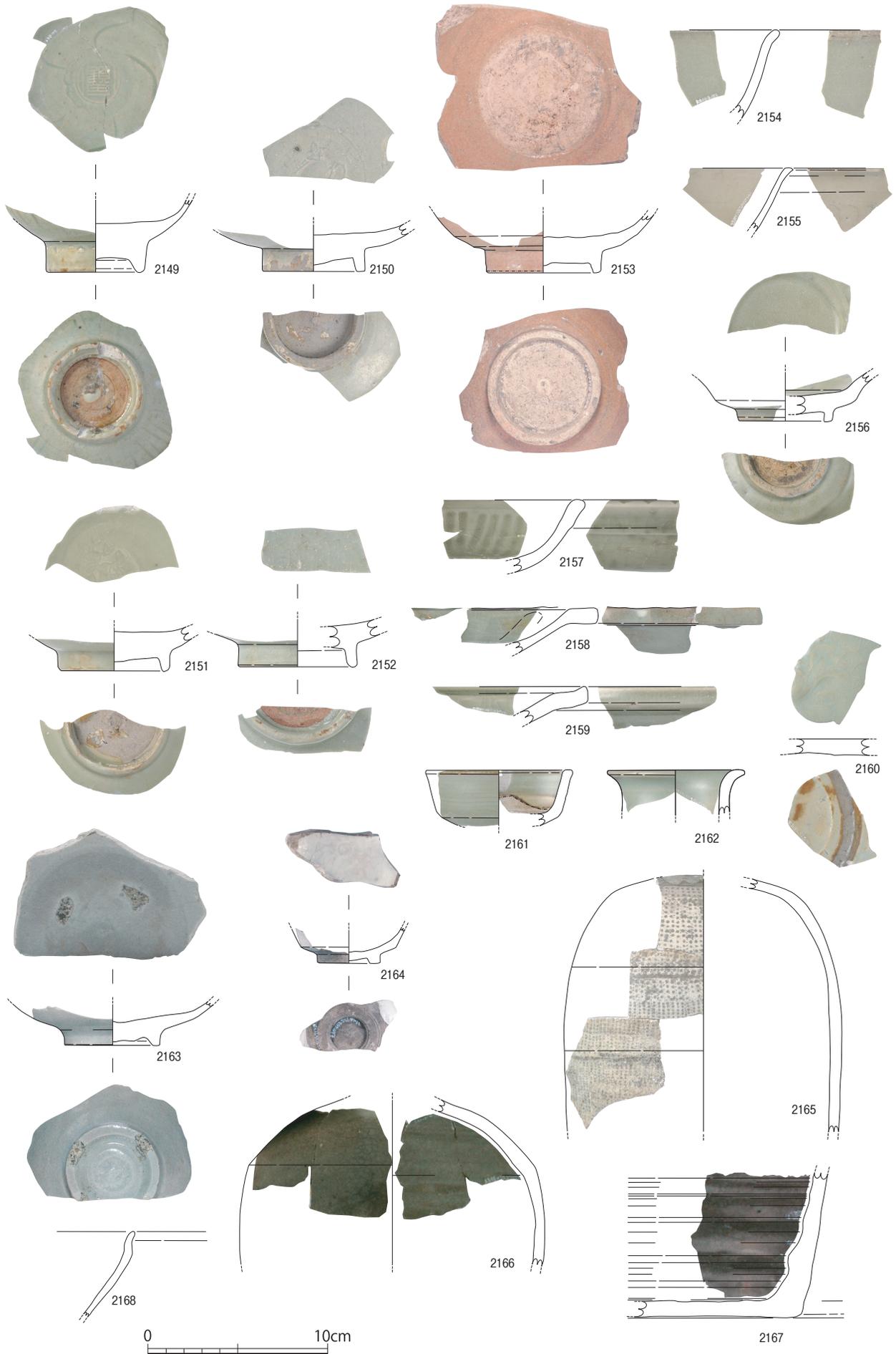
瓦質土器 2182から2214は瓦質土器である。2182は浅い皿状になったもの。2183は碗で、天目茶碗を写したもの。2184と2185は小型の香炉。2186と2187も香炉か。2188から2190は風炉。2188と2189には窓の切り込みが残る。2191から2195は浅鉢状の火鉢で、2191と2192には菊花の、2193から2196、2198は花菱繋ぎのスタンプを押す。2197は菊花文を押す破片。2201は雷文。2202は菊花文を押す深鉢。2204から2207は雲板状のものを伴う猫足。2208と2209は板状の脚を持つ深鉢。2210から2212も深鉢などの脚。2213は甕、2214は鉢である。

大内系土器 2215から2224は土師質土器。いずれも糸切り底である。在地のものは、直線的に開くものと、一度屈曲して開くものがある。2219から2221は大内系のもので、大きく直線的に開く。これらは胎土も異なり、搬入品である。2222と2223は小皿。2224は口縁部が外反する坏である。

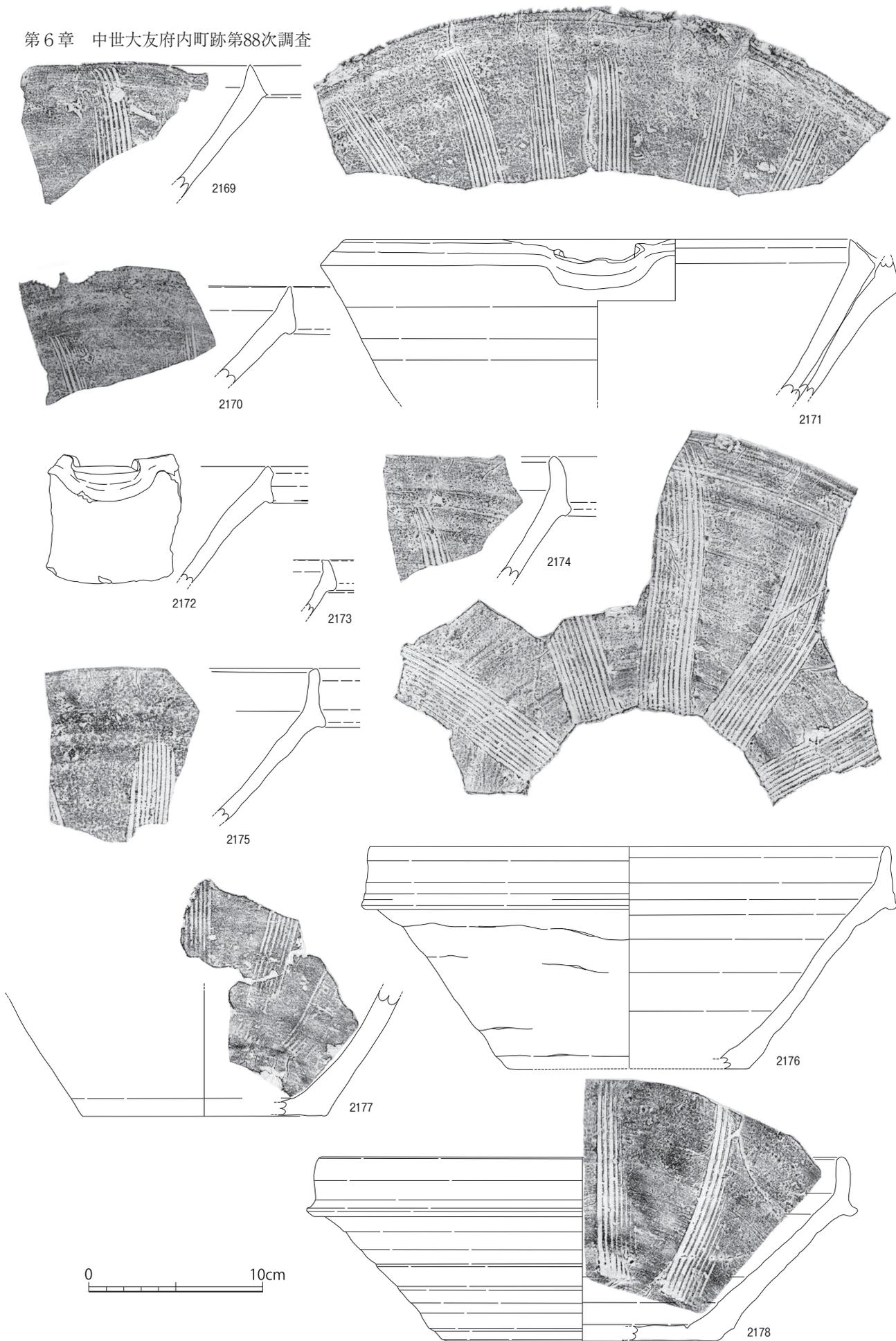
雁振瓦 2225から2231は瓦類である。2225は大きな巴文の軒丸瓦でA類か。2226は中心飾りに四菱文を持つa類で、2227も同範である。2228は丸瓦。2229は平瓦で、横幅は28cmと大型である。2230と2231は雁振瓦である。

ボタン状銅製品 2232と2233は土錘、2236は方柱状に加工した石。凝灰岩製である。2234はボタン状の銅製品、2235は断面方形の鉄釘、2237は銭種不明である。

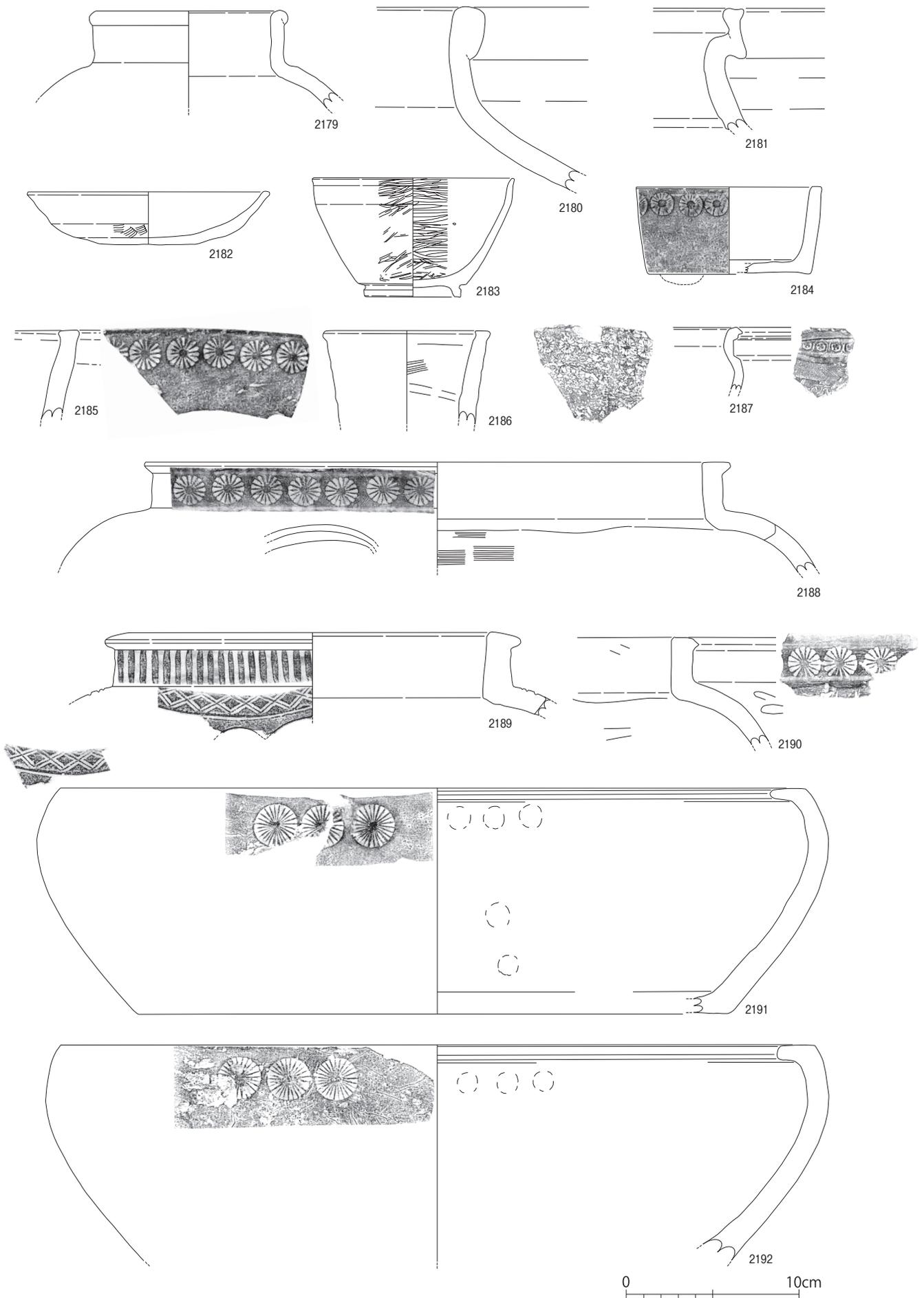
SD156の時期は、大内系土器を伴い、備前焼も15世紀代のものであることから15世紀後半代のものと考えられる。



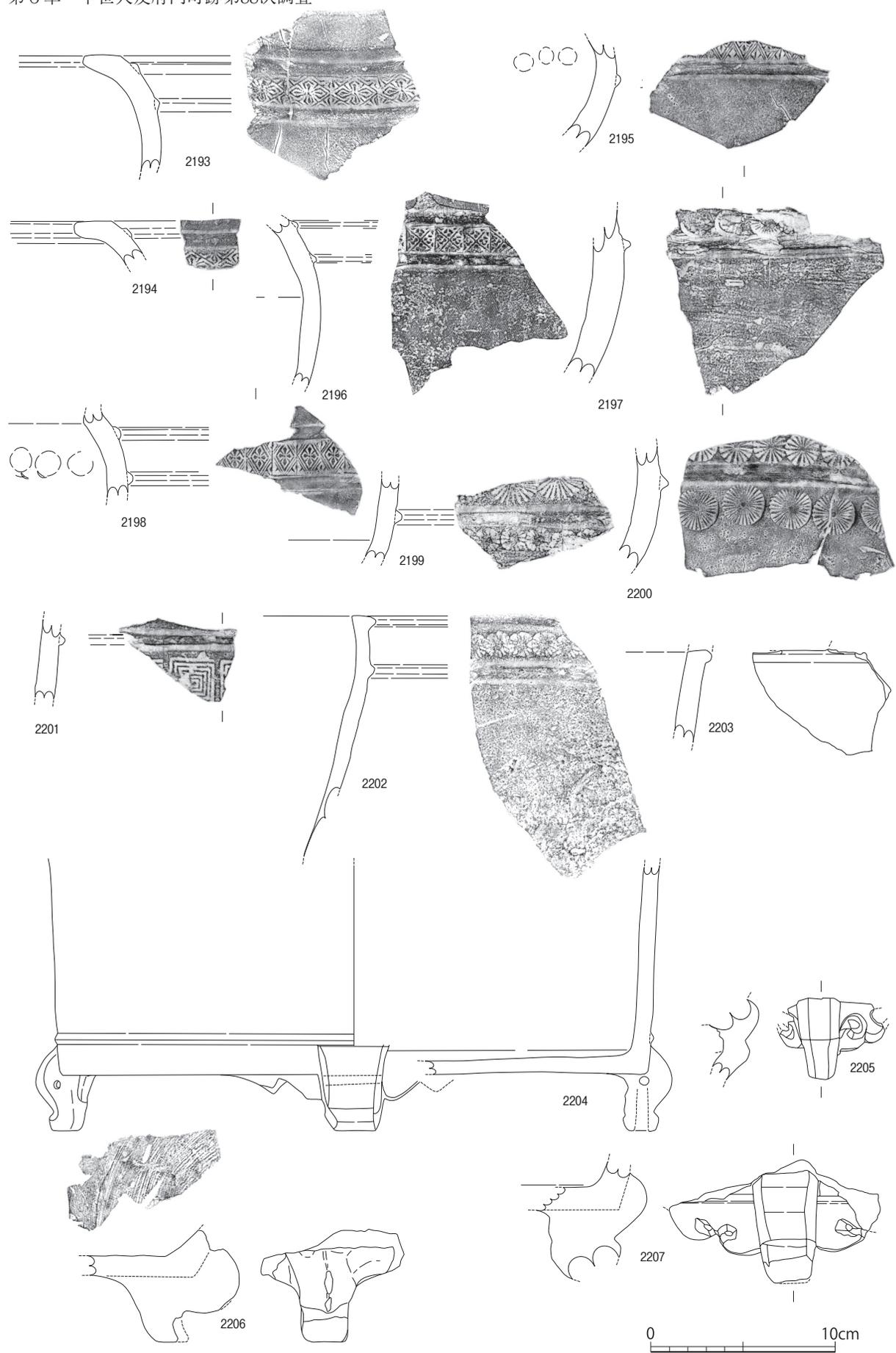
第280図 SD156出土遺物(1) (1/3)



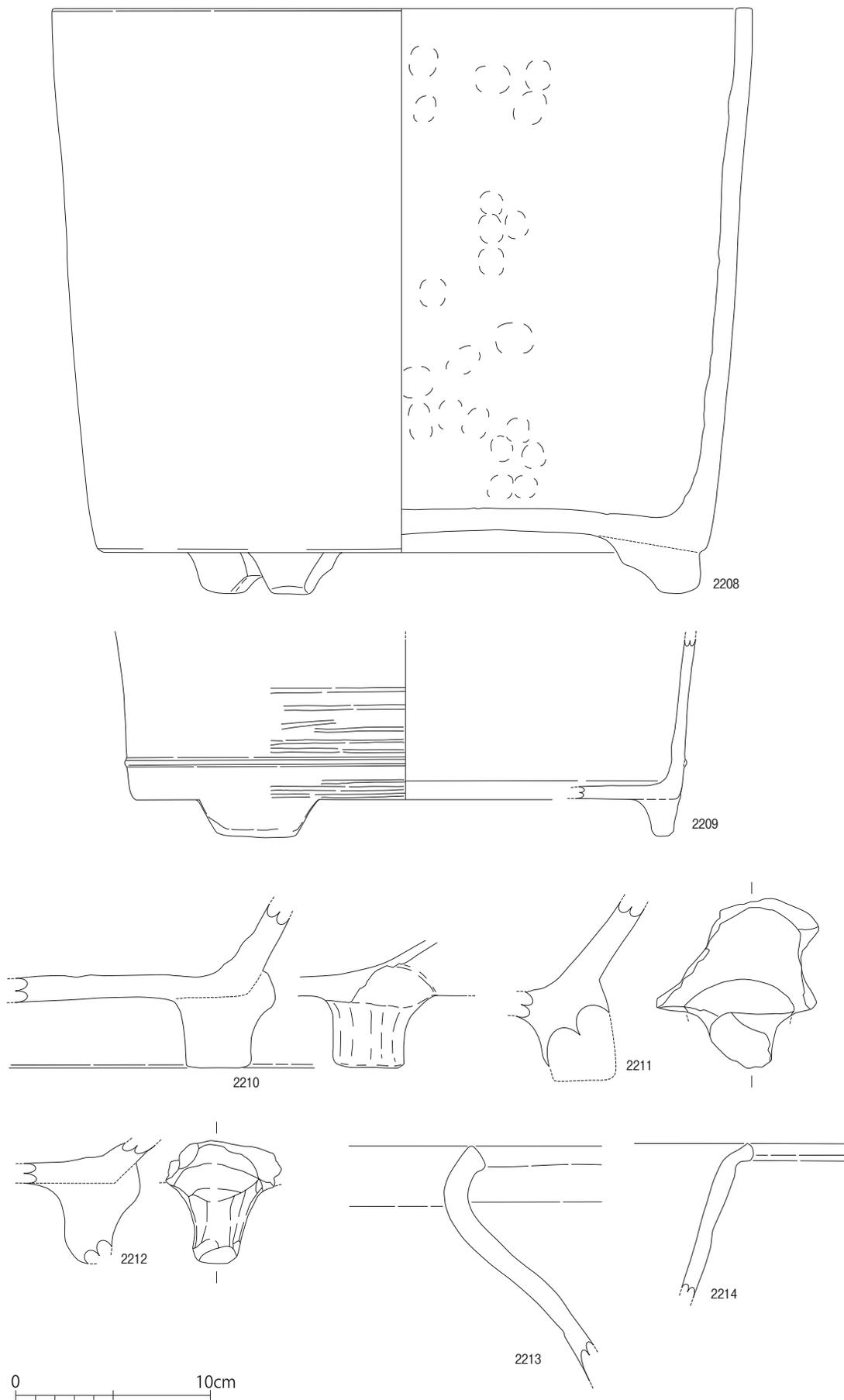
第281図 SD156出土遺物(2) (1/3)



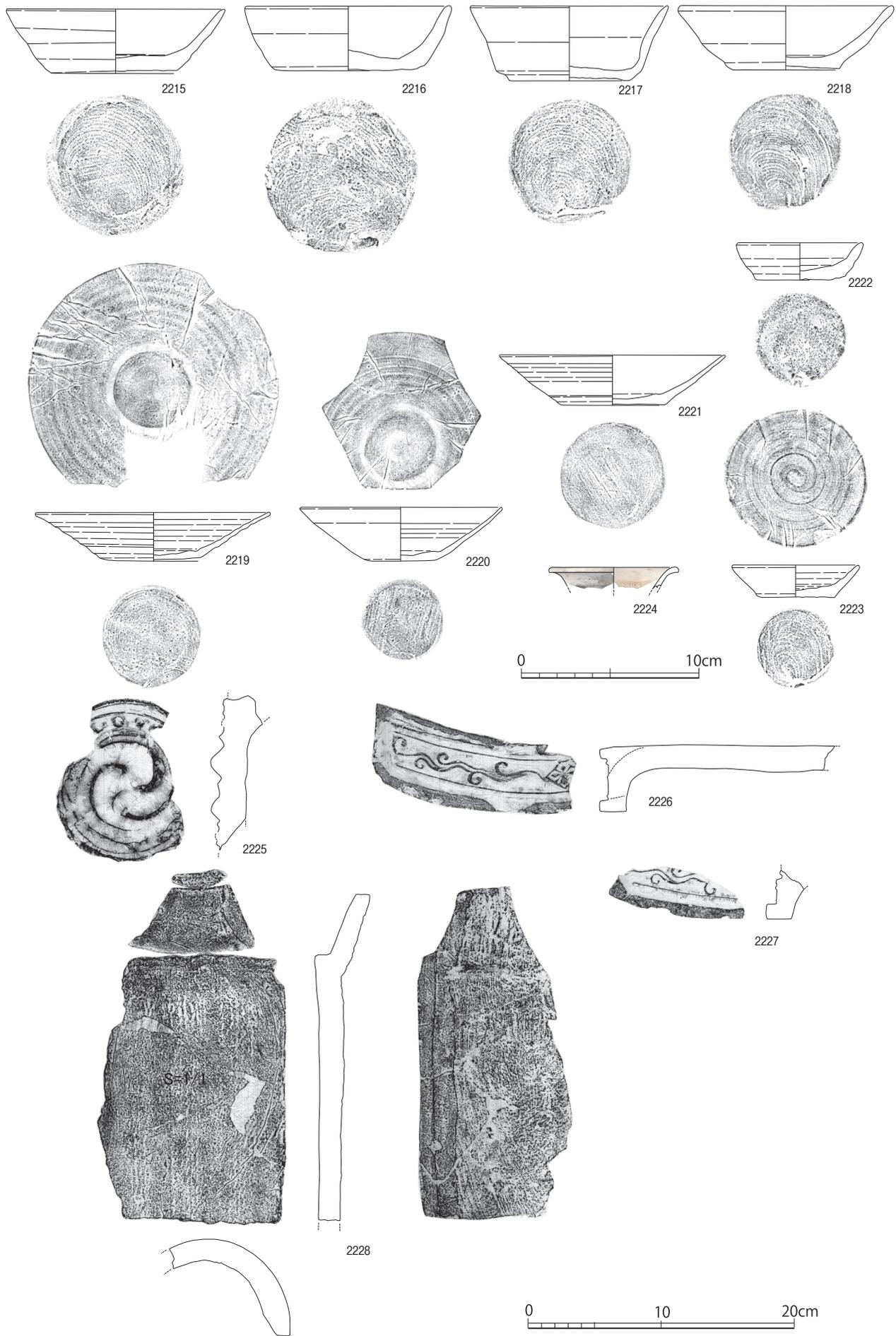
第282図 SD156出土遺物(3)(1/3)



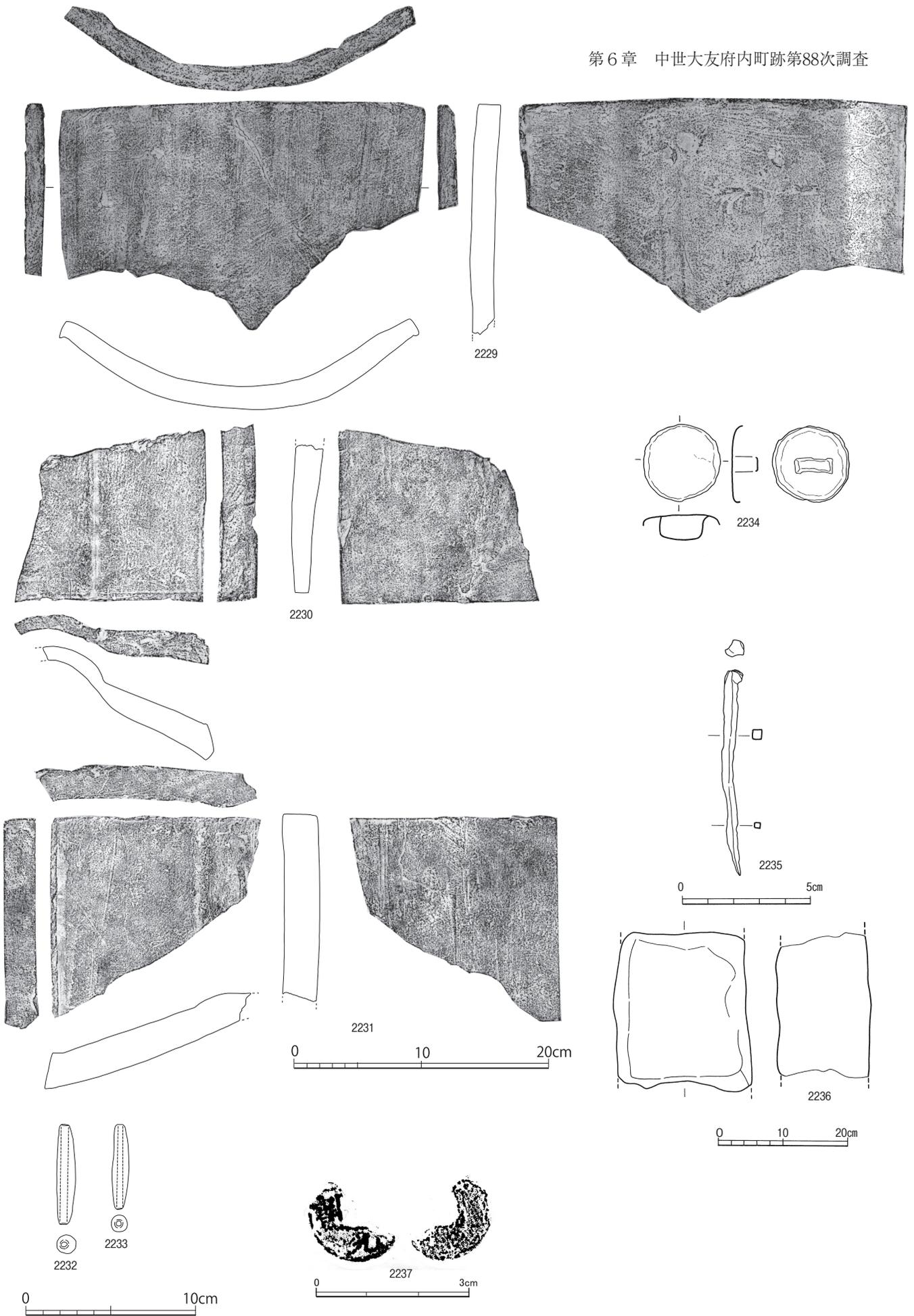
第283図 SD156出土遺物(4) (1/3)



第284図 SD156出土遺物(5) (1/3)



第285図 SD156出土遺物(6) (1/3, 1/4)



第286図 SD156出土遺物(7) (1/1, 1/2, 1/3, 1/4, 1/8)

SD160 (第287図)

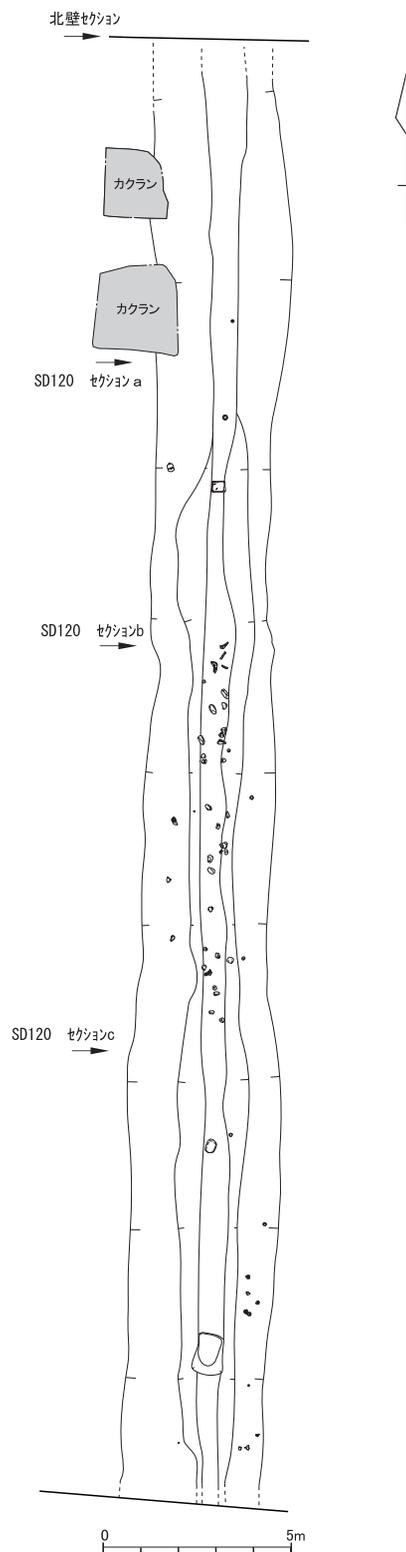
第2南北街路やSD120に平行して南北方向に延びる溝である。南北街路やSD120がほぼ座標軸に乗るのに対して、SD160は北に行くほど僅かに東に振れている。SD160の西側の立ち上がりはSD120によって切られており、幅は復元であるが3.1~4.0m、深さは1.8mである。土層図(第3、111~113図)を見るとわかるように、数度の掘り直しが認められる。この溝は、南に繋がる第11次、第80次、第72次でも確認されており、第72次調査区内において東に屈曲しているのが確かめられている。つまり、府内古図

「称名寺」を  
囲む堀

に描かれた「称名寺」を囲む堀ということになる。出土遺物は第288図2238から第293図2315である。2238から2245は青磁。2238は内面に片切り彫りで大きく花文を描く。2239は見込みに櫛描き文を持つ皿。2240と2241はいずれも盤の底部か。2242は腰折れになる稜花皿。2243は鍔縁の盤の口縁部で、稜花になる。2244は焼きのあまい青磁碗。2245は朝鮮産の象眼青磁である。器種は不明。2246と2247は白磁。2246は口縁端部が小さく反る碗。2248は中国産の四耳壺で、SD071とSD162出土破片と接合した。2249から2258は備前焼。2249から2252は壺、2253は甕、2254から2258は播鉢。2259と2260は須恵質の鉢。2261は瓦質の卸皿。2262は常滑焼の甕。2263から2281は瓦質土器で、2263と2270から2273は風炉、2264から2268、2274と2275は火鉢と考えられる。2276は壺、2277から2281は生活雑器で、鍋や鉢である。2282から2300は土師質土器である。2282から2287は坏、2288から2296は小皿で、いずれも底部は糸切りである。2286と2287は大内系、他は在地のものである。2297は碗、2298から2300は鍋。2301から2303は瓦。2301は丸瓦、2302と2303は平瓦。2304は素焼きの大型土錘、2305も素焼きの土錘。2306は土器片を加工したメンコである。2307は須恵器高坏で古墳時代後期のもの。2308は石臼の下臼。2309は石鍋の加工品、2310は石鍋、2311から2313は銅銭である。2311は熙寧元寶、2312は元豊通寶、2313は聖宋元寶である。2314は五輪塔空風輪、2315は火輪である。

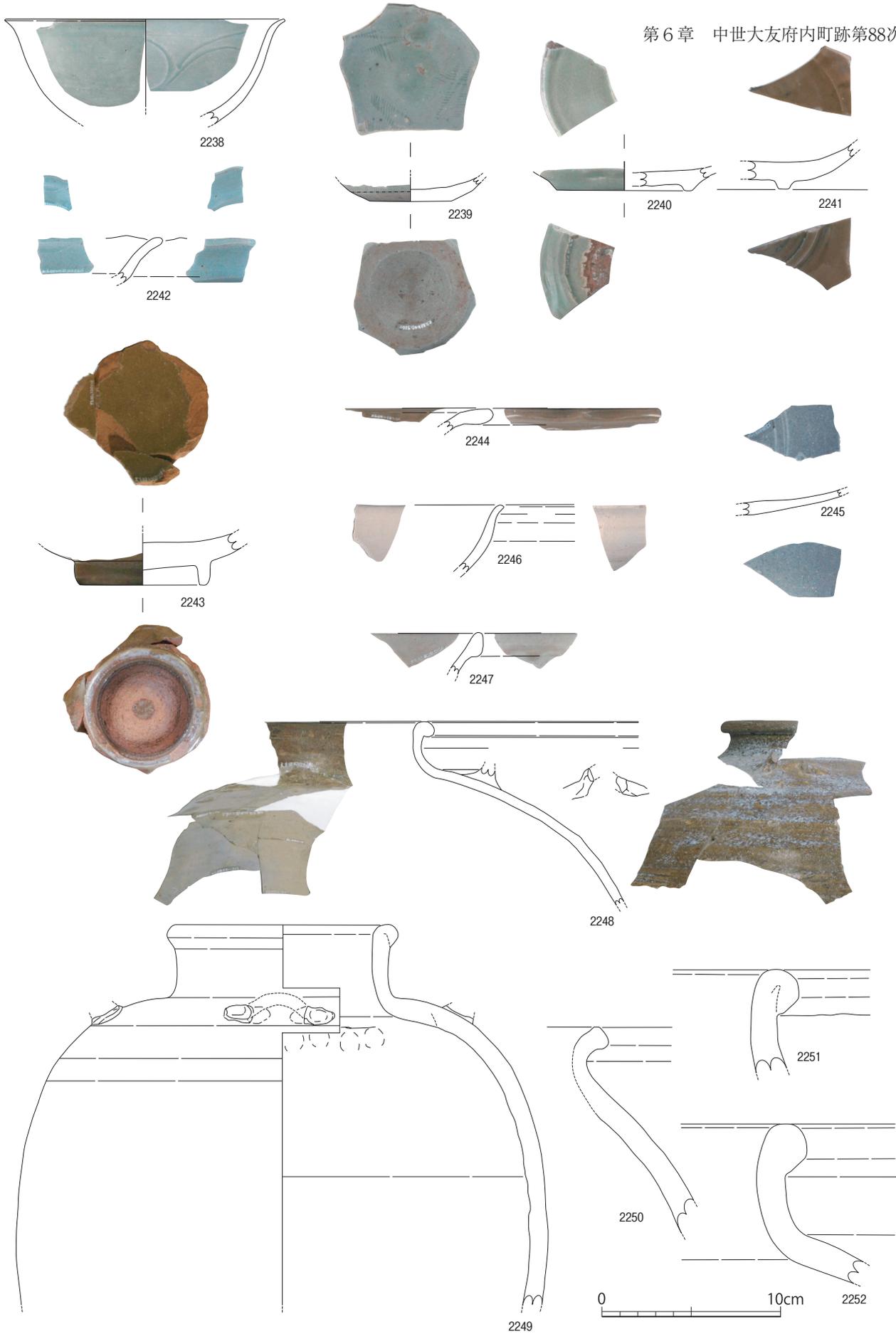
象眼青磁

遺構の時期は、12から13世紀に遡る遺物(2238や2247など)もあるが、主体は15世紀代である。在地の土器において、未だ内面に轆轤痕を明瞭に残すものが出現しておらず、15世紀末までは下らない。

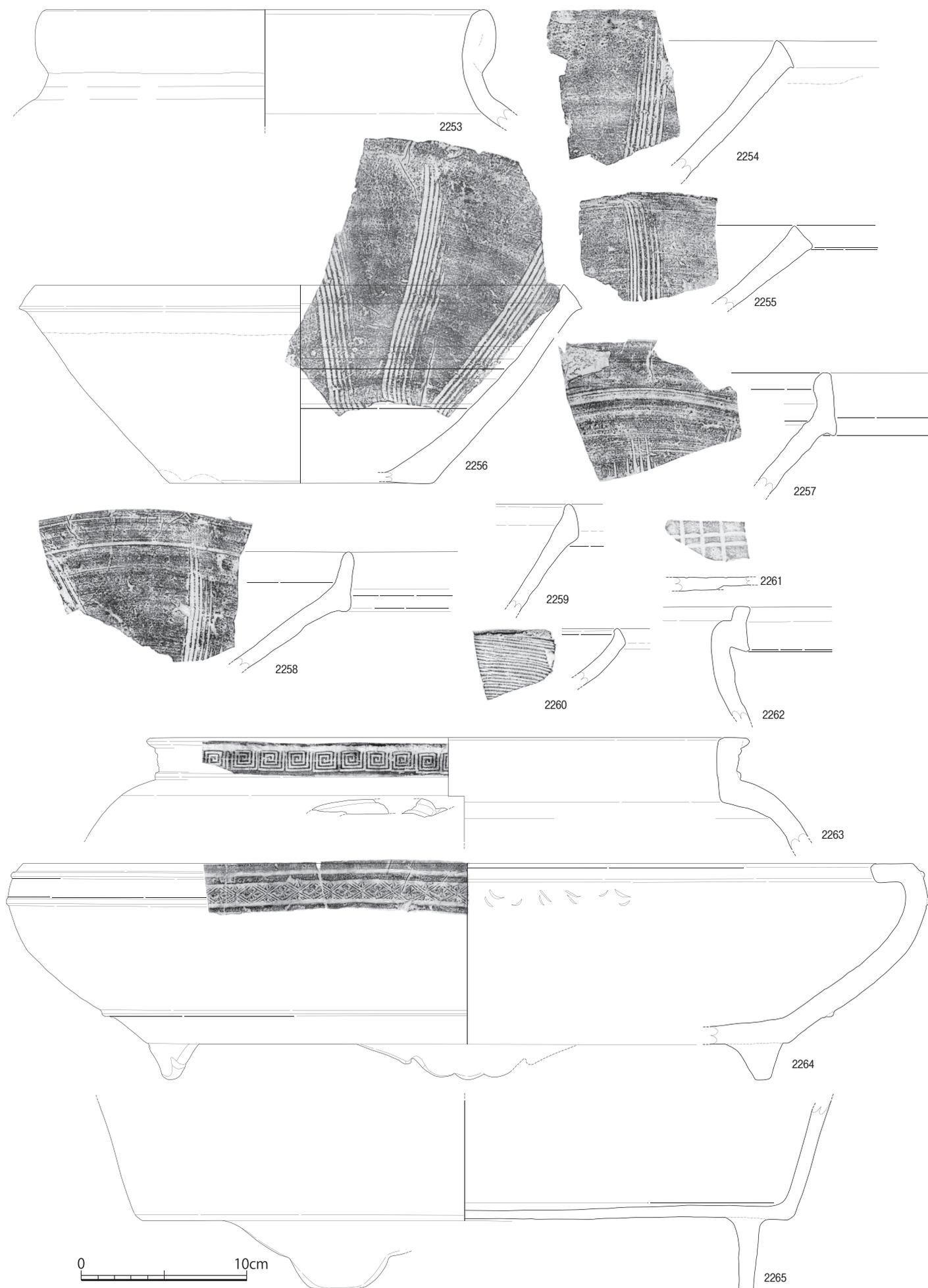


土層図については、SD120の土層図を参照のこと

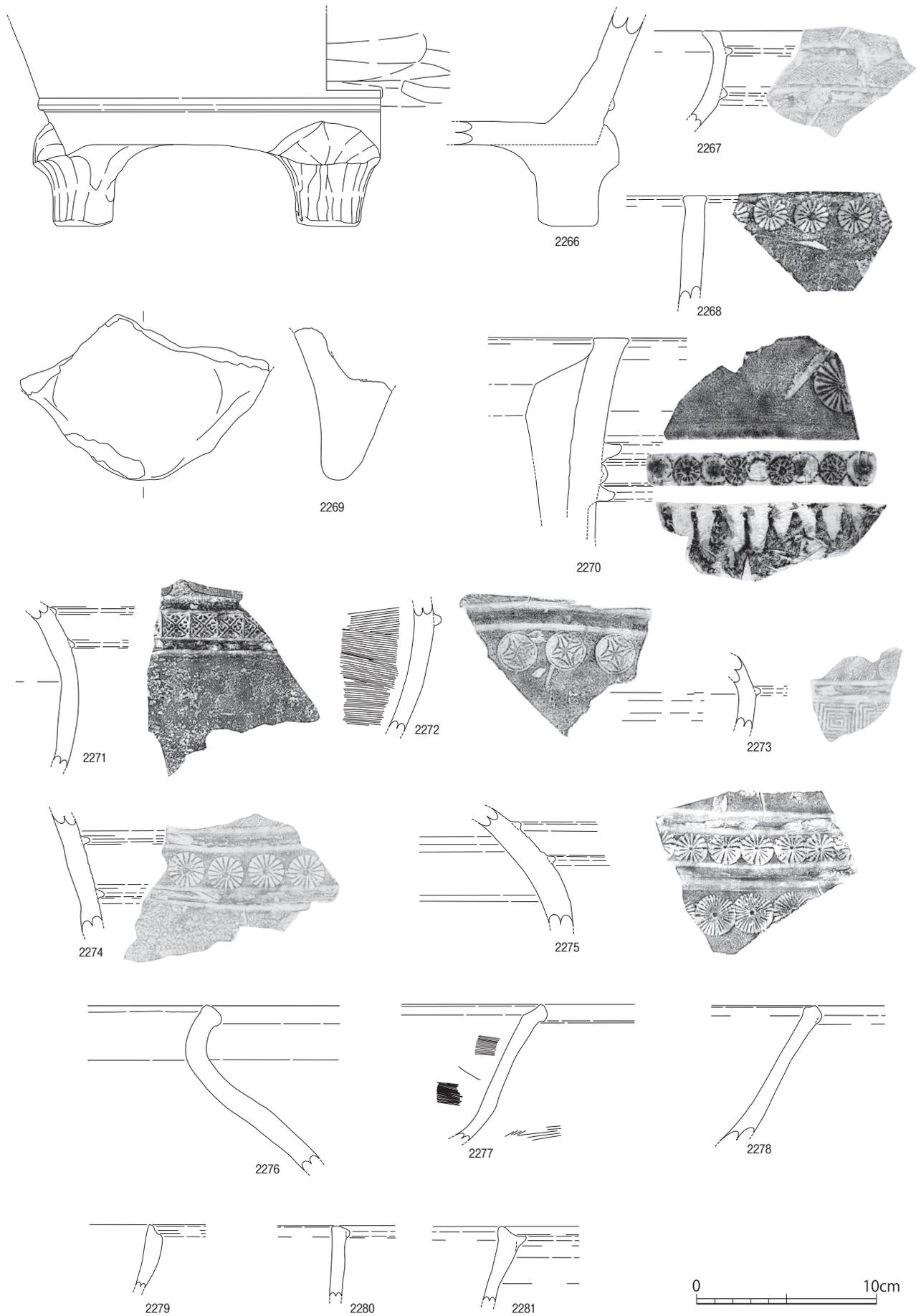
第287図 SD160(1/200)



第288図 SD160出土遺物(1) (1/3)

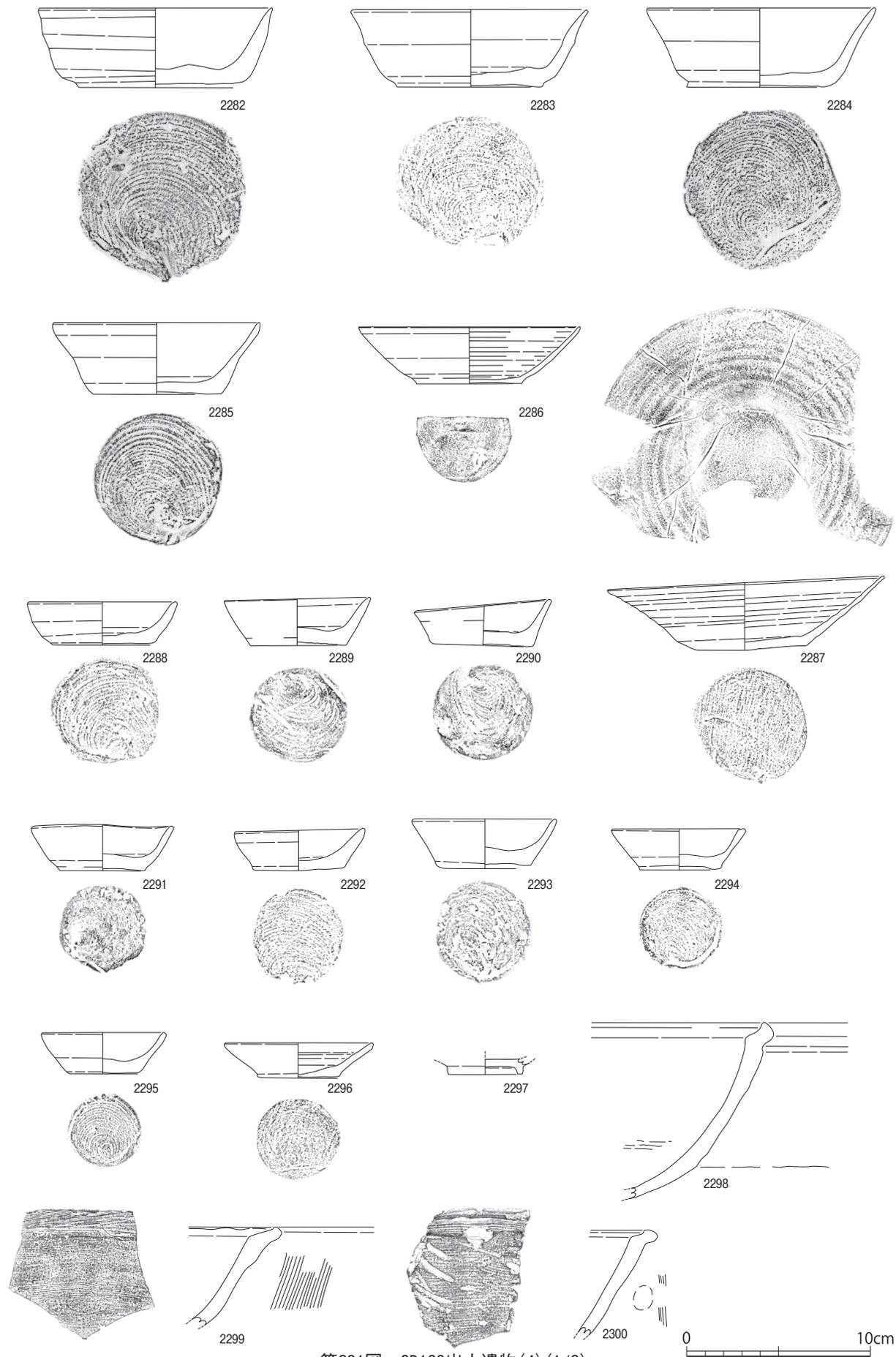


第289図 SD160出土遺物(2) (1/3)

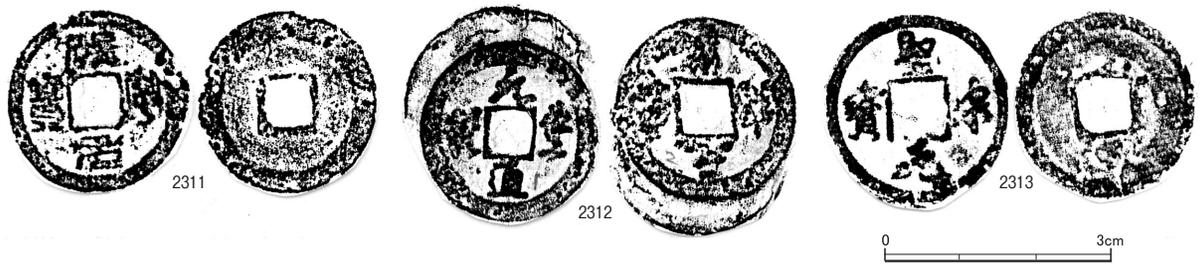
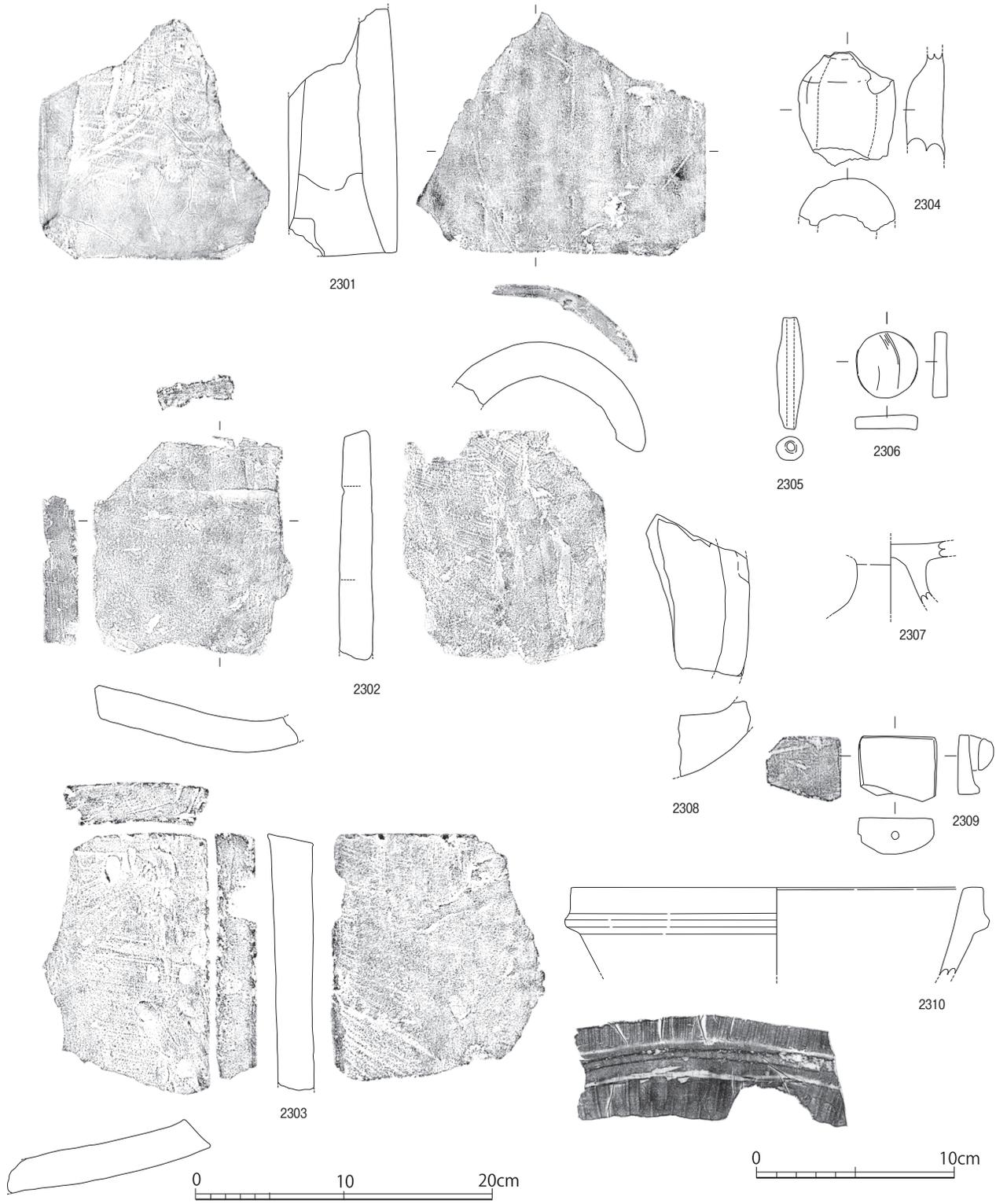


第290図 SD160出土遺物(3) (1/3)

第6章 中世大友府内町跡第88次調査



第291図 SD160出土遺物(4) (1/3)



第292図 SD160出土遺物(5) (1/1, 1/3, 1/4)